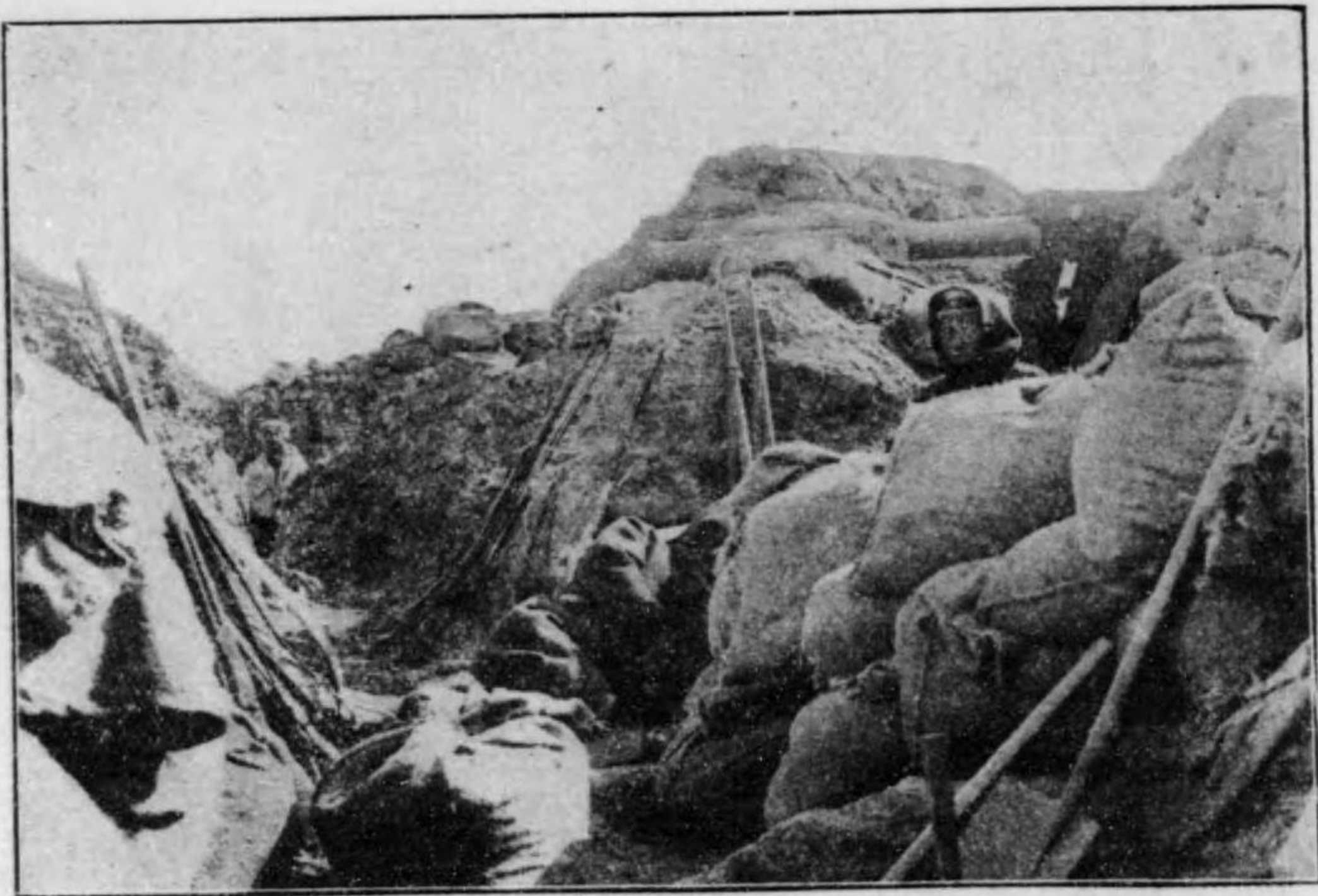


盤龍山西砲
臺占領

一戸旅團の
手柄

盤龍山東砲
臺占領



部一ノ部喉咽臺砲西山龍盤ルケ於ニ後領占

開けることも出来ぬ中で、一門の速射砲が時々發射を續けて居る、其勇氣に敵は感心したと堪へぬ然し無烟火薬は缺乏したと見へて、有烟火薬で發射して居る然るに我砲兵の射撃は益々烈である敵は隠れる處はない、多くは戦死し、残るものは退却し、午後一時三十分頃に至り、盤龍山東砲臺は漸く我一戸旅團の手に落ち、日章旗は掲げられた。
午後五時濱口大尉は、服部隊の二中队を率ゐて到着した、此時西砲臺の敵も動搖の色あるを見て、一戸少將は濱口隊をして、猛烈に突撃を行はしめ、東

二十三 第一回總攻撃

砲臺の一角
奪取

旅順包圍戰

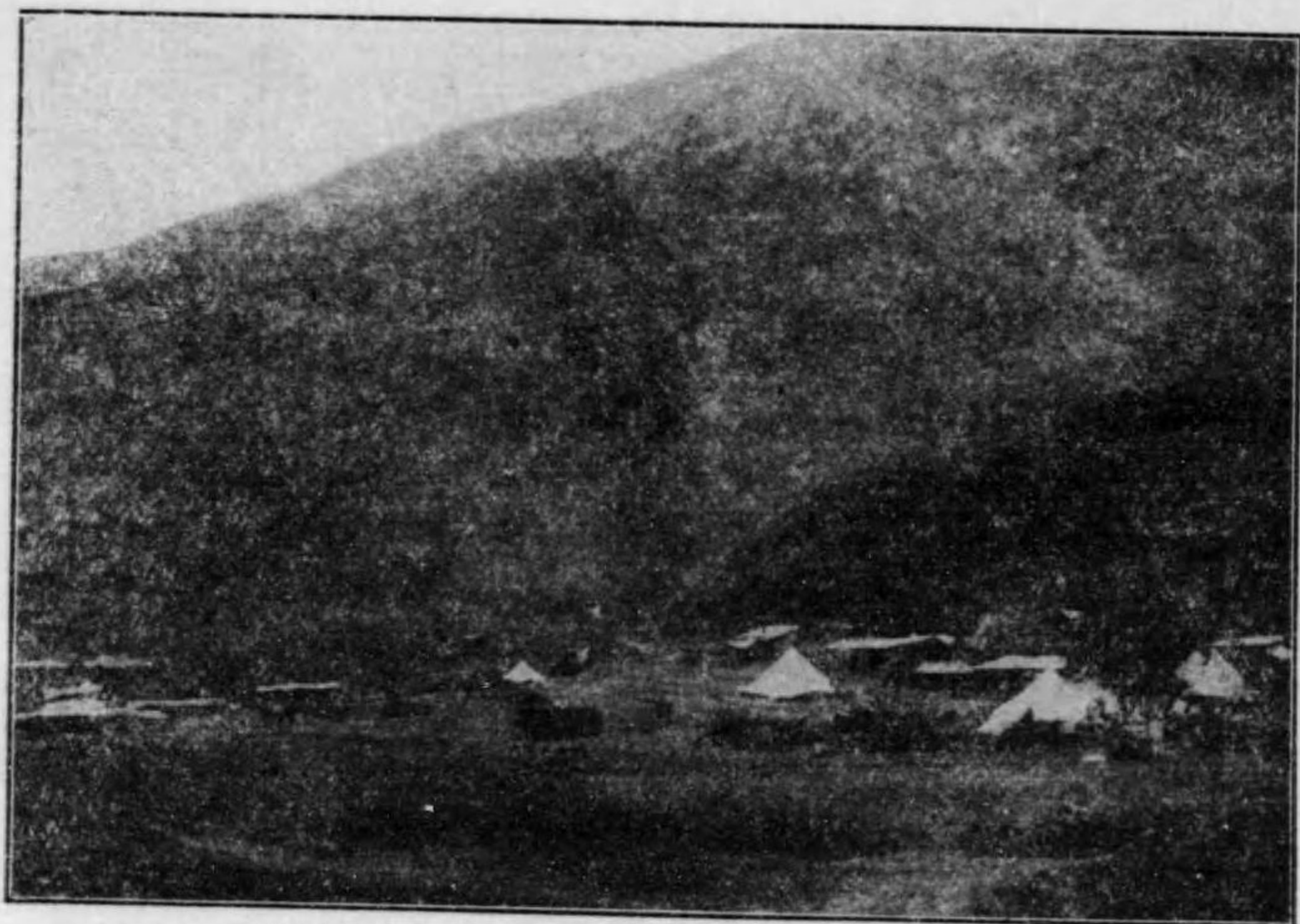
かな即死し、兩中島一等卒は重傷を負ふた、然し此爆破に依り敵の狼狽靡するを見て、機を察するに敏なる粥川大尉は、残兵を指揮して猛烈に突貫し、三原隊の一部と山本大隊も續行し、一大混戦となり、遂に砲臺の一角を奪取することが出来た、然るに敵は猛烈に銃砲火を浴せ掛け逆襲に轉じた、一旦占領したる一角を棄て、退却するか、首尾克く持續し得るか實に危機一髪である。
此時後備歩兵第八聯隊は増援として第一線に進んだ。
此間我砲兵は猛烈に砲撃を加へた、敵も中々強い弾丸は霰の如く飛來り目を



蓋掩ノ口リ登臺砲東山龍盤

死高城中佐戰

死傷七千四百餘人



營幕ノ部令司團一十第ルケ於ニ麗北東ノ山孤大

砲臺よりの掩護射撃も効を奏し、西砲臺の第一線も亦我占領に歸した。然るに頑強なる敵は猶第二第三線に據りて勇猛に抵抗を續けて居る。然し我も劣らず數回の攻撃を行ひ午後八時遂に全部を占領した。

此日午前一時頃P堡壘に對し、後備歩兵第九聯隊は勇猛なる突撃を行ひしも、聯隊長高城中佐先づ敵彈に殛れ、續いて兩大隊長を始め以下二百三十四人戰死し遂に成效の見込なく攻撃を中止した。

二日に亘る激戰に於て、聯隊長以下の死傷は實に七千四百有餘人である。

左縱隊の攻撃

通路三條を開く

而して其得たるものは、盤龍山兩砲臺に過ぎぬ實に高價の砲臺である。

左縱隊即ち第十一師團の總攻撃に於ける部署は大略左の通りである。

各地區隊の攻撃目標は左の如し、

右地區隊歩兵第四十四聯隊は東雞冠山北堡壘、

中央地區隊歩兵第二十二聯隊は東雞冠山砲臺、

左地區隊歩兵第十二聯隊は東雞冠山東南砲臺、

各隊は今夜中に障礙物を破壊し突撃前進の準備を爲せ。

各地區隊は二十日夕刻より運動を起し、二十一日午前三時には目的地に着した。斯くて午前四時には敵壘に突入する豫定なれば、其以前に於て副防禦物を破壊せねばならぬ。其處で工兵作業隊を編成し、破壊作業に取り掛り、拂曉前右翼地區隊の工兵は東雞冠山北堡壘と、東南砲臺の電流鐵條網を切り、左翼地區隊に屬する工兵も殆ど同時に當面の鐵條網を破壊し、三箇所の通路を開いた。然るに中央地區隊の作業隊は敵の銃砲火猛烈にして、拂曉まで目的を達し得なう。然れど各隊は左右兩作業隊の造りたる通路より、突撃を實行するこ

右翼隊の奮

進んで死せ

北堡壘攻撃
の不成功

東路隊
北堡壘
の
奮闘

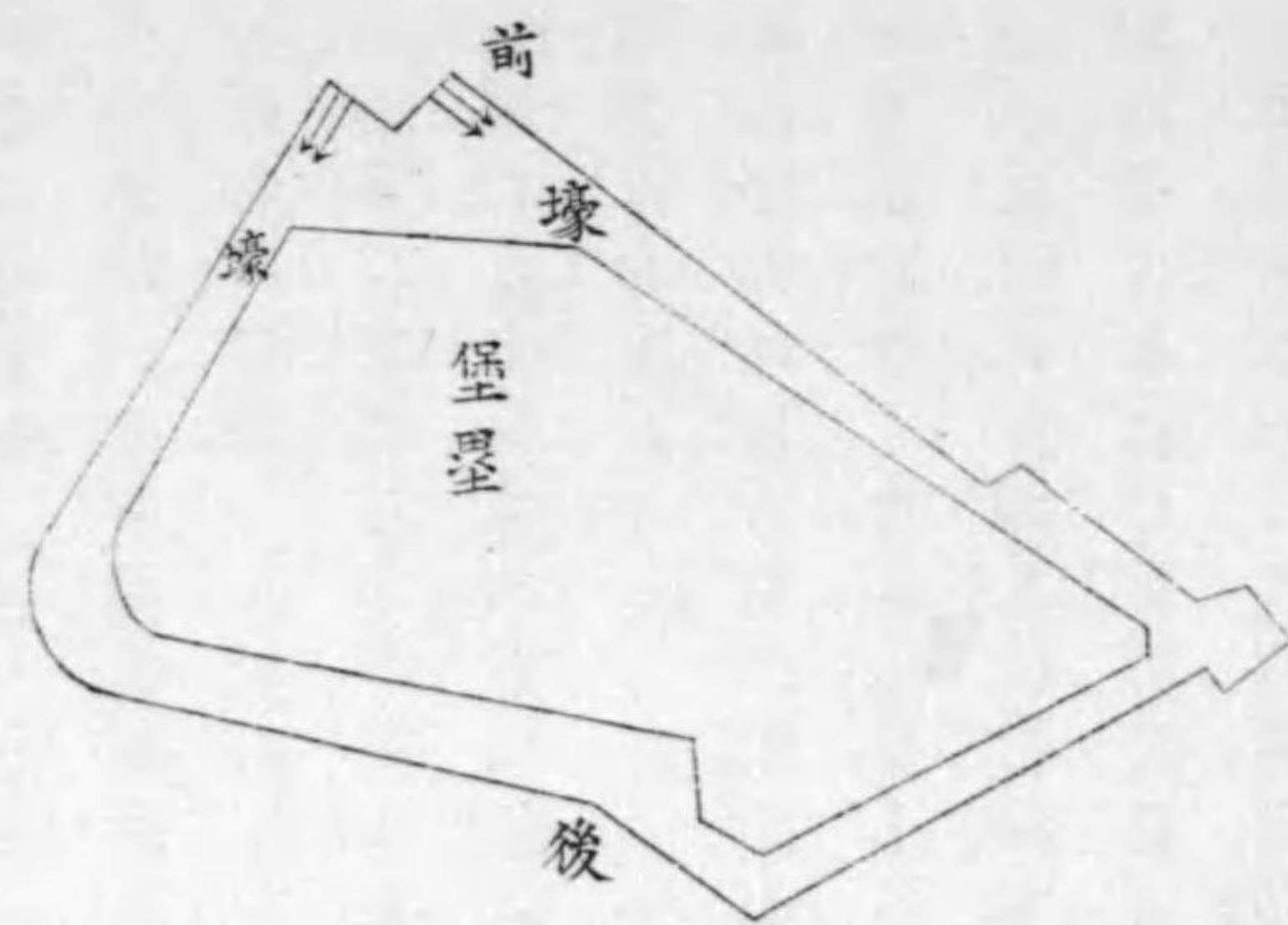
とに決した。

旅順包圍戦

既に鐵條網を破壊し前進路も開けたれば右翼地區隊は敵の猛烈なる銃砲
弾を冒して前進し第二大隊は北堡壘に向ひ敵の急射を受け死傷頻々たるに
も屈せず勇往邁進して外斜面まで肉薄した然るに壕は深くして到底渡るこ
とは出来ぬ携帶橋を掛けんと試みたけれど短くして間に合はぬ空しく斜面
に伏したる儘で何とも手の出し様がない敵は機關砲を亂射する死傷は續出
する進退谷まり形勢甚だ危殆に陥つた。

茲に於て我勇敢なる將卒は空しく止つて死傷するより寧ろ進んで死せん
と決心し奮然身を躍らして深き壕底に飛込んだ敵は側防穹害より機關銃や
側防砲を亂射し我軍は殆ど全滅に陥つた側防機關なるものは敵の飛込むの
を待つて居るので此處に飛込んでは何千人居ても五分間と保つことは出来
ぬ我日本軍は是まで側防機關の猛射に遇つたことはないので經驗はないけ
れど堡壘攻撃には能く研究して掛らぬと斯様な慘酷なる目に遇ふことがあ
る。

第一着の日
章旗



側防機關の事に就ては少し説明して置く必要があると思ふ。大きな永久堡

壘の壕は深さが十米位あつて壕の角の處に
穴藏が掘つてあつて其内に機關銃や速射砲
が据附けてある穴藏であるから上からは見
へぬ敵が飛込んで來ると撃ち始める近處
で撃つのであるから百發百中で長い槍で突
く様なもので一度飛込んだものは地獄に落
ちた様に生きて還る目途は殆んどない。是れ
が側防機關の特質である上の圖で矢の標の
書いてあるのが彈丸の出る方向である。

數本の日章旗が樹つて居る。是が敵の砲臺に日章旗を樹てた第一着だ。然るに
彈丸は三方より雨の如く來る。敵は是非とも追返さんと格闘が始まる。全く修

羅場である。石原聯隊長は豫備隊たる第三大隊を提げて、急行赴援せんとしたれど、到底維持の出来ざるものと見て、援護射撃をして、第一線部隊の勇氣を引き立て、居た。

恰も六時三十分、戦況視察に餘念なき師團長の側に、敵弾飛び來つて、堀内酒井の兩參謀を斃したが、天なるかな不思議にも師團長は無事であつた。

Q 砲臺に突撃したる吉永大隊の危急は、刻一刻に迫つて來る。師隊長は師團豫備隊たる歩兵第二十二聯隊第三大隊に増加を命じ、左翼隊長神尾少將に應援準備を命じた。

此時第九師團方面の戦況如何と見れば、昨夜半より數度の攻撃を試みたれど、一も成功せず、今は砲臺下の地隙に潜伏して、後の計畫を講じて居る有様である。其處で敵の彈丸は、折角突撃効を奏した左翼隊計りに、無數に雨注さるゝ、占領砲臺の維持は實に困難の極に達して居る。

左地區隊に在りては、敵の防備嚴重にして、砲臺に進入することを許さぬ。其上敵艦は鹽廠沖に現れて、背後を砲撃して居る。

敵彈兩參謀を斃す

悲慘極まる報告

寧ろ進んで死せん 師團長の不同意

午前十時右翼隊長山中少將は師團長に報告して曰く、我隊は豫期の通り攻撃を決行し、其一部を占領した。然れど敵の十字火を受け、悲慘の狀は、其極に達して居る。維持は到底望み難い。若し強て固守せば全滅の外はない。唯偏に隣師團の攻撃開始を俟つ計りである。進むも敵の銃砲彈は熾盛にして全滅は免れぬ。退くも晝間敵の視界内で地物一點もない。廣濶の土地なれば生還するものは幾人もあるまい。寧ろ全滅するものなれば、進んで碎くべし。依て我隊は北堡壘を乗り越へ、斷然後方の砲臺に肉薄する決心である。

然れど師團長は同意を表せられぬ。是れは苦し紛れの猪勇である必要の時。は部下の生命は鴻毛よりも軽からしめねばならぬ。又一兵一卒の生命も九鼎大呂よりも重んぜねばならぬ。一方軍司令官に向ひ第九師團の攻撃を促された。軍司令部の通報に據れば、第九師團も即時前進するとの事である。此時午前十時四十五分である。師團長は此趣を突撃隊に通報し、先進部隊は依然敵火の下に蟄伏して、第九師團の前進を待つて居る。

Q 砲臺露國では之をクロバトキン砲臺と稱へて居る。吉永少佐奮戦の功に

恨を呑み退

殘念なり日
章旗を敵手
に委す

旅順包圍戰

依り後に吉永砲臺と命名せられたに突撃したる吉永大隊は砲臺に日章旗を樹て猶其南方まで突進したけれど友軍の攻撃は之に伴はぬ懸軍孤立四方より敵の猛射を受け大隊長以下將校は殆ど全部死傷し剩へ敵は新銳の豫備隊を以て逆襲に轉じ生殘れる若干の者は雀の鷺に追はれたる如く力及ばず日章旗を抜く暇もなく三々五々退却した。

日章旗は寂しく砲臺に植つて居る露兵も抜取る暇はない出れば我方より撃たる、二十一日は終日主なき砲臺とは知らず獨り炎天に閃いて居た其夜になり敵は拔去つた攻圍以來一物も鹵獲したことの無い敵の爲めには好戦利品であつたであらう。

一時退却したる兵も敵より見へぬ處は殆どない僅に地隙の底か段々畑の岸の蔭位に一人二人と身を隠し得るに過ぎぬ少し動けば見られる見ゆれば直に撃たる、進むことは素より安全の位置まで退却することも出来ぬ僅なる身の隠し場を利用して伏せるか屈んだ儘で日の暮るゝのを待つ計りである時は八月の炎天である終日一滴の水も飲むことは出来ず食物は素より得

傷者三分死
者七分

酸鼻の極

ることは出来ぬ此内には重傷傷者もあつたであらうが軍醫も手の附け様がない手當をすれば助かる命も手當の出来ぬ爲め無益に捨てたものが澤山あつたであらう何處の戦争でも死者三分に傷者七分位の比例のものであるが突撃した部隊では何時でも死者七分に傷者三分位の比である其原因は手當の出来ぬ爲め助かるものも死するからであらう。

突撃した跡を見ると到る處に屍が縦に横に散亂して居る恰も蠶が粗に卵を産み着けた様である其内には重傷で動けずとも生きて居るものもあつたであらうが敵と鼻を突き合して居るので出れば撃たれ收容することは出来ず皆悶死したのである中には足を撃たれて斜面を滑つて下りるものも見へる匍匐して下りるものもある彈丸は構はず来る途中で倒れて仕舞ふものもある其慘狀は實見せぬ人には言ひ盡し難い實に酸鼻の極である負傷者は赤十字條約に依り敵味方の區別なく救護することになつては居るが敵の方でも多数の死傷者があるので我軍の者まで救護することの出来ぬのも強ち無理とも云へない。

旅順包圍戰

斯く悲惨なる戦況の内に二十一日は経過した翌二十日は早朝より砲兵の猛烈なる射撃が始まつた歩兵は屢突撃を試みた然るに今一步にして皆敵の爲めに斃れ將卒皆無念の涙を呑んで午前十一時頃となつた。

然るに昨日來幾度か攻撃を繰返したる第九師團は此時迄に盤龍山東西砲臺を占領した斯くと見たる第十一師團は更に勇を鼓して前進又前進と新銳の兵を注ぎ込んだが如何にしても効を奏せぬ只現狀を維持して居るに過ぎぬ。

午後二時山中少將は此戦況を見て切齒扼腕自ら陣頭に立ち豫備隊を提げて運を天に任せ最後の突撃を行はんとする時忽ち攻撃點變更の軍命令が下つた。

其師團ハ主力ヲ右方ニ集メ盤龍山砲臺ノ後方ヨリ南ニ向ツテ東雞冠山北砲臺ニ突撃スヘシ。

此命令に依り兵力を右翼に集むることになりしも二十三日には準備運動に止まり攻撃を行ふには至らなんだ。

二十四日は午前二時より攻撃前進に移り午前六時頃には各隊は目的地に達した然るに豫定の如く盤龍山東砲臺の後より東雞冠山北砲臺に向ふことになれば敵は望臺附近より猛烈に銃砲火を注ぎ到底前進は困難である寧ろ望臺を攻撃するに如かずと考へ歩兵第四十四聯隊も共に望臺に向つた。

午後六時に至り突撃部隊は勇奮闘遂に望臺を占領した然るに死傷は刻一刻と増加し健全なるものは三分一にも足らぬ一髮の千鈞を曳くが如く辛ふじて占領地を固守して居た。

師團長は非常に憂慮して桑田參謀をして前線を視察せしめた何れも増援隊を望むと云ふの外意見もなければ妙案もない師團は歩兵第十二聯隊の一個大隊を増加して前線に急行を命じた時は午後六時三十分。

此時石原大佐の報告に據れば敵は極めて少數なる様である此際新銳の増援隊あらば望臺一帯の地域は占領し得るであらう中央縱隊と連撃を望むと云ふのである師團は之に同意して中央縱隊に參謀を遣し協議したるに第九師團も同意を表し共に攻撃を續行することになつた。

旅順包圍戰

然るに敵彈は少しも衰へず、兵力は疲勞の極に達して居る。突かざるも自ら倒るゝ有様である。實に諸隊は二十一日の拂曉より睡眠の暇はなく、飲食は常に不足勝である。望臺突撃の時、遠藤少佐は重傷を負ひ、臨終に際し歎息して云ふた。我兵は數の少きに非ず、兵力既に竭きたりと、確なるものは氣と心計りである。

望臺の維持は瞬一瞬に困難となつて來る。増加する兵力もない。到底維持は出來ぬ。指揮官以下涙を呑み、殘る總兵を收容して、二十四日の日没を待つて舊の守備線に引揚げた。今日まで師團の死傷は實に三千九百七十餘の多きに達した。

第一回總攻撃以來、占領し得たるものは、盤龍山の二砲臺に過ぎぬも、其苦戰奮闘は決して愧づる所はない。宜なり八月二十四日、大元帥陛下より左の勅語を賜はつた。

勅語

旅順要塞本攻撃開始以來、晝夜斯ノ堅城決死ノ守兵ニ肉薄シ終ニ其二壘ヲ

攻撃中止

兵數なきに非ず、兵力なきに非ず

死重砲兵の慘

拔キ益奮進ノ途ニ在リト聞ク炎熱ノ候ニ際シ連日ノ困苦轉々軫念ニ堪ヘ

朕深ク爾等將卒ノ勇武ニ信頼ス爾將卒其レ九仍ノ功ヲ一篋ニ全フセヨ

第一回の攻撃に於て未だ人の知らぬ慘酷なる事實がある。是非之を紹介するの必要がある。抑歩兵が敵の砲臺を占領する場合には、重砲兵の幾分かを歩兵に附屬して遣ふことは、當時の戦法になつて居る。其任務は、砲臺を乗り取つたる場合には、猶使用の出來る砲を使用して敵を苦しめ、又不幸にして一旦占領した砲臺を棄て、退却する場合には、砲を破壊して再び敵に利用されぬ様にする爲めである。之が爲め我聯隊から勇敢伶俐な將校下士卒を選抜して一中隊を編成し、大尉百濟九一を其長とし、之に熊川川崎兩中尉と八木少尉を附し、第九師團に屬して、突撃に加はらしめた。然るに二十三日に至るも、何の報告もない。其日の午後に至り、城崎伍長歸り報すらく、百濟大尉熊川中尉は戦死し、川崎中尉も行衛不明で、下士以下は四分五裂で生死全く不明である。と。歩兵は漸次死傷し、最早最後の豫備隊も使ひ盡して、遂に砲兵にまで援助を

請ふたのである。砲兵にして斯様に死傷したのであるから、歩兵の死傷は推して知るべしである。

二十三日も二十四日も砲戦を続け、其効果の多少現はるゝを待ちて、歩兵の攻撃を試みたけれども、徒に死傷を出すのみで得る處はなかつた。

附言 本書の内に砲臺といふ語と、堡壘といふ語が處々にある、其區別を簡単に述べて置く、堡壘とは周圍に壕があつて、一つの入口があつて、それを締めれば容易に入る、この出来ぬ仕掛けになつて居るのである、砲臺は周圍に何もなく、直に何處からでも飛び込まるゝものである、又副防禦と云ふ語がある、堡壘の壕とか、掩蓋とかいふものは、防禦工事であつて、其前に鐵條網とか、鹿柴とか、拒馬とかを拵へたのを副防禦物といふ、即ち防禦工事に副へて造つた意味で副防禦物といふのである。

砲臺
砲臺
区別

二十四 野戦電燈の光

數日前より据附工事を急ぎつゝあつた野戦電燈は、二十三日の夜より照明

を始めたけれども、光力が弱いので、餘り効力はない、併し敵の爲めには邪魔物であるから、點燈すれば野砲を撃ち掛ける。

二十三日は歩兵の攻撃も烈しくない、多くの死傷で戦線は寂として居る、確なる事は解らぬが第九師團のみにても六千人計りの死傷があると云ふ通報があつた、要塞戦では死傷の數が新聞に出ると直に敵に兵力や戦況を知らるので、一切秘密である、第一回第二回の攻撃とも、死傷者の數は決して新聞にも出ず、日本全國民をして大に氣を揉ましめたことは、猶讀者の記憶に存することゝ思ふ。

夜間は砲戦もないので、幕營に歸つて寢て居ると、二十四日の午前零時十分頃、烈しく銃聲が聞ゆる、大隊書記を呼起して出掛んとすると、二三間先で砲彈が破烈した。

『オイ香月軍曹近かつたぞ』

『マア幸でした、今四五秒早く出ると命はないのでした、が』

天祐だ、兎に角急いで行かうと、四五歩行くと軟いものを踏むだ。

「牛の糞でもない様だが軟いものを踏むだ急いで提灯を持って来い」
と軍曹に吩咐けた軍曹は急いで提灯を持って来る照して見れば肉片である。それでは茲に炊事場の番兵が居たが遣られたわい！歩哨！歩哨と呼んで見ても返事がない。天幕の中を覗いて見ると斯は如何に假眠して居た二人の内、一人の頭の脇で砲彈が破裂し、其餘勢で腰に着けて居た小銃彈が破裂して體は黒焦になつて、腦部は飛散して形もない。歩哨も倒れて居る司令の下士も重傷で生きて動いては居るが言語も出さず迎も助かる見込はない。
死んだものは仕方がない、銃聲が烈しいので觀測所に驅け着けて見ると、格別の事もなく、二時間計りで銃聲も衰へた、敵の出撃であつたことが後に解つた。

電燈を据附けて以來點燈すると野砲彈が来る、電燈は山の巔に据えてあつてそれを撃つ遠い彈丸は悉く我々の幕營の附近に落つる。
是より先二十二日に攻城砲兵司令部から注意があつた、歩兵の死傷は豫想外に多い、若し敵が出撃すれば攻城砲は取らるゝかも知れぬ、夜間は自ら歩哨

を配布して警戒せよと。
之から毎晩注意して居たけれども幸に敵も出撃はしたけれども何時も我歩兵線に於て喰ひ止められ、攻城砲臺の位置まで形を現したことはなかつた。若し敵が思ひ切つて一大隊位を提げて縦隊を作つて押出して來たならば攻城砲の十門や、二十門を破壊するのは容易であつたであらうが、敵が此舉に出でななんだのは幸であつた。

死生命ありと云ふことは孔子も言はれて居るが誠に能く適中する事實がある。二十三日か二十四日の午後であつた敵は電燈を目蒐けて頻に射撃する、電燈班の兵や砲兵の下士二三名が電燈の前にある塹壕の中で戦況を見て居る頭を出すなど度々注意するけれど山の前の斜面に彈丸が落るのを頭を出しては見えて居る、其内に前の斜面に落ちた不發彈がブル／＼と音を立て、飛んで来る電燈班の上等兵が夫を見て彈丸が来る、彈丸が来ると云ふて見て居た、彈丸は真正面に來るので頭を後に伸んだ、豈圖らんや其彈丸は其上等兵の頸から上を粉碎して、百米計り後方に落ちた、左右の頸動脈からは噴水の如く

紅血を吹き出し隣に居た下士に瀧ぎ掛つた誠の様である。若も右へでも左へでも五寸避ければ弾丸は命中らぬのである。茲で始めて人の死期は豫め極まつて居りはせぬかと感じた見へて居る弾丸に撃たれるとは愈死期の來た兵であらう。

二十五 人と弾丸

第一回の總攻撃は全力を盡し、弾薬も残少になるまで撃つたけれども、餘り得る處はなかつた。歩兵は殆ど全滅である。死傷の數は公報にも出て居て、人の知る所であるが内面を聞くと猶酸鼻に堪へぬものがある。余の隊の近處に歩兵第二十二聯隊の一大隊の炊事場がある。二十三日の朝餘り寂として居る中で、今朝は何人分炊出したかと聞いて見ると、漸く五十八分に過ぎぬと當番の答である。八百人の大隊が僅に五十人しか残らぬとは、生存者は全數の十六分一である。何と酸鼻の極ではあるまいか。中には軍曹の中隊長代理もあつた。二日間の劇しき砲戰と二十四日迄の小砲戰で、弾薬は殆ど撃盡し、最早砲戰

生存者僅に十六分一

母に手紙



旅順ノ東北陣地ニ對スル砲撃

を繼續することは許さぬ。弾薬補充の爲め、暫く砲戰を休止し、只妨害射撃を行ふに止むることになつた。

是で先づ當分は砲戰はない、陛下の爲めに捧げんと覺悟した命も、無事であつた死と極めた命に生残つて居ることを知らす必要もないのである。が、親に安心さすのも、一つの孝であると思ひ、二十五日に始めて、母に出す手紙を裁した。

秋風催曉冷、吹搏戰袍過、憶起故園母、病餘今若何

故山を跡に出征の途に上しより、既に五十餘日になるが、充分に身體の垢

二十五 人と弾丸

旅順包圍戦

を落したことはない命も取止めて見れば皮膚病に罹らぬ内に少しは皮膚も清潔にして見たい支那には風呂桶と云ふものはない彼奴等の不潔は此一點でも想像が出来ると土人の釜を借りて湯を沸し身體を洗ふて見ると何處を掻いても爪の間に垢が一杯溜る書生時代に八大家文を讀むだ時柳宗元の文に「一たび肌を搔けば塵垢爪に滿つとあるのを見て支那一流の白髪三千丈的の馱法螺と思ふて居たが始めて法螺でないことが解つた一週間に二度も三度も或は毎日又は隔日に入浴する日本人は世界一の清潔な人種である。

醫師は皮膚を不潔にすれば皮膚病に罹ると云ふて居るが夫が事實とすれば支那人などは悉く皮膚病に罹らねばならぬ左様でもない所を見れば別に害もないものと見ゆる支那の婦人の如きは産湯を使つた限り終身入浴と云ふことは知らぬと云ふことである是は或は氣候の然らしむる結果かも知れぬ滿洲の如き寒くて空気の乾いた處で身體の脂肪を毎日洗落した時は手足は直に乾だらけに成つて仕舞ふであらう是には實際の經驗がある先年滿洲旅行をして公主嶺に行いた時十月の下旬であつたが最早水が凍る手には少

しも血色がなくなり戦が切れる俄に貧血した譯でもあるまいと歸路に着いて奉天から安東縣の方に出ると血色も元の様になつて来た夫であるから滿洲の如き地方では身體には水を附けず脂肪分を食はねば身體の維持が出来ぬことが解つた。

二十六 滿洲の暴雨

滿洲の暴雨の事は前にも述べたことがあるが實例を擧げて紹介して見たい識らぬものは迎も信じられぬ位である。

是迄は晝夜觀測所に詰切りにして居たが前にも云ふた通り砲兵の彈藥は殘少になり歩兵は八九分も死傷したので此上攻撃を續行することは出来ぬ二十六日の夜から危険のない山の蔭に天幕を張り高粱の生稈を敷いて一枚の毛布を其上に展べ蚊袋を被りて寝て居ると翌朝の午前三時頃になり大雨が降り出し天幕の上からは霧雨が漏る下は一杯の水である仕方はなくマン

銃聲が盛に聞ゆる暫くすると當番が急ぎ歸つて敵襲の様だと云ふ。夫は大變だと思ふて出掛けると河があつて濁水満々として渉ることは出来ぬ。平常は飛石傳ひに渉り得る河である。昨日迄彈藥を運んだ輕便鐵道が河に掛つて居たので其處に行けば之を便りに足止り位にはなるだらうと思ひ行いて見ると岸邊から捻ぢ切られて流れて影も形も残つては居らぬ種々考へて岸に立つて居ると幸に銃聲は漸次衰へて來るけれども行いて見ぬ譯には行かぬ。暗夜の事であるから水の深さは少しも解らぬ併し岸は緩傾斜で急に深くなることのないのは平常から知れて居るので、一歩一歩踏込むで見ると押流される程にもない。始めは長靴の胴迄位であつたが遂に長靴の上から水が入つて來る。膝まで來る幸ふじて涉つた。觀測所に驅着けた頃には雨は止むで残月が雲の間からチラ／＼顔を出して居る。

水は膝まで

觀測所に宿直して居た山口副官はと尋ぬると中隊の陣地に出掛けたと云ふことである暫くすると東の空には曉の彩雲が一刻一刻と赤くなつて來る。副官も歸つて來る。

銃と輜重車
流る

立板に水

「仕舞ひました」

「如何したのだ」

「圖囊に水が入つて折角書入をした地圖が滅茶苦茶になりました」

どうして濡れたか聞いて見ると腰まで水が來て圖囊の上から水が入つたのである。副官の報告に據れば敵は歩兵線までは來た様であるが引返した様で砲臺には異状はない併し第一中隊では小銃が三挺と輜重車が二輛、第二中隊では小銃が五挺と輜重車三輛と背囊や毛布が十個餘り流失したと云ふことである。

眞逆軍隊が河の中に露營することもあるまいに輜重車や小銃が流失するとは受取り難いと訝る人もあらんが露營地の地形から述べて見よう。野砲は高い處に置くのが普通であるが臼砲は成るべく低い處に置いて山を越して撃つて敵から見へぬ様に又敵の彈丸の來ぬ位置を撰むのである。斯様な要求から第一第二中隊は川に近い處に置いて其附近に露營して居たのである。滿洲の驟雨は眞に篠を突く如く降る。如之山には樹の一本もない降つた雨

旅順包圍戦
は板に水を流した様に、山に少しも染み込むことなしに、低地向つて落ちて来る。何をすする暇もない武士が銃を流すと云へば、不面目此上もない様であるが、聞いて見れば無理もない。

急に水が溢るゝので、中隊當番には公用行李を擔はして高い處に避けさせ、歸つて見れば小銃や背囊は蔭も形もなく流失して居たと云ふのである。

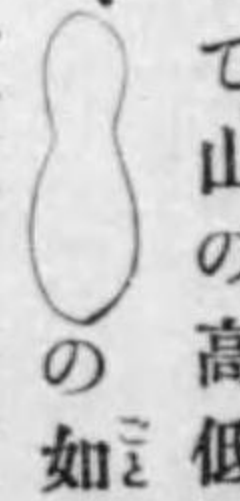
雨が止むで二三時間もすると、河の水は八寸か一尺しかかない。小銃や輜重車が流れるとは虚言の様である。輜重車は軽いから海まで流れたであらうが、小銃は海まで行く氣遣はあるまいと、捜して見たが遂に発見しなかつた。海まで流れ出したか、砂に埋まつたのであらう。

二十七 遂に正攻

第一回の總攻撃は、終に旅順の死命を制するに足らず、引續き有らゆる手段を盡して、二十七八日頃まで、攻撃を續行したけれど、到底強襲で取れる目的はない。勇猛鬼をも挫ぐ乃木將軍の膽略も、伊地知將軍以下全軍の粹を抜きたる

軍參謀の機略も、施すに術なく、遂に正攻に決心せられたのである。

軍司令部の示したる計畫の大意は左の通りである。
第一師團は二〇三高地及海鼠山水師營南方堡壘、第九師團は龍眼北方高地の堡壘、即ち露軍の所謂水道堡壘及盤龍山西砲臺の西方高地に在る堡壘、第十一師團は東雞冠山北堡壘及東雞冠山砲臺の攻撃準備に着手すべし、而して二〇三高地及海鼠山の外は攻路掘設を要す。

（海鼠山と云ふことに就ては、説明して置く必要があるかも知れぬ。軍用地圖には水平曲線なるものがあつて、其形状と數とに依つて山の高低、緩急、大小を知ることが出来る。海鼠山は最高の水平曲線の形状が、の如く海鼠の如き形状をなして居るので、誰かに依りて名付けられ、遂に全軍に傳播したのである。露軍では之を長山と稱へて居る。山の形が細長いからであらう。）

日本全國の出し得る砲は皆持出し、二個師團の生靈を殆ど肉弾に供しての攻撃も効を奏せず、他に妙案名策もない。忠義も勇氣も彈丸の前には低頭せねばならぬ。死して働は出来ぬ。然らば死傷を少くして、安全に砲臺に近づき、正攻

正攻とは

隔靴搔痒

廿八榴榴砲の出陣

旅順包圍戦

法を採ることになつたのは、止むを得ぬことで、且正當の順序である。正攻とは如何なるものであるか、専門的に説明すれば一枚や二枚に書き現すことは出来ぬが極めて簡単に讀者に紹介しやう。是れは一つには軍事思想の一端を世間に周知せしむる一助にもなるであらうと思ふと俱に、只正攻正攻と無意味に讀過させぬ爲めである。併し極めて簡単であるから、隔靴搔痒の感あるは止むを得ぬことである。

さて正攻とは一口に云へば、電光形に壕を掘り、其中を通路とし、敵の視目と彈丸を避け、遂には砲臺の中まで、隧道を掘つて其内に多量の爆薬を埋めて、大爆發をして、砲臺を根柢から顛覆さして、攻撃兵が飛込むのである。大本營其他に於て種々議論の末、十五珊臼砲や十五珊榴榴砲では、到底破壊力の足らぬと云ふことになり、又一方に於ては敵の艦隊の砲臺を攻撃すること目下の形勢では、到底絶無であらうと云ふことになり、砲臺の砲を引き揚げて、二十八榴榴砲を攻城兼軍艦砲撃に用ゆることになつた。攻城に二十八榴榴榴砲を用ゆることは、世界の戦史に新レコードを作る嚆矢である。併し攻城

一心は豪い

次の總攻撃を待つ

のみではなく、港内の軍艦を撃沈するのが却て主なる目的であつた。此砲があつて始めて旅順は陥落したことは誰も知る處で、後の條を讀むで解るであらう。

九月上旬から其据附が始まつた平常ならば早くも三箇月は掛るのであるが、人の一心は豪いもので、一箇月許りで竣工した。

正攻の進歩し、又二十八榴榴砲の据附の終るまで砲兵は眞の砲戦は交へぬ益英氣を養ひ、彈薬を内地より補充し、一日千秋の思を以て、第二回の總攻撃を待つのみである。

二十八 恩賜品

君の爲め國の爲め捧ぐべく覺悟した一身も、時未だ來らず、生きて恩賜の酒と海苔とを頂戴するの御沙汰を拜した。

將校には増給もあれども、下士卒には増給ありとて、幾程でもない、一合の酒は貳拾錢もする、一旬間の日給は、漸く三合の酒を買ひ得るに過ぎぬ。其處で恩

兵卒を先に

旅順包圍戦

賜品は兵を先にして次に下士に將校には若し餘らねば支給せぬも宜しいと命じた。

暗涙を浮ぶ

我皇室の戦士を愛撫せらるゝことは申すも畏きことである。素より捧げ奉りたる命の猶惜しからぬと思はしむる。斯く慈愛に富ませらるゝ陛下の股肱に卑怯なるものが有り得べき筈がない。敢て蛇足を添ゆる必要もないのであるが、部下一般に恩賜の有難いことを云聞かすと、暗涙を浮ぶるものもあつた。

武人臨戦不期還

彈雨硝煙何所關

豈計生逢賜品惠

稱杯感極淚潛々

人は感情の動物

人は感情の動物である。僅一つの掛聲で負ける綱引きも勝つことがある。兵が煙草に窮したとき、吸ひ掛けの巻煙草を貰つて奮つて斥候に出たと云ふ話もある。連日連夜の戦争で疲れ切つた將卒に、恩賜品と來ては萎れ掛つた植木に一杯の水よりも利目は多い。兵卒の天幕を巡視して見ると、神棚こそなけれ、直に口を着けるものはない。背囊の上に備へて、何か黙禱するものもある。頂

天幕生活の不便

戴して陶然として、連日の困苦を一掃した如き様子のものである。中には酒は頂戴するが、海苔だけは背囊に入れて守りにして、生きて還ることが出来れば、一家内のものに分配し、若し戦死せば死骸の前に供へて、供物の代りにして呉れと戦友に頼むものもあつた。

二十九 水 攻

要塞に近くなるに従ひ、一地に集屯する兵は漸次に多くなる。従つて到底悉く人家に入ることには出来ぬ。概幕營である。天幕は他人のものを見れば誠に結構の様であるが、自分が其中に住居つて見ると、實に不便極まるものである。熱い時には露天より却て蒸し熱い、寒くなれば内外の温度は直に同様になる。で、寒くて堪らぬ、只雨風が直接に當らぬのみである。雨も小雨なればよいが、大雨になると霧雨が漏り、衣服も毛布も忽ち濕つて仕舞ふ。衛生上から云へば誠に不良の極である。併し精神作用と云ふものは、豪いもので、其割に病氣も起らぬ不思議なものである。

二十九 水 攻

要塞戰は死傷が多い、それは其筈である、守者の方では有らゆる手段を盡して防禦して居るに攻むる方は素手である、鎧武者と裸體の喧嘩の様なものである、従つて死傷の多いのは當然である、けれども轉々位置を變へることがないので糧食に缺乏することのないのは、せめてもの報酬である、第一回の總攻撃後は旅順の敵艦も餘り出撃せぬ、支那人が不完全乍らも漁獲を始め、時々生魚も持つて來る、併し價は非常に高い、一斤參拾錢位である、本國の二三倍位であるから戰地の物價としては驚く程でもない、少しも値切れば、直に他の隊へ持つて行くので、云ふが儘である、最も高いのは薪である、百斤一圓七八十錢位である、それも伐つた計りの生木である、此値は高い様であるが、一方から考へると極めて廉いのである、なせなれば薪百斤と云へば、驢馬の一駄の荷物である、然るに驢馬は一日雇へば一圓五十錢取る、薪も近處にはない、三四里も遠くから持つて來るのである、一駄伐つて持つて來るのは一日の仕事である、驢馬計り雇はれても一圓五十錢取れるのであるから、薪の原價は三十錢位にし、か當らぬ、斯う計算して見ると高いことはない。

支那人も亡國の民で、氣の毒の點もある、戰爭の爲めに家は焼かれ、作物は荒され、損害賠償は一文も取ることは出來ぬ、可憐の様であるが、一方には金儲けもある、驢馬一頭の賃金一圓五十錢とは、支那の物價から打算すれば、三倍以上である、或人は云ふた、彼奴等は始終戰爭をして貰ふことを祈つて居るのであらうと、或は左様かも知れぬ。

我軍では多少自由も利く様になつたが、敵を水に苦めねばならぬ、日本軍では龍眼北方の堡壘とか、クロバトキン堡壘とか云ふて居るが、露國では水道堡壘と云ふて居る、夫は水道の水源保護の爲めに築いたからであらう、此堡壘は本防禦線の外に出張つて居て、之を取らねばどうしても二龍山の方に近く、こゝには出來ぬ、露軍の爲めには、大切な堡壘である、此堡壘を取らるれば、水源を保護することは出來ぬ。

水道を破壊して、旅順市街に送水を絶てば、飲料水は素より造船所の作業にも大困難を來すが、故水道を絶つことは、目下の急務である。

第一回攻撃に於て、成效せなんだ爲め、歩工兵連合して攻路を掘り、遂に堡壘

水道堡壘占領

前百米計りに達し、九月十九日午後一時より、猛烈なる砲火を集中し、歩兵第三十六聯隊第二大隊は、鐵條網の一部を破壊して、突撃を決行したが、全員殆ど死傷して、目的を果さず、漸次精銳の兵を増加し、翌午前六時に至り、敵は遂に支へ得ずして、火を放ちて退却し、堡壘は遂に我有に歸した。

流石に露國式

此堡壘を占領してより、水道の水源を捜し出して、之を破壊し、旅順を水に苦める一策を取つたのであるが、容易に水源が解らぬ、能く聞く見ると、此工事には山東省から人夫を雇ふて來て、落成の上、皆逐ひ返したと云ふことである。流石に露國式で、注意周到である。

水道の水源が解らぬと云へば、不思議の様であるが、此水源は二龍山の下の處に、地下に大きな貯水池を掘つて、外面からは少しも見へぬ様に覆をして、上は畑や山になつて居る。そして、諸方から地下の水を集めて、鐵管で送り出す様になつて居る。其處此處と掘つて見るが、容易に解らぬ。

始め一箇處だけは、發見して破壊したが、猶他に水管あるべきを推察し、大島師團長は、或日宮田參謀を從へ、自ら巡檢中一清人を捉へ、訊問の結果、幸にも工

水源閉塞

事に使用せられたものであつて、彼の口述に依り、六箇處の水源を發見して、殘らず閉塞して仕舞つた。

三十 先觸れ彈丸

榴彈砲の彈丸は十秒も先に、御案内の音が、ヒューヒューと來るので、皆先觸れ彈丸と云ふて居る。

人の奮發心ほど、豪いものはない、平常ならば、三箇月も掛る榴彈砲の据附が一箇月足らずで出來上つた。愈射撃を始むるといふことで、三十日に攻城砲兵司令部に呼出された司令官の訓示に據ると、第二回の總攻撃は、來月二十日頃の豫定である。然るに夫迄待つ時は、日々撃つ彈丸が多數に上る内地の製造力には制限がある。二十八榴彈砲の目的は、素より軍艦を撃つのであるが、砲臺を撃つて見て、効力が著大であれば、攻城の日課を速めたいのである。夫で砲臺を撃つて、各部隊の長官に實見せしめて、意見を聽く積りである。

嗚呼、實に旅順の死命を制したものは、二十八榴彈砲である。何故なれば旅

第二回總攻撃の豫定

旅順包圍戦



王家甸西南四地に於て八十二榴砲装填

順港内の軍艦を撃沈めたのは、二十八榴砲なることは、誰も知らぬものはないが、今一つ榴砲が旅順の命脈を縮めたことがある、それは次に述ぶる通りである。

旅順の防禦を双肩に擔つて居たものは、要塞司令官スミルノフに非ず、又ステツセルにも非ず、最新智識を有する第七師團長コンドラチエンコ少將である。少將は露軍中の名將にして、陸軍大學校をも卒業し、籠城以來ステツセルを助けて謀を廻らして居たのであるが、十二月十五日二十八榴砲の爲めに斃れたのである。露國の戦

記にある一節を摘録して、其時の有様を讀者に紹介しやう。

コントラチエンコ中將(當時中將に進級しあり)は、二龍山堡壘に在りし東北正面工兵指揮官ラシエフスキー工兵中佐より、日本軍は有害瓦斯を以て二龍山堡壘外岸穹窿内の守兵を苦しむる旨の報に接し、乃ち情況を視察する爲め十五日の夕刻躬ら同堡に赴き、歸途東雞冠山北堡壘に到り、地區司令官ゴルバトフスキー少將をも招き協議する所あらんとし、堡壘長たるフルーロフ中尉の許に到り、躬ら坑道内に進みて工事を巡視せり。其後中將は窶室内に於て下士の殊勳者に「ゲオルギー勳章」を授與し、諸將校と會談し在りしに午後九時日本軍の發射せる二十八榴砲砲彈丸恰も中將の位置せし掩蔽部に命中し、中將及中將を圍みし十四名の將校中剛勇なるナウメンコ中佐(東狙兵第七師團參謀長)ゼドゲニゼ工兵大尉シニケウキツチ中尉カウキツキー中尉ツリコフスキー中尉スモリヤラフ少尉即死し、尙七名の將校負傷せり。

中將は千九百三年(明治三十六年)十一月二十七日東狙兵第七師團長とな

り、千九百四年一月十四日旅順に到着以來其豊富なる學識と熱誠なる奉公心を以て、數次防禦設備の不完全なる旨を進言し、大小孤山、鳳凰山、大頂子山、老鐵山、高山(二〇三高地)等の設備を計畫し、要塞の防禦に貢獻せし所極めて大なるものあり。

前進陣地に於ける七月の戰鬪に際しても、屢守兵の先頭に立ちて勇戦し、驍名噴々全軍を壓したり、其後要塞首線の防禦に際しては、深くステツセル中將の信任を得、防禦司令官の職に任じ、奮勵努力、東奔西走、其職に盡瘁し、手榴彈に關する考案の如きも、中將自ら之を發明し、其種類七種の多きに達したり、上下の信望を一身に蒐めたり。

斯く防禦の中心として、衆望を一身に擔ひたる中將の戰死は、守兵の志氣をして一層の沮喪を來さしめたり。

コンドラチエンコ中將の戰死は、旅順の爲めには一家の主婦を失ふたる如く、軍艦を撃沈められたるは、牝雞が兩翼の下に育むで居た雛を殺されたる如く、最早自暴自棄となり、遂に降參したのである。

十月一日二十八榴彈砲の射撃を開始した。此日は旅順攻圍中紀念すべき日である。我第四中隊の榴彈砲二門は始めて二龍山を砲撃した。流石に効力は偉大なもので、所謂五指の交彈は、孤拳の一撃に如かず、重量から云へば十五榴白砲彈の六發と二十八榴彈砲彈の一發とが殆ど同じであるが、當りさへすれば、十五榴白砲の十發より効力は多い。其點から云へば、攻城砲の口径は大ききなに限る。

三十一 軍艦砲撃

十月二日は喜ぶべく又最も悲むべき日であつた。

軍艦砲撃の爲めに、二十八榴彈砲は据附けられしも、何方から見ても、白玉山の蔭になつて、港内は西港の一港の外は見ることが出来ぬ。唯圖上で推定して探射するのみである。

其撃方は斯様であつた。軍用地圖に旅順港内に錨の印がある。其錨の處に方向を定めて、左右に三十分づゝ二回撃つた。最後の一發は非常なる大音響を發

小島中尉の
惨死



二艦軍ノ内港ヲ以テ砲彈珊八十二リヨ地ノ米百五約方北屯家鞠
景光ノ撃砲シ對

非常の勤勉

した、多分軍艦に命中したものと思はれた。
此日最も悲惨なりしは、小島中尉の戦死である。中尉名は要八幼より學を好み家裕かならざるも、父兄を助けて農業に勉むるの傍ら、未鋤採る暇には書を繙き、多年の苦辛空しからず、遂に士官候補生の試験に及第し、下關要塞砲兵聯隊に入隊し、文明の今日なれば、螢雪の苦は積まざれど、人寝ねて後も勉學を廢せず、朝は早く起き、人一倍の勉強した。其効空しからず、三十四年六月二十五日、少尉に任せられた。數學は天稟の長

長所は數學

二三の肉片
を止む

所であつた砲兵科の將校として、大仕事を成さんとするには、數學は第一の資本である。然るに天何ぞ此前途有望の才子に幸せざる。嶗嶗砲臺の二十三、白砲彈の一發、我二十八榴彈砲彈丸の堆積上に落下し、凄じき勢を以て爆裂するや、我彈丸も餘勢の爲め、五六發同時に爆發し、中尉の體は肉片となつて、飛散して仕舞つた。拾ふべき遺骨も遺髪もなく、唯僅に數十間も隔つた處に、二三の肉片を認めたのみである。嗚呼、慘なる哉。

前日のことであつた。中尉は病氣で暫く休養して居たので、見舞に行つた。

「病氣はどうだ」

「餘程宜しくなりました。明日は榴彈砲の射撃もあるそうでありませうから是非出ます」

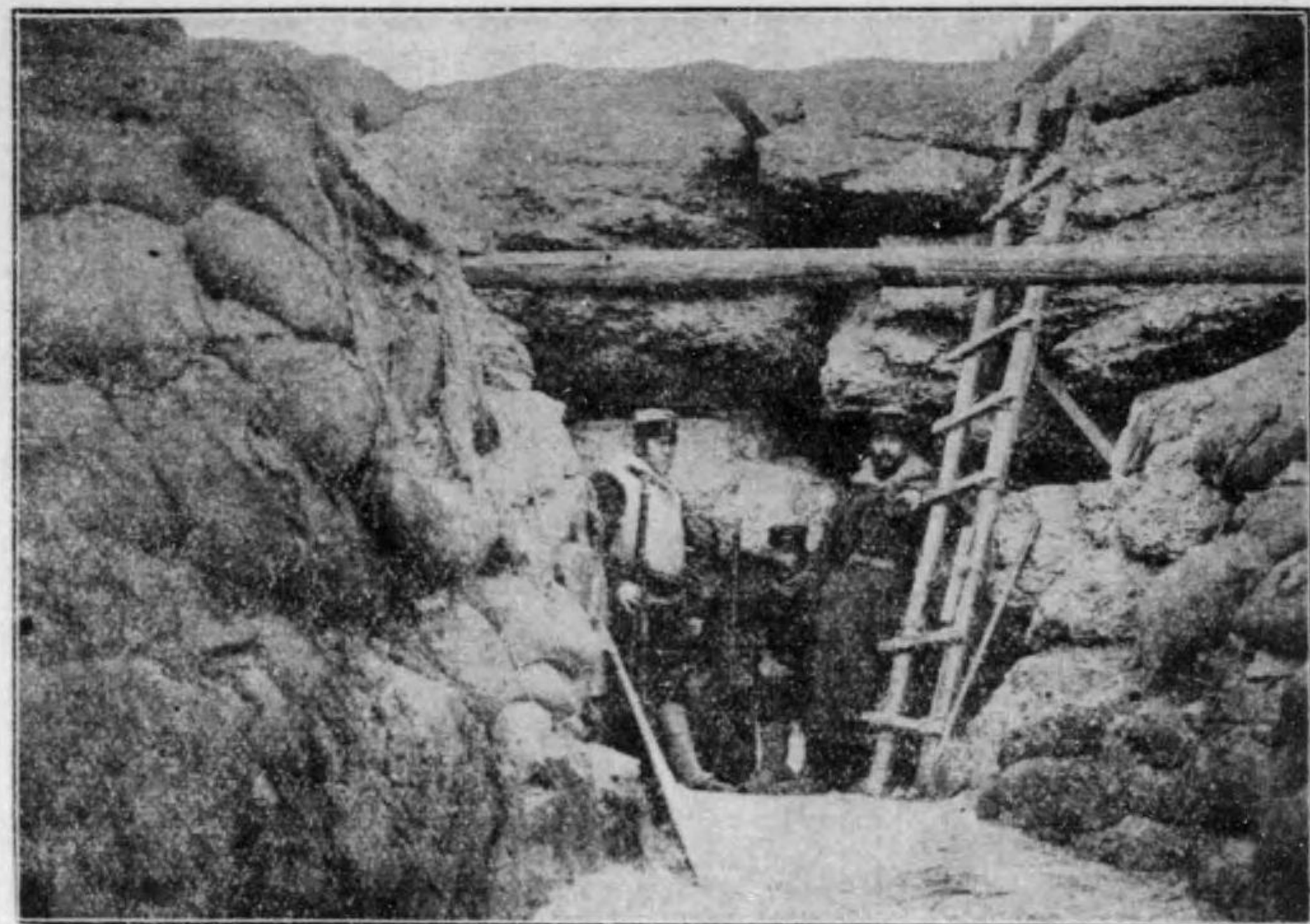
「決して心配することは要らぬ。明日は僅に二門撃つのであるから、貴官が出なくともよい。第二回總攻撃も近日に迫つて居るから、靜養して充分元氣を恢復するがよい」

と告げて暫く雜談に時を移して訣れた。之が永久の別辭にならうとは、語る

旅順包圍戰

人も聞く人も知る由もなかつた。中尉は前日云ふた如く強て出務して、三十發の射撃を終り砲の手入に取掛つたのであるが、病後の事で積むであつた弾丸に腰を掛けて、監視して居たのである。余は觀測所から見て居ると、一發の彈丸が来て、非常の勢で爆發した。必定一發の破裂ではないと思ひ、電話で聞いて見ると前に云ふた次第で同時に下士以下重傷四名輕傷二名と云ふことである。之を聞いて膝を拍つて叫んだ。仕舞つた！何故是非昨日小島中尉の出場を無理にも止めなかつたであらうか。部下の將校を失ふに誰彼れの區別はないけれど、前途有望の此中尉を失ふたのは、残念に堪へなんだ。逃げた鰻に小さいのがない、死んだ子に馬鹿がないとは、能く人の口に鱈炙する諺であるが、左様でない實際に小島中尉だけは亭亭たる大木となるべき若木を夭折したのと同様で、今となりても、其時の事を思ひ出すとなせ強て止めなかつたであらうかの一念が腦底を去り得ない。

一日も早く旅順を陥れ艦隊を全滅し、我海軍には修理の時日を與へ、攻城軍を北進せしめ奉天大會戰に參與せしめねば、勝算は覺束ない。我艦隊は一月以



東鷓冠山北壘正外面岸窰ノ入口

來絶へず海上に游弋し、大修繕を加へねば、波爾的艦隊に對抗すること。は覺束ない爲めに旅順の陥落する。と否とは、帝國安危の岐るゝ處である。

去れど正攻には一定の順序がある。幾ら晝夜兼行しても掛る丈けの日子は掛けねばならぬ。人の體力に實際限がある。之を超ゆる譯には行かぬ。

對壕作業は多くは夜間の仕事である。晝は敵の狙撃が烈しくして、損害計り多く進歩せぬ。夜間とても電燈や光弾で照され見附けらるれば

撃たれて始終進歩を妨げらるゝ。
此間榴弾砲は彈丸を節約して敵の砲を破壊して總攻撃の妨害を除かねばならぬ。

港内は狭い

十發命中

確に二隻を破壊す

旅順の港内は極めて狭く、港内の軍艦が皆此方から見へぬ處に隠れることは出来ぬ。ペレスウエイトは砲兵司令部の位置から見へる、十二日には三十六發撃ちて十發は命中した様であつた。斯様な成績は平時の演習でも得られぬのであるが、天祐か一心の凝り固りであるか、司令官始め非常の満足であつた。十六日にはバーヤンを撃ちて損害を與へた其處で二隻の軍艦は確に暫時の廢艦となつた。是丈けでも榴弾砲の大成效である、海軍の砲戦や水雷で軍艦の二隻も潰さんとすれば、味方にも一隻位は損害を受けるものと覺悟せねばならぬ。榴弾砲では人員には多少損害はあつたけれども、砲には何の損害もなく、二隻の軍艦を沈めたのであるから割のよいことであつた。

三十二 第一回總攻撃

總攻撃の訓示

第一回の總攻撃は多く得る處なく、其後四五日間も全力を注ぎ勇を鼓しては強襲を行ふて見たけれども、何時も死傷を出す計りで成功せぬ。人にも彈丸にも制限がある無謀に注込む譯には行かぬ、其處で遂に正攻と極つたのは、九月上旬であつたが、其時の計畫では正攻には一箇月以上掛ると云ふことで、一箇月と云へば待遠い様であつたが、烏兔勿々須臾も止まらず、九月も過ぎ十月下旬となり、明二十五日に第二回總攻撃に關する訓示を受くる爲め、攻城砲兵司令部に出頭せよとの通報があつた。

愈第二回總攻撃

午前九時司令部に出頭すると司令官から左の要旨の訓示があつた。
『攻城の前途は猶遠である、此度の總攻撃で陥落するや否や斷言は出来ぬ、従つて撃つ時には撃たねばならぬが、彈藥は勉めて節約せねばならぬ。』
第一回の總攻撃は、一萬有餘の犠牲を拂つて僅に盤龍山砲臺を占領した位に過ぎなかつた。其後も引續き數度の攻撃を試みたけれど、逆も力づくでは取れぬと云ふことが解つた。殆ど二箇月に近い間の準備で、彈藥の補充も出来、不
充分ながらも兵員も補充せられ、愈二十六日を以て第二回の總攻撃を行ふこ



我總砲擊中ノ二龍山砲臺

とになつた。

攻撃正面は松樹山より東雞冠山までと限られ、即ち松樹山は第一師團、二龍山及P堡壘は第九師團、東雞冠山北堡壘より東雞冠山に至る間は第十一師團の攻撃地區で、東雞冠山以東及松樹山以西は單に牽勢運動に止められた。

第一回の攻撃では、十人が九人迄は旅順は必ず陥落するものと思ひ、多少敵を侮つた氣味もあらう。けれど第二回の攻撃では經驗もあり準備は充分出て居るにせよ、下級將校は半數にも足らぬ下士以下にも

缺員多く補充兵の中には小銃の實弾はまだ撃つたことがないと云ふものもあつた。下士卒に至るまで、缺員のなかつたのは砲兵位であつたであらう。

二十六日の拂曉より第二回の總砲撃が始まつた。凄じい砲聲は第一回の其より以上である。十五珊以下の攻城砲は其數第一回と變はないが、二十八珊榴弾砲が八門加つて居る。攻城砲の音の間に、大きな榴弾砲の音のするのには半鐘を亂打する中に、釣鐘の音のする様で、彈丸の落つる様子は霰の中に大石が交つて降る様である。此度こそは、是でも非でも砲臺を乗り取らねば置かぬとは、上下一致の意氣込みで、戦線は到る處殺氣に充ちて居る。補充として來る青年將校の内には、軍用行李も持たぬものがある。其言草に依れば、戦死は九分九厘まで決まつて居る。若し旨く行つて生きて旅順に入ることが出来れば、取寄せ

ることは容易である。

將校以下の意氣込みは、一様に其通りで、死は素より期して居る。其結果や如何に下級の者では、彈丸の有らん限り撃つて、劍の折るゝまで衝いて衝いて衝き捲つて屍を敵前に曝せば、我事終れりであるが、軍司令官師團長乃至各隊長

上官の苦心

砲撃四日間

午後一時の
攻撃

野戦と要塞
戦の差

夜は盲目撃
す

要塞戦は數
理的

旅順包圍戦

の苦心は如何であつたらう。此結果を豫想すると、寢ても目は容易に閉ぢられ
なんだであらうと推察が出来る。

第一回の總攻撃には、砲戦は二日であつたが、第二回には四日間に亘つた念
にも念を入れ、敵の火砲を充分に破壊して、攻撃を容易ならしむる爲めである。
二十八榴弾砲も加はつたので、砲臺の破損、砲の破壊は、第一回の砲撃に比し
一層甚しかつた。

三十日の拂曉より攻城砲全部と二十八榴弾砲も加はり、耳を劈くべき音
響で最後の砲撃が始まつた。恰も鑄物師が湯になつた金屬を鑄型に流し込む
前に火を盛にする如き勢である。其凄じきことは言語に盡し難い。午後一時に
なると歩兵の全線突撃が始まつた。

攻撃時刻を午後一時に定めたことに就ては、少し紹介して置く必要がある。
野戦では多くは拂曉に攻撃する。是れは敵に見られぬ暗い内に準備をして置
いて、夜の明けて指揮の仕易くなるや、直に攻撃して勝てば追撃し、追撃せぬま
でも、其日の内に充分の時間を残して、跡仕末をするに便する爲めである。

要塞戦では左様でない。殊に正攻をするのであるから、運動は充分隠すこと
が出来、晝の明い内に砲臺を乗り取りさへすれば、直に暗くなる方がよい。明
い間は敵の弾丸が烈しく来て、一旦乗り取つても、逆も維持は出来ぬ。是迄の攻
撃でも、乗取ることが困難なるより、乗取つた跡で諸方から弾丸が来て、遂に全
滅の悲惨に遇つたのである。然るに夜になれば、例令敵から撃たれても、盲目撃
であるから、命中は悪い。其間に防禦工事を爲して、彈丸を防ぐ様にするのであ
る。斯様な譯で、午後一時を攻撃時刻と定められたのである。

第一回の攻撃では、拂曉に攻撃を行ひ、戦利あらず退却したものも、敵の射撃
の爲め、一歩も動くことも出来ず、非常の苦心を嘗めた。是が經驗になつて、此度は
拂曉攻撃を止めて、午後後に攻撃を實行したのである。

要塞戦は勇氣や驅引では勝てぬ。全く數理的である。敵より味方の方が勢力
が強いのか、勢力同等にても、氣力が優つて居れば、一時敵を追退けることは出来
る。去れど砲臺は前の方に向いてこそ、掩蓋もあれば銃眼もあるが、後に向いて
は何もない。砲臺に乗り込むた味方は、土囊を置くか壕を掘つて、身を防ぐ手段

三十二 第二回總攻撃

を施さねば砲臺なり又は占領した地に止まつて居ることは出来ぬ其内に敵弾は前から横からも来る死傷は續々出来る夫にも關らず防禦の工事が出来て砲臺に残る兵が敵より優勢であれば敵の盛返しに撃勝つて砲臺の占領者となり力少くして抵抗が出来ねば涙を呑みて退却するの外はないのである。

孔から蟻の出る如し

第一師團は目的を達せず

P 堡壘占領

豫定の時刻になると歩兵の突撃が始まつた攻路の中から續々と攻撃兵が出て行く處は恰度蟻の孔から蟻が出る様で跡から跡からと心天を突出す様である第一師團方面にありては作業班は土囊を擔つて突撃したが附近の銃砲弾は素より椅子山案子山よりも砲火を集中し死傷は益増加するのみで一時前進を中止し午後七時携帶橋を架設し壕を渡らむとせしも掃射頗る急にして目的を達せず徒に犠牲を供したに過ぎなうだ。

第九師團方面に在りては是より先二十六日午後五時十分より鉢巻山を攻撃して全部を占領し三十日午後一時より二龍山攻撃に向ひたる部隊は外壕に架橋せむとせしも遂に破壊せられ不成効に終れりP 堡壘は一戸少將指揮

一戸少將の蹶起

瞬時に殆ど全滅

吉永砲臺も取れず

の下に勇戦奮闘し遂に之を占領せり然るに敵は數回の逆襲を試み我占領隊は將校概ね負傷し如何ともする能はず堡壘を捨て突撃陣地に引返せり此情報の一戸少將の許に達するや少將は蹶起して一語を發せず中村副官を従へ自ら陣頭に立ち遂に之を奪還せり其後天長の佳節に於てP 堡壘は少將の功に依り一戸堡壘と名けられた。

第十一師團方面にありては主力は東雞冠山北堡壘に向つた此堡壘は最も重要な砲臺で之を取らるゝと敵は吉永砲臺もP 堡壘も持つて居ることは極めて困難である其處で敵も死力を竭して防戦する第二十二聯隊より四十七士に擬し四十七人の決死隊を撰抜して突撃せしめたが外壕は深くして容易に胸牆に攀登することは出来ぬ側防機關は無比に完全で瞬く間に殆ど全滅して仕舞つた。

吉永砲臺にも一旦突入したけれども諸方よりの射撃が猛烈で是も殆ど全滅に歸し占領することは出来ず恨を呑むで退却した此砲臺は東雞冠山北堡壘の取れぬ間は例令一旦取つても維持は出来ぬなせなれば北堡壘より横に

撃たるゝからである。

東雞冠山砲臺には歩兵第十二聯隊の二大隊を以て突撃し、一旦頂斜面に日章旗を翻したるも、烈しき銃砲弾と優勢なる敵の増援隊の爲め、空しく退却するの止むを得ざるに至つた。後方の觀測所から見るに、健全に退却したものは眞に少數に過ぎなんだ、嗚呼、慘なる哉！

東雞冠山砲臺
痛山占領

痛山に向つた隊は、敵の集中火を受け、死傷相踵ぎしも、千辛萬苦死力を出して、工事を營み、確實に占領することを得た。此山は吉永砲臺と東雞冠山砲臺の中間に挟まれ、其距離は百米にも足らぬ、之が終に占領し得られたのは、野戰的の眼を以て見れば、實に不思議の様であつた。要塞戰は實に寸土尺地を争ふので、智力を以て勝つことは出来ぬ、眞に力比べ根比べである。

旅順の運命
すには影響せ

此度こそは旅順の運命窮れりと意氣込みたる攻撃も、一戸堡壘と痛山を占領したのみで、旅順の運命には何の影響もなかつた。

永久砲臺は勇氣で取れるものではない、彈藥糧食盡きて明渡すか、砲臺を根柢より破壊して敵の據り處を無くするか、でなければ占領の出来るものではない。

波艦は來航
近し

攻撃を二〇
三高地に向

いと云ふことが、流石勇敢なる日本將卒の肝に銘した。然らば如何なる策を取るべきか、嚴密に内外の交通を絶ち、彈藥糧食全く缺乏して降参するを待つか。否、左様呑氣に構へて居る譯には行かぬ、波爾的艦隊は既に十月十七日に本國を出發して、日夜極東に向つて航進を續けて居る。順當に航海を繼續すれば、十二月末か一月始めには、臺灣近海に形を現すことは困難ではない。一方奉天方面の敵は漸次増加する。我聯合艦隊は一月以來常に海上を游弋し、數度の戰爭を経て、損所は急修理をした計りで、速力も著しく減つて居る。一旦船渠に入れば、充分の活動は出来ぬ。若し旅順の陥落せぬ内に、敵の艦隊が形を現すときは、旅順の敗殘艦隊も活動を始めるに違ない。腹背敵を受くることになれば、聯合艦隊の勝敗は豫想は出来ぬ。聯合艦隊敗れたりとせば、制海力は彼の手

に歸し、滿洲の野に在る大軍は、彈藥糧食を得る方法はない。
實に危機一髪である。茲に於て軍司令官の計畫は少し變更して、一日も早く二〇三高地を奪取して、茲に觀測所を置いて、旅順口内にある軍艦を、二十八榴彈砲で悉く撃沈め、我艦隊に入渠の時間を與ふることになり、全力を二〇三

高地の攻撃に向くことになつた。

幸なるかな、十一月二日に一の快報があつた。

『旅順市内に事變の起れるもの、如く住民東奔西走す。』

さて旅順も急降参の準備をするか、最後の抵抗をする爲め、老鐵山の蔭にでも隠れることかと推量して居たが、何事もなく鎮定して大に失望した。

大失望

三十三 陣中の天長節

翌れば三日は天長の佳節である。天長節は旅順の廣い家で分捕の洋酒に酔ひ得ること、期待して居たが、全く晝餅に屬して、土窟の中に、鐘詰肉で此佳節を祝するの止むを得ざる境遇である。越中陣にはあらねど、向から外れるので仕方がない。

土窟乍らも敵より見へぬ處には、小さき國旗が樹つて居る。敵から撃たぬ限り、此方からは仕掛るなと云ふ命令である。併し正午を相圖に、海軍砲と攻城砲を以て、百一發の實彈入りの祝砲が敵の砲臺に向つて發射される。實彈の祝砲

晝餅に歸す

實彈の祝砲

は世界開闢以來の嚆矢であらう。然れども斯様な時には、能く敵に乗せらるゝものであるから、少しも油断は出来ぬ。軍司令部からは、特別支給があり、午後二時から聯大隊の將校は、聯隊本部の天幕で祝杯を傾け、陛下の萬歳を唱へた詩あり。

連戰連勝國勢揚

稜威炬赫耀殊方

我皇五十三回壽

新領庶民樹日章

壓倒遼南十萬兵

神州精氣大空橫

陣頭斯日逢佳節

東向稱觴拜帝京

斯様な時には得て敵に乗せらるゝもので、油断大敵と思ひ、會食が濟むと、各中隊の砲臺地を巡視した。中隊長の報告に依れば、先刻軍司令官が巡視せられたと云ふことである。

乃木將軍なるかな、折角の祝日であり、參謀を巡視さすのも氣の毒と思ひ、自ら巡視されたのであらう。注意周到慈愛圓滿である。苟も軍司令官たるものが、單騎而も大祭日に戦線を巡視されるとは何事ぞ部下たるもの寸分の油

軍司令官自ら巡視

斷があつて濟むべきか勇は以て鬼を挫ぐに足り慈は慈母の赤子に於けるより濃である此勇と慈と百折不撓の意氣とを以て能く旅順の死命を制せられたのである。

此日も旅順市街に火災が起つた本日は我天長節であることは敵は知らなかつたであらう氣樂に大節を祝さして呉れた市街内には不平黨があつて放火したり彈藥を焼いたりするものがある様である異種の人物を包容して居る要塞の防禦は困難なるものであることが察せらるゝ。

露國皇帝の即位日

露國の戦記を見ると十一月三日は露國皇帝の即位日なるを以て第九聯隊兵營の中庭に於て觀兵式を行ふたとある恰も我天長節に遭遇して我より攻撃し得なんだのは残念であつた此日若し攻撃したなれば増援隊も容易に送ることは出來ず奇功を奏したかも知れぬ併し日本軍の攻撃を實行する前には必ず先づ砲戰を始めるので露軍では砲聲を聞いて出掛けても間に合ふと高を括つて悠々と觀兵式を行つて居たのではあるまいか。

先づ砲兵で敲き着けて置いて歩兵が突撃するのは順序ではあるが野戦と

砲撃せず突撃しては

違ひ敵の位置も解つて居れば兵力も解つて居るのであるから砲撃などを行はず直に飛込む方が勝利を得たかも知れぬ何時でも先づ砲撃を始めるものであるから敵は豫備隊を悉く其方面に送る若し反對に攻撃せぬ方に烈しく砲撃をして置いて其方面に悉く豫備隊を送つた時思つた所に攻撃を向けたなれば奇功を奏したかも知れぬ攻圍戦中に一度も此攻撃法を試みて見なかつたのは残念であつた。

三十四 北海男兒と爆破

新兵が多い

猛烈なる再度の總攻撃も二三の砲臺を占領したのみで旅順の陥落を促すには足らぬ死傷者は漸次増加して歩兵隊の兵力は減る計りで偶補充兵が來ても教育未完の新兵計りである人員が同じにしても第一回の攻撃時代とは、實力は非常の差がある然るに人員も餘程減つて決して充實しては居ない第一師團の死力を出しての攻撃も二〇三高地を占領することは不可能である。茲に於てか當時恰も動員を終つて居た新銳無瑕の第七師團は第三軍司令官

三十四 北海男兒と爆破

旅順包圍戰

の麾下に屬することになり十一月十二日大阪に於て乗船を始めた。
第七師團は到着するや否直に我右翼に用ゐられ第一師團と共に二〇三高
地向つて大活劇を演ずるに至つた。

波艦は近づ

前にも述べたる如く旅順の陥落一日晚ければ波爾的艦隊は何百哩か近づ
き奉天方面の敵は幾何か加はる譯である。夫れで奉天方面に對峙して居る師
團を旅順方面に引寄せれば奉天方面の權衡は益取れなくなる。遂に未だ一回
も戰場を踏むだ事のない新銳なる第七師團に御鉢が廻つたのである。

第一第九第十一師團は野戰より引續き攻圍に移つたので經驗もあり露兵
の手並も知つて居たのであるが第七師團は直接難攻不落の二〇三高地に差
向けられ意想外の苦戰をして師團長以下の心膽を寒からしめたことは後の
條に詳しく書く如くである。

滿洲の惡氣

敵が一つ増

滿洲ほど氣候の悪い處はない夏は日本よりも却つて焦げ熱いそれは濕氣
の少い爲めである十一月始から河水は皆凍る徒歩で涉ることが出来る十一
月十五日から防寒衣の着用を許された是から敵が一つ増した譯で寒氣と云

十一月七日

松樹山の爆
破噴火口の如

生埋め

ふ強敵と戰はねばならぬ。
我徒歩砲兵隊も七月上旬に出發してより四箇月半になるので靴も破損す
れば下着も不足する戰死者を火葬するのを見ると靴を交換して呉れとか胴
着丈けは焼かずに讓つて呉れとか云ふものもあつた様である。

前後二回の大攻撃も其効を奏せず正攻に決して以來工兵隊は毎日坑道を
掘り松樹山と二龍山に肉薄し十一月十七日には松樹山の爆破を行つた。

此日は風もなく薄曇りの穏かな日であつたが豫て期したる午後二時噴火
山の噴出の如き勢で爆破した斯様な大爆破は演習にも行つたことはないの
で經驗もない爆破と同時に突入する計畫で近い處の壕に潜むで居たものは
生埋めになつたものもある。

此爆破で外斜面の一部は壕の中に崩れ込み我兵は頂斜面の一部を占領し
堡壘は半我有となつた如何に頑強なる露兵も之には勝つことは出来ぬ何し
る地下から覆へさるゝのであるから生殘るものは一人もない觀測所から見
ると人か石か飛上るのが見ゆる噴火山の上に乗つた様なもので防ぐに術は

對坑道

旅順包圍戰
ない之を防ぐには唯對坑道なるものを掘つて敵の掘つて来る處を探知して僅の火薬を埋めて掘つて来る孔を潰して近寄る時日を遅延させるのみで絶對に防ぐことは出来ぬ只時日問題である斯くなれば早晩陥落は免れない唯一日にても日を延ばすに過ぎぬ要塞の防禦は不利なものである肺病患者の如きもので唯死を待つ計りで恢復する見込みのないと同様である然し夫が一方から云へば要塞の目的で我より多くの兵を引着けて一日も永く抵抗すれば目的は達せられたのである。

破二龍山の爆

二十日には續いて二龍山堡壘の爆破が行はれた爆破の景況は松樹山堡壘のそれと異りはない此方面の堅壘を倭指すれば第一が二龍山堡壘第二が松樹山堡壘第三東雞冠山北堡壘の順序である然るに第一第二等の堅壘は大爆破の爲めに半部は我手に歸し旅順の運命も日々切迫し行く有様は不治の病人の死を待つ如くである。

不治の病人の如し

三十五 第三回總攻撃

無敵の肉と鐵

野戰計りに慣れた人の目には想像も浮ばぬ無敵の肉弾と鐵とを供して突撃しては五歩か十歩敵を追下げるのである夫も其筈である敵は塹壕を幾重ともなく掘つて居て一つ取らるれば又其後方の塹壕に據りて抵抗するのであるから眞に開拓主義である或人は開拓戦と云つたが眞に其通りで鋤で一筋宛耕して行くのと能く似て居る。

開拓戦

攻撃の手は少しも緩まない二龍山も松樹山も一部は占領し今一步で陥落させることが出来るので二十六日を期して第三回の總攻撃を行ふことゝなつた。屢云ふた如く旅順の陥落する否とは今や帝國の安危に關する問題であつて陛下に於かせられても宸襟を惱まし給ひ攻撃に先ち恐れ多くも左の如き沈痛なる勅語を下賜された。

勅語

旅順要塞ハ敵カ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ其ノ攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス 朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス 然レトモ陸海軍ノ狀況ハ旅順攻略ノ機ヲ緩フスルヲ得サルモノアリ斯ノ時ニ當リ第三回總攻撃ノ舉アルヲ聞キ其ノ時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望

旅順包圍戰

ムノ情甚タ切ナリ爾等將卒夫レ自愛努力セヨ
此勅語を拜し、今や陸海軍の狀況は旅順攻略の機を緩ふするを得ざるものありと仰せらるゝ處に至らば如何に旅順の攻略が帝國の安危に關係多きを拜察することが出来る死か否死したりとて任務は果てし是でも非でも攻略を促さねばならぬ行掛りである。

軍司令官の奉答

右の勅語に對し軍司令官の奉答は左の通りである。

旅順要塞總攻撃ニ對シ勅語ヲ忝フス臣希典等感激恐懼ニ堪ヘス將卒一般聖旨ヲ奉體シ誓ツテ速ニ軍ノ任務ヲ遂行セムコトヲ期ス
謹ムテ奉答ス

第三軍司令官 男爵 乃木 希典

二十六日に至れば、二十八日榴彈砲は午前八時より、其他の中口径砲は十時半より一齊に砲撃を始めた。一心の影響か天祐か、彈丸は何時もより著しく正確に命中する。

主なる効力

効力の主なるものを挙げれば、二龍山堡壘に於ては、胸牆に大破孔を生じ掩蓋

の一部を壊ち、輕砲機關砲各二門を飛散せしめ、更に其東正面の砲一門を破砕し、散兵壕の一部を顛覆せしめ、松樹山堡壘に於ては咽喉部掩蓋二箇所を撃飛し、十五珊加農一門を顛覆し、他の一門を破壊し、凸角部の砲一門を傾斜せしめ、十二珊加農一門を顛覆し、又東雞冠山砲臺の砲一門を破砕し、咽喉部の野砲一門を撃破し、北砲臺の備砲一門を廢棄に歸せしめ、且彈藥庫を爆發せしめ、更に椅子山砲臺の十二珊加農一門を顛覆し、他の一砲架を傾斜せしめ、案子山白玉山、白銀山等の諸砲臺にも亦多大の損害を與へ、殊に西大陽溝北砲臺の備砲を破砕し、其火藥庫を爆發せしめ、二〇三高地にも大損害を與へ、砲撃の効力は著大であつた。

全線攻撃

砲撃の効果現はるゝや、午後一時より、歩兵は猛烈なる勢を以て、全線の大攻撃を始めた。此攻撃の結果如何は衆目の環視する處であつた。

鴨が山に上

當時に於ける敵の狀態は如何であるか、歩兵は漸次兵力を減少し、防禦は益困難を極むる現況である。然るに一方海軍は最早出撃の目的はない、遂にコンドラチエンコ中將と軍港司令官と協議の結果、爲し得る限り、海軍兵を陸上に

旅順包圍戦

使用することになつた。是が又旅順の命脈を幾何か永からしめた一原因である。

右翼師團の行動

右翼第一師團方面にありては、首力を松樹山堡壘に向け、午後一時を歸し、強硬なる突撃を執行し、一時咽喉部まで迫りたるも、敵の猛射に堪へず、外斜面に退き、渡邊大佐の指揮する突撃隊は翌午前二時頃に至るまで、新鋭の兵を増加しては、押し出し押出したけれども、敵の抵抗は頑強にして、剩へ椅子山よりは夜に入れば、探照燈を耀かし、案子山と協力して、大小砲彈を浴せ掛け、將校以下殆ど全滅の悲境に陥り、生存者は僅に身を以て免れ、恨を吞みて元の陣地に引返し、殆ど得る處はなかつた。

効果なし

三里橋北方高地に向ひたる、牛島聯隊も終夜の苦戦、其効を奏せず、天明に近づき、漸次危険の増加するより、敵前の地隙に工事を加へて、持續戦を行ふに過ぎぬ。

中央第九師團の行動

中央縱隊即ち第九師團にありても、午後一時を期し、歩兵第三十六聯隊の第二中隊を先頭とし、二龍山に向つて突撃を敢行した。從來數度の突撃に於て、素

射撃と土囊

艱難は人を金鐵にす
二龍山頂斜面占領

裸と甲武者の格闘に懲りたる經驗に依り、頂斜面に達するや、前方の者が前に向つて、射撃し、敵を苦しむる間に、殘る者は携帶の土囊を出して、土を掘つては詰り立て、身を隠す丈の掩體が出来た。此智慧が第一回の攻撃から出たならば、斯く無駄の生命を墜さずして済むたであらうに、惜いことであつた。併し始めから斯様な考の出るものではない、艱難は人を金鐵にす、數回の苦い經驗を嘗めて、學び得た學文である。斯くて二龍山の頂斜面を占領するを得た。一戸少將の率ゆる左翼隊も屢突撃せしが遂に得る處はなかつた。徒に犠牲を供したに過ぎぬ。

左縱隊の行動

左縱隊即ち第十一師團正面に在りては、前田少將隆禮、山中少將信儀、新山(大佐)佐良知の三地區隊に區分し、豫て作業中であつた東雞冠山北堡壘の坑路には八百斤の爆薬を裝し、午後一時大爆破を行ふと同時に、各地區隊は攻撃を始め

山中隊の結果

山中隊は、其主力を東雞冠山北堡壘に向けし、敵の防禦は完全にして、到底攀登を許さぬ。吉永砲臺に向ふたものも、北砲臺の我手に入らぬ間は、側面より

旅順包圍戦

前田新山はもふ成功

不



△望ヲ臺砲山冠鷲東ノ中撃砲我リヨ眼鏡地陣兵歩七第

の猛射に堪え得ず、遂に無残や多くの死傷を委棄して引返した。前田隊新山隊も、猛烈に攻撃し新山隊は一時東雞冠山中腹の散兵壕を占領せしも、優勢なる敵の逆襲に遇ひ、遂に棄て退却せり。斯く第十一師團正面に於ては、死傷を出したるのみにて、一も目的を達し得なんだ。第一第二回の總攻撃とも、第十一師團は砲臺の堅固なる爲め、一も攻略することが出来ず、第三回の攻撃には師團長以下非常の意氣込みで、必ず北堡壘を占領せしむは止まぬ決心であつた。然るに不幸にも土屋

師團長負傷

師團長は、二十六日に重傷を負はれ、部下の落膽は其極に達し、幾分か攻撃の火の手に影響したであらう。

師團長の後任には、豫て軍司令部附として、來着し居られた、鮫島中將が直に任命せられて、指揮を取られた。中將は、工兵出身で、自ら要塞戰術家を以て任じ、攻圍軍の師團長としては、無二の適任者である。實に其計策は肯綮に中つて、偉効を奏した。

未だ曾て見ざる防禦法

余は此攻撃の後、師團司令部に行き、新山大佐に邂逅した。其時大佐の話に、是迄教授も受け、書物も讀むで見たこともあるが、露國の此度の様な防禦の仕方は聞いたことも見たこともないと云はれて居た。其時余は如何なことがあるか、詳しく聞きもせなんだが、陥落の後、巡視して驚いたことがある。

散兵壕は一面の火

散兵壕の中には、大きな網がある處々に、箒の如くしてあつて、全體にコールトールが塗つてある。イザ退却となると、箒の處に點火するのである。それであるから、此方は突撃しても散兵壕の中は一面の火焰で、その中に入つて身を隠すことは出来ぬ。皆壕の縁に臥せるか、跪いて居る。其間に例のバタ／＼の機關

銃や小銃で將棋倒しに撃たる、残るものなく皆死んで仕舞ふのである。夜になると散兵壕の前には、我突撃と知れば、十米か二十米毎に燈火を點する様になつて居る。恰も白晝の如くで、蟻の這ふのまで見ゆる。遠地から見ると、祭禮の提灯が軒毎に掛つて居る様である。何時も其燈明が燈れると、又御祭が始まつたと云ふたものであつた。

白樺隊

二十六日の夜は今にも白樺隊の名の残つて居る。特別豫備隊が編成せられ、中村少將覺が其指揮官に選任せられた。其兵力は歩兵四大隊と工兵一小隊であつた。

乃木司令官の演説

此特別豫備隊の編成を終り、此日の拂曉龍眼北方に集合して、乃木軍司令官は沈痛なる訓示演説をされた。其要旨は今や陸には敵軍の兵力日々に増加し、海にはバルチック艦隊の來航日々に切迫しつゝあり、國家の安危は我が攻圍軍の成否に因りて決せられんとす。此時に當り、特別豫備隊の壯舉を敢行す。余は將に死地に就かんとする當隊に對し、囑望の切實なるものあるを禁せず。諸子が一死以つて君國に殉ずべ

指揮官以下幹部死傷



東鶴冠山北堡壘ガニエールノ爆發

きは實に今日に在り希くは努力せよ。と聽く者、云ふ者、眼底涙を浮べ、歎歎の聲さへ漏れ、慘として水を打ちたる如くであつた。先頭部隊は、午後八時五十分運動を起し、鐵條網を截斷し、前隊仆るれば後隊之に繼ぎ、心太的に跡より跡より押出せしも、指揮官中村少將以下主なる幹部は皆死傷し、翌午前一時まで奮闘せしも、終に成功を認めず、唯敵にも大損害を與へたに過ぎなかつた。少將負傷後作あり。

露國は防禦
は強い

露軍の兵力

「おののけ身はさもあらはあれはかりこと ならさりしこそ恨みなりけれ」
 の一句末代までの記念を止めた。
 防禦に掛けては露軍も中々強い野戦に於ける機敏な驅引こそ出来ざれ陣
 地戦に於ては日本兵以上なるかも知れぬ併し強いに一の理由もある松樹山
 二龍山や東雞冠山北堡壘の如きものを見るに退路と云ふものは残してない。
 砲臺に入る時は橋を渡つて入つて橋は引揚げて仕舞ふのである敵も入るこ
 とは出来ず自分も出ることとは出来ぬ一旦堡壘に入つた上は一人残らず死す
 る覺悟である斯くなる上は他に活路はないので窮鼠猫を食むの諺の如く最
 後まで抵抗するのである。
 露軍の兵力 露軍の兵力は幾何の兵力があるか比較する
 必要がある攻圍の始め旅順要塞に楯籠つた歩兵の数は三十二大隊である其
 後義勇兵も編制せられ水兵も上陸せしめられたけれども露軍の戦闘に死傷の數
 は著大であつて決して増員して居る氣遣はない然るに我兵力は三師團第七
 師團を除きと後備二旅團である即ち大隊の數は四十四で殆ど二と三の比例

露軍の指揮官

爾靈山の位

である。然るに露軍の攻撃に功を奏せぬ點より考へると防禦工事の價値の大
 なることを判定することが出来る。
 我攻撃正面の露國の指揮官はゴルバドフスキー少將であつたが攻撃を受
 くる度毎に何時も困つた困つたと云ふ報告をして居る實際苦心したに違ひ
 はあるまいが始終一貫開城まで持續した彼の膽略も稱揚すべき價値がある。
 宜なりステツセル中將以下軍法會議の被告となつたもの多きに關らず彼は
 一點の批難も受けななんだ。

三十六 爾靈山攻撃

音に名高き爾靈山は旅順新市街の西北約二千米に屹立する要害の高地に
 して老鐵山に次ぎての旅順周圍の最高山である。一たび此山に登れば西港の
 全部東港の大部分及び老虎尾半島の全部黄金山等旅順一帯は只白玉山の蔭
 を除きては見えぬ處はない其處で敵も第一回の總攻撃以來晝夜全力を注い
 で工事を施し實に堅固を極めて居る。



銃關機スキチツホノ敵ルアレンサ壊破ニ央中地高米四十七百

一度二度三度まで念に念を入れ、仕切つて立ち上つて、死力を竭して行つた攻撃も、白樺隊の壯舉も遂に旅順を陥落させることは不可能であつた。最早此上は兵力を増すか、持長して敵の自滅を待つかの、二途あるのみである。然るにバルチック艦隊の來航まで、旅順の殘艦を活し置いては、海上の形勢如何に變化するかも測られない。急ぎ爾靈山を奪取して、茲に觀測所を設け、港内を直視して、二十八榴榴砲の威力を以て、旅順艦隊を撃沈するは今日の急務である。

全力を注ぐ

彈丸は霞の如し
噴火の如し
攻撃命令

茲に於てか、野戰重砲兵や九瓏臼砲の如き、運搬の出來得るものは、續々此方面に移され、二十八榴榴砲も加はり、新來の第七師團も此攻撃に向けられた。第七師團の諸隊長が戰線を巡視しての歸途、相互に話し合つて居るのを聞いた旅順も見た處では、戰線には幾何の兵も居らぬ様である。幾度攻撃しても取れぬのは、攻撃兵の方に、多少怯氣が附いて居るのではあるまいかと。然り誰の目にも其様見へる。歩兵の一大隊もあれば、旅順の真中まで駆け込んでステツセルやスミルノフの首を提げて來るのは、朝飯前の仕事の様に見ゆるが、偕飛び込んで見ると、到る處に防禦工事がある。一つ飛び越えても、其先其先と幾重にもある、到底横行を許さぬのである。

十一月二十七日早朝より、爾靈山には、二十八榴榴砲を始め、攻城砲野砲の彈丸は、霞の如く注がれた。中にも野戰榴榴砲の榴彈は、黄色薬を填てあるので、眞黒な煙が出る。彈丸の破裂する煙で、爾靈山が噴火を始めたかの様に見ゆる。軍司令官より攻撃の命令は下つた。午前十時第一師團長は部下に命令を下した。



敵ルアレスサ破ニ中央地高米四十七百
鉄關機 スキチツホノ

一度二度三度まで念に念を入れ、仕切つて立ち上つて、死力を竭して行つた攻撃も、白樺隊の壯舉も遂に旅順を陥落させることは不可能であつた。最早此上は兵力を増すか、持長して敵の自滅を待つかの二途あるのみである。然るにバルチック艦隊の來航まで、旅順の殘艦を活し置いては、海上の形勢如何に變化するかも測られない。急ぎ爾靈山を奪取して、茲に觀測所を設け、港内を直視して、二十八榴榴砲の威力を以て、旅順艦隊を撃沈するは今日の急務である。

全力を注ぐ

彈丸は霰の如し
噴火の如し
攻撃命令

茲に於てか野戰重砲兵や九珊臼砲の如き運搬の出來得るものは續々此方面に移され、二十八榴榴砲も加はり、新來の第七師團も此攻撃に向けられた。第七師團の諸隊長が戰線を巡視しての歸途、相互に話し合つて居るのを聞いた旅順も見た處では、戰線には幾何の兵も居らぬ様である。幾度攻撃しても取れぬのは、攻撃兵の方に、多少怯氣が附いて居るのではあるまいかと。然し誰の目にも其様見へる、歩兵の一大隊もあれば、旅順の真中まで駆け込んでステッセルやスミルノフの首を提げて來るのは、朝飯前の仕事の様に見ゆるが、倍飛び込んで見ると、到る處に防禦工事がある、一つ飛び越えても、其先其先と幾重にもある、到底横行を許さぬのである。

十一月二十七日早朝より爾靈山には、二十八榴榴砲を始め、攻城砲野砲の彈丸は霰の如く注がれた中にも野戰榴榴砲の榴彈は、黄色薬を填てあるので、眞黒な烟が出る、彈丸の破裂する烟で、爾靈山が噴火を始めたかの様に見ゆる。軍司令官より攻撃の命令は下つた、午前十時第一師團長は部下に命令を下した。

旅順包圍戦

右翼隊は中央隊と協力し、本日午後三時を期し、爾靈山を攻撃せよ、歩兵第十

五聯隊の一大隊半を附屬す。

砲兵隊は主として右翼隊及中央隊の攻撃地點を砲撃せよ。

爾靈山を攻むるには、赤阪山を取らねばならぬ、其處で中央隊は同時に赤阪

赤阪山を攻

山を攻むることになつた。

右翼隊は後備歩兵第十五聯隊をして、午後六時より攻撃を開始せしめ、後備

歩兵第一第十六聯隊は後方に控へ、其内第十六聯隊は攻撃援助に當てられた。

中央隊にありては、歩兵第一聯隊に近衛工兵一小隊を附し、午後六時より同

じく攻撃を開始せしめ、豫備隊たる歩兵第十五聯隊の第一大隊は海鼠山の北

側谷地に集合した。

山形變る

此日終日、爾靈山は砲撃を受け、二十八榴彈砲の彈丸は、掩蓋の軌鐵をへ、の

字形に曲げて撃ち揚げるのが見ゆる、山は形の變るほど彈丸を受けた。

朝より暮まで、瞬時も止む時なく、重砲輕砲の彈丸が絶間なく注ぎ掛けられ、

何處から見ても敵の隠れ場はない様である、其處で午後六時に至り、右翼隊の

突撃決行の
命令
掩蓋の一部
占領

兩大隊は二條の攻路内を前進して、先づ小銃戦を始めた、朝よりの砲撃に依り

殆ど破壊されたと思はれた第一散兵壕の掩蓋の下には、尙多數の敵が潜んで

居て、小銃火を注ぎ掛ける、突撃隊も躊躇して居る、此在様を見たる、香月聯隊長

後備歩兵第十六聯隊長は、第五中隊を中央攻路の第一歩兵陣地に呼び寄

せて、掩護射撃を命じた。

七時四十分に至り、兩縱隊は突撃決行の命を受けた、右大隊は鐵條網を破壊

し、勇を鼓して突撃して、第一線掩蓋の一部を占領した。

左大隊は赤阪山西側と、掩蓋の中より、小銃機關銃の縦射を受けて、到底飛び

出すことは出来ず、是非なく右大隊に合した、此際吉田大尉以下多數の死傷者

を出した。

兩縱隊は力を協せて、突撃に移らんとしたが、敵の射撃は益猛烈にして頭を

擡げること出来ぬ、進退谷まり防禦工事に取り掛つた、然るに散兵壕の一部を

我に取られたるを知るや、鴨湖嘴、太陽溝、大劉家屯、其他の砲臺より、猛烈に砲彈

を浴せ掛けた、此砲彈の爲め突撃隊の過半は死傷し、一旦占領したる掩蓋の一

終に放棄

部も遂に放棄し、涙を呑みて、第二歩兵陣地に退き、更に乗すべき機会を待つて居る。

赤阪山散兵壕占領

午後九時師團長より、中央隊は鐵條網を破壊して敵の掩蓋の下に達し、赤阪山は散兵壕を占領したとの通知を受けた。

斯くなれば友軍の關係上、右翼隊も停まつて居る譯には行かぬ、九時三十分より更に猛烈に突撃を再行し、遂に巔頂に達するを得た。然るに兩側よりは、小銃や機關銃の彈丸が猛烈に來る正面よりは、爆彈が來る、死傷は見る間に續出する、止むを得ず掩蓋の下方僅に五米の處に於て、岩石の類を利用し、應急工事を施し、敵と鼻を突き合はして終夜對戰した。

敵前の終夜對戰
中央隊の戰
闘經過

敵猛烈に追撃す

中央隊の爾靈山に向つたものは、爾靈山の縱射と赤阪山の側射を受けて、死傷續出し、巔頂より約五十米に達したものは、半數にも足らなんだ、赤阪山に向つて突撃した第二大隊は、午後六時十分敵の第一散兵壕を占領し、同五十分には頂上の散兵壕をも占領した。

午後十時多數の敵は手擲爆藥を投げて、猛烈に逆襲に轉じ、我占領隊の過半

を殺傷した茲に於て第二中隊を増援したれど、容易に敵を撃退することは出来ぬ、敵は益機關銃を亂射し、爾靈山よりも側射を受け、突撃隊は敵の第一散兵壕の直前に急造肩牆を造つて、漸く敵の爆藥を防ぎ、其位置を固守して居る有様である。

中央隊長馬場少將は、自ら攻路頭に立つて突撃隊を鼓舞し、午後十一時二十分更に二中隊を爾靈山に増加して突撃を再行せしも、敵の射撃は依然猛烈にして、辛ふじて中腹の死角に取附きたる迄である。

右翼隊の戰
闘經過

二十八日午前零時三十分右翼隊長友安少將は、豫備隊二中隊を香月中佐の指揮に復し、中佐は之を兩突撃隊に分屬して、突撃を執行せしめた。

同一時に友安少將は、爾靈山には二回の突撃を行ひたるも、敵の猛射の爲め成功せず、只今より第三回の突撃を執行する筈、其實行に至るや否やは追報すと、師團長に報告した。

師團長は突撃奏功の見込あらば、無論直に實行せよ、若しなければ拂曉を期し、猛烈に砲撃を加へ、是非とも攻略する意圖なりと返答した。同時に師團長は

豫備隊たる後備歩兵第三十八聯隊第二大隊を、右翼隊に増加し、軍の總豫備隊より送られたる歩兵第二十六聯隊を、中央隊長の指揮に屬した。

又も西南角に突撃

友安少將は新に指揮下に入つたる後備歩兵第三十八聯隊第二大隊を、爾靈山の西北谷地に進め、午前八時突撃實行を香月中佐に命じた。八時十分に至れば、砲撃の効果も現れ、香月中佐の指揮する兩縱隊は、西南の巔頂に向つて勇猛に突撃した。是迄沈黙して居た敵は、小銃を亂射し、爆薬を投げ、必死に防戦し、我兵の損害は實に夥しい。然れど、臆せず屈せず突進し、午前八時四十五分敵を掩蓋より驅逐し、日章旗は烟の裡に翻つた。
巔の堡壘を距ることは僅に咫尺である。然れど突撃隊は死傷甚しく、此上前進の餘方はない。

最後豫備隊増加

茲に於て友安少將は、最後の豫備隊たる後備歩兵第十六聯隊の第三第四中隊を悉く第一線に増加し、午前十時香月中佐は、全力を擧げて猛烈に突撃を行ひ、遂に悉く西南の巔頂を占領した。是れ我軍が爾靈山に喰ひ入つた第一歩である。

敵の逆襲

敵は爾靈山の一角に日章旗の翻るを見て、大陽溝、鳴湖嘴、其他の砲臺より、重砲弾を亂射し、附近よりは小銃弾を雨注し、新に増加したる三百名許りの敵は、爆薬を投げつゝ、瘡猛に押寄せ、巔頂の占領兵七八十名は、殆ど全滅し、今は眞に危機一髪である。

午前十一時二十分後備歩兵第三十八聯隊第二大隊の二個中隊は、香月中佐の指揮下に入つた。

同十一時四十分香月隊の爾靈山西南角に向つて突進するを見たる友安少將は、第二大隊を中央攻路より突進して、鞍部に向つて突撃を行はしめた。然れど東北巔頂と赤阪山の側射とを受けて、遂に鞍部に到着するを許さず、止むを得ず右方に轉回して香月隊に合した。

西南角の爭奪

間もなく西南角に達したる香月隊の一部は、優勢なる敵に壓迫せられ、退却の色あるを見たる友安少將は、後續隊に急進増援を命じた。香月隊は全力を擧げて、西南角に突貫し、先の占領地を取り返し、追撃砲一門を進め、敵の逆襲に備へた。

旅順包圍戰

第七師團兵の初戦

午後二時右翼隊に下つた師團命令の要旨は、中央隊は午後四時爾靈山の東北部及赤阪山に突撃を行ふ。其隊は中央隊の攻撃に伴ひ突撃を決行せよ。歩兵二中隊を貴官の指揮に屬せしむと云ふのである。

友安少將は、後備歩兵第三十八聯隊第二大隊歩兵第二十六聯隊第二大隊を、香月中佐の指揮に屬し、午後突撃を行ふべく命じた。香月中佐は歩兵第二十六聯隊第二大隊の到着するを見て、同大隊後備歩兵第十五聯隊の三中隊同第三十八聯隊の二中隊を第一突撃隊とし、後備歩兵第十五聯隊同第三十八聯隊第二大隊の殘部を第二突撃隊とし、日暮に至るまで代るゝ突撃を行ふた。此日も朝來重砲の砲撃は一瞬も止まぬ敵は多大の損害を受け乍ら猶頑強に抵抗し、砲くまで死守して居る。然れば我勇猛敢死の突撃兵も功を奏せず僅に西南の一角を保持するに過ぎぬ。夜に入るも、戦況は少しも進行せぬ。占領地點に防禦工事を加へ辛ふじて死守し居るに過ぎぬ。

二十八日午前二時師團豫備隊の歩兵第十五聯隊第一大隊の半部を歩兵第一聯隊長寺田中佐の指揮に屬し、近衛工兵一小隊を附けて爾靈山と赤阪山に

中央隊の戦況

至る道路を作らしめた。此時歩兵第十五聯隊第二大隊の二中隊も聯隊長の指揮に屬した。

午前三時四十分師團命令は下つた。其要旨は、師團は本日午前八時を期し、爾靈山に對し突撃を行ふ。軍の總豫備たる歩兵第二十六聯隊は午前四時海鼠山北麓に來る筈。爾靈山攻撃隊は極力現在地を固守し、午前八時突撃し一舉巔頂を占領せよ。方家屯平原に在る右翼隊は、其前面の敵に對し有力なる牽勢運動を行へ。後備歩兵第三十六聯隊の一大隊を増加す。砲兵隊は拂曉より射撃を開始し、攻撃を援助せよと。

展盤溝に在る二十八榴榴砲は、拂曉より猛烈なる破壊射撃を行ひ、野戰重砲兵九連臼砲野砲も協力して熾に地雷彈や榴彈を浴せ掛け、午前八時迄には、山は形を變る計りに、大破壊を被り、爆煙の爲め山上は噴火の如き狀を呈した。

中央隊は徹夜通路を作り、午前八時一部を以て突撃を行つた。然るに敵の小銃火は少しも衰へず、全員忽ち殪された。馬場少將は攻路頭に居て、屢突撃を令し、極力突進すれど、徒に氣を揉む計りで、東北部の中腹にも達することは出来

師團命令

猛烈なる砲撃

中央隊の突撃不成功

三十六 爾靈山攻撃

す多くは途中に倒れて仕舞つた。

師團は午前十一時二十分歩兵第二十六聯隊の一大隊を中央隊長の指揮に
屬し右翼隊は今や爾靈山の西南頂を占領し最も苦戦中なれば此際突撃を實
行し友軍の悲境を救ふべしと命じた。

又も攻撃を
實行す

茲に於て馬場少將は午後一時四十分新銳の二個中隊を寺田中佐の指揮に
屬し更に爾靈山を攻撃せしめた此時中佐は重傷を負ひ枝吉少佐代つて聯隊
を指揮し爾靈山と赤阪山と同時に突撃を試みたれど兩方とも猛烈なる銃火
と爆弾とで我兵は殆ど全部死傷し目的を達することは出来ぬ是れより屢激
戦は繰返された。

此間二十八榴彈砲は斷えず猛射を行ひ木材は飛んで山の外に刎ね飛ば
され軌鋸は撃ち返されて餌の棒の如く曲る實に慘狀を極めて居る敵の隠れ
場は殆どない様である。

又も赤阪山
の突撃

午後二時三十分突撃は繰り返された赤阪山に於ては遂に敵の第一線を奪
取し更に散兵壕に逼り盛に爆薬を投げ終に敵を撃退した赤阪山の敵の動搖

死傷を生ぜ
しのみ

を見たる爾靈山突撃隊は躍進に次ぐに躍進を以てし第一の掩蓋散兵壕の線
まで突進せしも之より先に進むことは出来ぬ。

赤阪山の散兵壕も真に一部を占領したのみで敵は次第に増加し爆薬を投
げては壓迫し來り茲に大格闘は始まつた死傷は益加はり恨を呑み遂に舊位
地に退却した此時秀島少佐以下多數の死傷者を生じた。

爾靈山突撃隊は屢突撃に移りたるも敵の銃火は少しも衰へず辛ふじて現
狀を維持し頻に防禦工事を行ふて居る狀況である。

二十八日の戰況は右に述ぶる如くで成功と認むべきものはない唯死傷を
増す計りである。

占領地抛棄

二十九日午前一時中央隊長の報告に依れば、
二〇三高地東北部の巔頂を占領したる我兵は約三十分前敵の猛烈なる逆
襲に遇ひ止むを得ず占領地點を抛棄し第一掩蓋の下に引退せり。

殆ど同時に右翼隊よりも左の報告を出した。
西南部巔頂を占領せし我兵は背後より敵襲を受けて殆ど全部死傷し豫備

旅順包圍戰

隊を進め、目下辛ふじて第一掩蓋散兵壕の線を保持し居れり。

爾靈山の落否は、旅順の運命に關するのである。敵も極力防戦する全く彼我の力比べである。此勝負如何勝利は血と鐵の多き方に歸するのである。

師團長は攻撃隊の危急なる状態を知り、歩兵第二十六聯隊の二中隊を中央隊に増加し、馬場少將は直に東北部嶺頂に差し向けし。又も赤阪山よりの側射に依り、多大の損害を受け、辛ふじて第一掩蓋散兵壕に達せしは、僅に十數名に過ぎぬ。嗚呼何たる慘酷ぞ。

此掩蓋散兵壕を固守して居た兵も、幹部は悉く死傷し、指揮するものもなく、敵の爆彈の爲め殆ど死傷し、残る僅のものは遂に攻路頭に引退するの悲境に沈淪した。

午前四時三十分第一掩蓋散兵壕に生き残つて居たうちの下士一名、中央隊に歸り來り報告するに、今や生存者は僅に十五六名、爆藥も使ひ盡し、防戦も最早望みなし、速に増援隊を送られたし。依つて歩兵第二十六聯隊の二個中隊を増援せし、依然赤阪山の側射は猛烈にして、第一掩蓋下に達するまでには、

残る者僅に十數名

指揮官交代

第一師團長の訓示

殆ど死傷した。嗚呼北海道より遙々戦地に到着した計りの第七師團の兵は、二中隊四中隊と、漸々敵彈の餌食になるのである。

一回二回三回の増加で、今は第七師團の増加隊却て多數となり、第一師團の正面は松樹山迄に及び、師團長の指揮は實に困難である。然るに第七師團長は己れの部下を第一師團に借すのみで、謂はゞ無職である。其處で軍命令に依り第七師團長大迫中將は、爾靈山攻撃隊の全部を指揮することゝなつた。

第一師團長は指揮權を第七師團長に譲り、部下の諸隊にして爾靈山に残り、第七師團長の指揮に入るものに左の訓示を發した。

訓示

諸子は連日戦鬪に等しき勞働に服し、更に一昨二十七日以降頑強なる敵に加ふるに凜烈なる嚴寒と戦ふこと茲に三日、豫期の効果を收むる能はざりしも、成否は天なり。諸子の職務に盡す亦至れりと云ふべし。今や茲に第七師團新銳の兵と共に、再舉目的を達し得るの時機に會せり。諸子の忠勇義烈なる、難に莅みて勇氣百倍非常の決心を以て、今回の攻撃には必ず目的を達せ

旅順包圍戰

ん事を期すべし。

嗚呼此訓示を讀むに慈父の愛兒を他人に托する如き感あり之を讀みて無
感覺なるものは人に非るなり第一師團長は此訓示を認むるに涙は紙背を沾
したであらう實に想像する余も亦目に涙を浮かすには居られない。

不幸前線な
履む

三十日未明より我重砲は爾靈山と赤阪山に砲彈を雨注する砲撃の熾なる
間は敵は頭を出さぬ砲撃を緩め我兵が突撃に移らんとすれば直に小銃を亂
射する其頑強なることは敵乍ら感心である。

吉田聯隊長
戦死

午前十時より屢突撃を試みたれど日中は逆も成功の見込はない午後八時
に至り全線夜襲を行ひ遂に巔頂の敵を逐ひ一時占領した然るに敵は猛烈に
逆襲に轉じて來た此時吉田聯隊長先づ戦死し奥田大佐の負傷を始め將卒の
死傷刻々に續出し不幸にも前線を踏んで巔頂を敵手に委し僅に一角を保持
するの悲境に陥つた。

引續き攻撃を續行する筈であつたが増加増加と後より後より新銳の兵を
注ぎ込みたる結果隊は非常の混雜となり何の隊が何處に居るか殆ど區別の

隊伍の整頓



二三百米高地西北ノ牛腹ヨリ頂上ヲ望ム

附かぬ状態である。それに狭き攻路
の中は死體で歩くことも出来ぬ
有様で一時攻撃を中止し隊伍の整
頓攻路の掃除を行ふこととなり十
二月一日より四日まで攻撃を止め
て整頓を行ひ五日を以て大攻撃を
實施することに決した。
十二月五日は來た早朝より重砲
砲の彈丸は霰の如く注がる、其慘
状は前に倍して居る。
砲撃の効果現るゝを見るや歩兵
第十四旅團長齋藤少將は部下と第
一師團兵を指揮し猛烈果敢に突撃
を行はしめた敵は連日の砲撃の爲

旅順包圍戦

爾靈山全部
占領

身を隠す處もなく兵力も大に弱り抵抗力は意外に少く、一舉西南の巔頂を占領した。東北部の敵状を偵察するに守兵極めて少き様である。機を察するに敏なる齋藤少將は急ぎ突撃隊に前進を命じ、午後悉く敵を驅逐し、全山悉く我有に歸した。斯くして爾靈山は第七師團新來兵の手に落ちた。萬歳萬歳！

三十七 腸を斷つ

頑強に！頑強に防戦した二〇三高地も刀折れ力竭き終には投ぐる石も盡き、遂に我手に歸し、旅順の運命は、日一日と危急を告げ、瀕死の状態に迫つて來た。

高地占領と同時に重砲兵は茲に觀測所を設備し、六日より軍艦砲撃を始め

壁を擲つ如

三日間に殆
と全滅

爾靈山攻撃
の主動者

た。海岸砲臺の戦争は動いて居る軍艦を撃つのである。二十八榴彈砲の本務は固より夫であるが、港内に碇泊して居る軍艦を撃つのであるから壁を擲る様なもので、狙ひさへ違はねば命中らぬ氣遣なし。我砲臺の方は山蔭に居るので、敵弾は滅多に來ぬ。全く演習の様で沈着して砲撃を行ふて居る。

八日の午後まで三日間の内に「ペレスウエイト」「ボビエダ」「ポルタワ」「レットツキ」「ザン」「バルラダ」「ギリヤツク」「バーヤン」等目ぼしき軍艦は皆撃沈し擱座して仕舞つた。此報告の或筋に達した時信を措き難しとの返電があつたと云ふことであつたが、是迄何時の攻撃にも犠牲計り拂つて居たものが、二日か三日の間に、敵の軍艦残らず片附けたとの報知には疑を起すも無理はあるまい。餘りボロ過ぎる様である。

爾靈山の攻撃に始終主動者となつて居たものは、友安少將の率ゆる後備歩兵第一旅團である。九月十九日の第一回の攻撃より常に此高地と運命を共にし、終に第七師團と力を協せて、此高地の止めを刺したる其功績は、此高地と共に永久没却してはならぬ。

旅順包圍戰

旅順港内に遁竄して居た重なる軍艦は悉く撃沈められ、残るは網の目を漏れた、驅逐艦や水雷艇のみで、二十八榴榴砲の目標とするに足らぬ雑魚計りである。終に旅順の腹は絶れた。斯くなれば聯合艦隊は最早旅順の監視をする必要はない。僅に若干の驅逐艦か水雷艇を監視として残し置けば充分である。其處で一月以來絶えず渤海灣を游弋して居た聯合艦隊は、緩々内地に歸り、入渠することを得るの機會に接したのである。是で先づ旅順攻圍の半部の目的は達せられたと云ふことが出来る。

若し第二回第三回の攻撃に、無数の犠牲を拂つたものを悉く爾靈山に向つて注ぎ込んだならば、占領の出来ぬこともなかつたであらう。爾靈山の防禦工事を堅固にしたのは、第一回總攻撃以後のことである。敵の方では、我攻圍軍が攻撃正面のみならず、屢々爾靈山攻撃を試むるので、漸々と防禦工事を堅固にする氣になつたのであらう。毎日軌鐵や木材を運ぶのが、此方から見へて居た。爾靈山の防禦は幾程堅固なるにしても、永久堡壘の如き超ゆべからざる大障

來著も豫期より晚く、五月となつたので、我聯合艦隊も、充分の働きが出来たのであるが、若しも旅順艦隊の残存する間に、來着したとすれば、其結果は如何になつたか解らぬ、實に天祐であつた。

日本の海岸砲臺で、敵艦に向つて實弾を撃つ様なことがあつては、夫れこそ大變である。開闢以來元寇や馬關砲臺の外は、外國の彈丸を受けたことはない。其時代と今日とは、世界の形勢が違つて居る。若し海岸砲臺に敵彈を受くる様な場合に至れば、價金は素より北海道や對馬位は渡さねば、結末は着かぬ。日露戰爭は實に兩橫網の相撲で、勝敗は誰とて斷言することは出来なかつたのである。此戰爭に終局的勝利を得たのは、偏に陛下の御稜威と、將卒の忠勇と、全國民の敵愾心の結晶と謂はねばならぬ。

三十八 白砲の突進

東雞冠山北堡壘は、其構造最新式にして、第十一師團は死力を竭して、數度の突撃を試むれども、何時も空しく犠牲を供するに過ぎぬ。然るに一戸堡壘より

脇腹を鎗で刺す如し

司令官の一

は左側面が手に取る如く見ゆる。若し茲に臼砲の如きものを据附けて射撃すれば脇腹を鎗で刺す如く掩蔽部を破壊して守兵の住所を撃潰すことは確實である處で一戸堡壘と支那圍壁とは百米計りの距離を隔て、敵と相對して居る。逆も砲を露天に置く譯には行かぬ。一方には臼砲は大射角を掛けて撃つものである。然るに一戸堡壘と北堡壘とは僅かに百四五十米の距離を存するのみで殆ど水平にして撃たねばならぬ。それが出来るや否一の疑問である。攻城砲兵司令部でも半信半疑で余を呼出して意見を尋ねられた。余は豫て斯ることのあらんと期して居た。攻城砲兵司令部豊島少將は、

「今日貴官を態々呼出したのは、餘の儀ではない。東雞冠山北堡壘を短日數で破壊するには、十五瓏臼砲を一戸堡壘に進めて、側面より撃壊すより外に良策はない。然るに臼砲は水平射撃は如何かと思ふ。射角を掛ければ彈丸は遠方に飛んで仕舞ふ。水平附近で撃てば砲架が保つか否や解らぬ。又一つには、一戸堡壘まで持つて行くに、攻路の中は幅が狭くて通らぬ。夫を持行く方法があるか。此點に就ては各議論があるが、貴官に命ずれば請合ふか如何か」

腹間違へは割

大聲なれば聞へる

と云はれた。余は考へもせず誓つて請合ひますと云ふたのみで、何も云はなかつたが胸の内には疑が存して居る。けれども決心は堅い。若し仕損ずれば割腹して謝するのみである。何れ此戦役で生還は期しられない。今日まで生存して居るのは、儲けものである。寧ろ早く苦難を免れた方が増しかも知れぬと覺悟した。

翌九日は第十一師團司令部に行き、鮫島師團長に逢ひ、事情を具申した。此議論は師團から出たのであるから、師團長も非常に満足で、是非頼むとの事である。實地踏査に出掛けることになり、桑田參謀と石川工兵大佐、工兵第十一大隊長を附けられた。行つて見ると思ふたよりも敵に近い。大きな聲をすれば聞へる位である。

協議の結果位置も定まり、臼砲二門を据附けることになり、其小隊長には沈毅勇敢なる中尉川上準治を撰び、門司乗船の時海に飛び込むで出征せんとした。三戸下小太郎も、其時は昇進して上等兵であつたが、指名して其砲手に加へた。

二夜にして到着す

悲報至る

若木の一枝を折らる

道路もない畑の中を持つて行くのであるから、固より大困難である。十日の晩より運搬を始め、晝は何か解らぬ様に畑の中に覆をして置いて、夜になれば運搬するのである。勿論、燈明を點す譯には行かぬから、暗目である。然れど將卒共に非常の奮勵で、二夜にして目的地の二戸堡壘に達した。

工兵隊長の非常に熱心なる援助で、二日間、据附も濟んだが、困つたのは砲を隠す手段であつた。幸にも鐵飯があつたので、夫れを砲口の前に吊し、撃つ時丈け上げて直に卸すのであるが、夫れでも敵に近いのであるから、鐵飯を上げると直に小銃に狙撃される之が爲め、度々砲手を撃たれた。

十四日一の悲報に接した三戸下小太郎は、砲の運搬中より率先して非常に働いたが、惜し哉本日敵弾に中つて斃れたとの事である。嗚呼！彼は進むで戦地に飛出し、又何時進むで危険の地に投じ、他の模範を示して居たが、遂に名譽の戦死を遂げた彼の素志は達せられたのであるが、彼の如き勇敢の兵を失ふたのは、實に若木の一枝を折られた様な感であつた。敵の鼻先まで白砲を持行いたのであるから、危険の多いのは無論である。敵

前田旅團長の手翰

危険なる日砲臺

は己れの大事と、恃む北堡壘を猛射する、ことであるから、極力此白砲の破壊を勉むるに違ない。地區司令官たる前田旅團長より、余に送られたる書翰を掲げ、如何に旅團長までが心配して居られたかを紹介せん。

市川砲兵少佐殿

前田旅團長

拜啓
御蔭を以て、一戸堡壘上備附の白砲は、本日漸く其設備を了し、明日午前九時より射撃すること、相成り申候然るときは、或は日砲臺より砲撃を受くるの虞有之候に付、明日同時刻より後方に在る砲を以て、該敵砲に射撃を加へられ候様相願度最も、此事は既に師團へ申請中に有之候へ共、敵砲より射撃を受けたる後に於て、更に我より砲撃を加ふる如きは、既に策の拙なるものと存じ不取敢、貴官迄及御協議候也。
此協議は至極有理である。日砲臺は高い處にありて、白砲を以て應射することとは出来ぬなせなれば、危険を防ぐ爲め、砲門は最小にして、唯北堡壘が撃てる丈けに成つて居る。若し廣き砲門を開かんか、直に大損害を蒙むる、夫であるか

三十八 白砲の突進

陸軍砲兵助 卒 宮崎 貞藏
同 同 松村 善治

明治三十七年十二月十八日東雞冠山北堡壘攻撃ノ際敵前約百米ノ一戸堡壘ニ在テ三面ヨリスル猛烈ナル敵火ヲ浴ヒ砲及砲手多ク損傷セルモ克ク長時間有力ナル射撃ヲ以テ敵ノ後方連絡ヲ遮斷シ同砲臺ノ占領ヲ容易ナラシメタリ其動作勇壯功績大ナリトス

明治三十七年十二月十八日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵 乃木希典

此威狀には三戸下小太郎の名は見へない彼は撃出すや否戦死して北堡壘占領の砲撃には加はり得ななんだ。

一戸堡壘からは北堡壘の背面を越して吉永砲臺の一部が見ゆる敵の豫備隊等の補充は必ず此處を通過する夫を側面から臼砲で撃つのであるから一發撃てば將基倒しに倒れる我突撃隊が何時も此手で遣られたのであるが此度こそ復讐して遣つたと思へば愉快に堪えななんだ。

始めて復讐

三十九 赤十字の効

死體交換は相互の利

野戰に於ては多くは一戰毎に位置が變る即ち攻撃の結果は敵味方何れか退却するのであるが要塞戰に於ては動いた處で百米か二百米の地を争ふので我兵が突撃して成功せねば死體は敵方に置いて歸り反對に敵が出撃して成功せねば死體は遺して歸るだから死體の交換は相互の利益である夫れが十二月二日始めて東雞冠山北堡壘方面で實行された。

死體の始末には我方より敵の方で困つたと見ゆる地を掘つて埋むるにも、土地は凍つて掘れず日本の如く死體を焼く習慣はないそれで敵の方から死體の引取りを申し込むのである。

敵の呼び聲

十二月一日二〇三高地に於ては尙激戰を交へつゝある間に東雞冠山北堡壘側防穹客内に於て頻に敵より何事か叫ぶ聲が聞ゆる我歩哨は將校に報じ將校は通譯を呼び聞糺さしめた處渠は敵の將校であつて左の如く申し出た。

「貴軍將卒の死屍は此堡壘内其他に充溢して居る貴軍に於て收容を欲せば、

三十九 赤十字の効

一人の指揮者に四名の擔架卒を附し、赤十字旗を樹て、收容の爲め來られよ、我は貴軍の勇敢なる戦死者に對し、飽まで同情を表して居るも、未だ收容すること出來ず、頗る遺憾に感じて居る、一には衛生上此勸告を爲すものである、若し貴軍に於て同意を表せらるれば速に收容せられんことを望む。』

明日を期して實行

『美事であるが、尙上級幹部に諮りて決答するのであらう。』

我は之に快諾を與へ、明日を期して實行せんことを決答した。翌二日午後二時二十五分、我將校二人、軍醫一人、通譯一人、兵卒若干人は、赤十字旗を樹て、新山隊の攻路頭に現れ、死體收容の爲めに來たことを告げしめた處、將校不在に依り暫く待たれよと答へた。

敵の三角旗

暫くして敵の一人の曹長來り、本日は日暮まで時間も少ければ、明三日午前十時より午後二時迄の間に於て、實行せんと申し出た。

然るに午後三時二十分敵は其散兵壕に三角形の白旗を樹て、日本語を以て、死體收容の事につき、通譯と將校とに會談せんと申し込み、前線の守備隊は之

煙草の交換

を第十一師團司令部に報告した。師團司令部及新山隊よりは、時を移さず出張し、彼我の兵は打混じて、死體を收容したけれども、日も傾き明日午前十時より午後二時までの間に收容することを約して訣れた。

中立地帯

彼我の兵卒は收容の間互に煙草など交換し、和氣霽々たる有様は、一時間前迄見れば直に撃ち合つた敵味方とは思はれなかつた。翌三日午前十時より、約束通り死體收容を繼續した。當日は彼我とも大きな赤十字旗を押し樹て、敵の散兵壕を距る十五米の地帯を中立地帯と定め、露兵は山上にある我將卒の死體を此處まで運び出し、我兵は之を受取りて、攻路頭に運搬し、收容したる死體は三百三十二名に及んだ。

敵の贅澤

状況視察の爲め午前十一時頃、桑田參謀始、將校軍醫五名、通譯等參會した。我方よりは、敵は永く籠城して居るので、酒や煙草には不自由して居るであらうとの推察で、ブランデーや煙草を携へて行いたとのことであるが、旅順陥落の後に調べて見れば、酒も煙草も澤山あつた敵の方では、斯様な粗末な酒や

旅順包圍戰

煙草が飲めるものかと嘲つたであらうが攻めるものより攻めらるゝものが、
醫澤品が潤澤であらうとは、誰も想像せぬのは道理である。此點から見ても敵
の贅澤さ加減が解る。

我將校も多少敵の砲臺の様子も見たであらうが敵も亦我攻路頭に來て攻
路の入口杯を見て居た之が砲臺を爆發する坑路かと思へば善い氣持はしな
んだであらう。

赤十字條約の効果は豪いものである。赤十字旗に對しては敵も決して危害
を加へぬ。第一第二回の攻撃に斯様な智慧が出たなれば多くの死體を腐敗さ
して悪い臭を嗅がすも濟むであらうに將來の戦争に於ては之に鑑み死體
の交換は出来る限り實行したいものである。

互に見合ふ

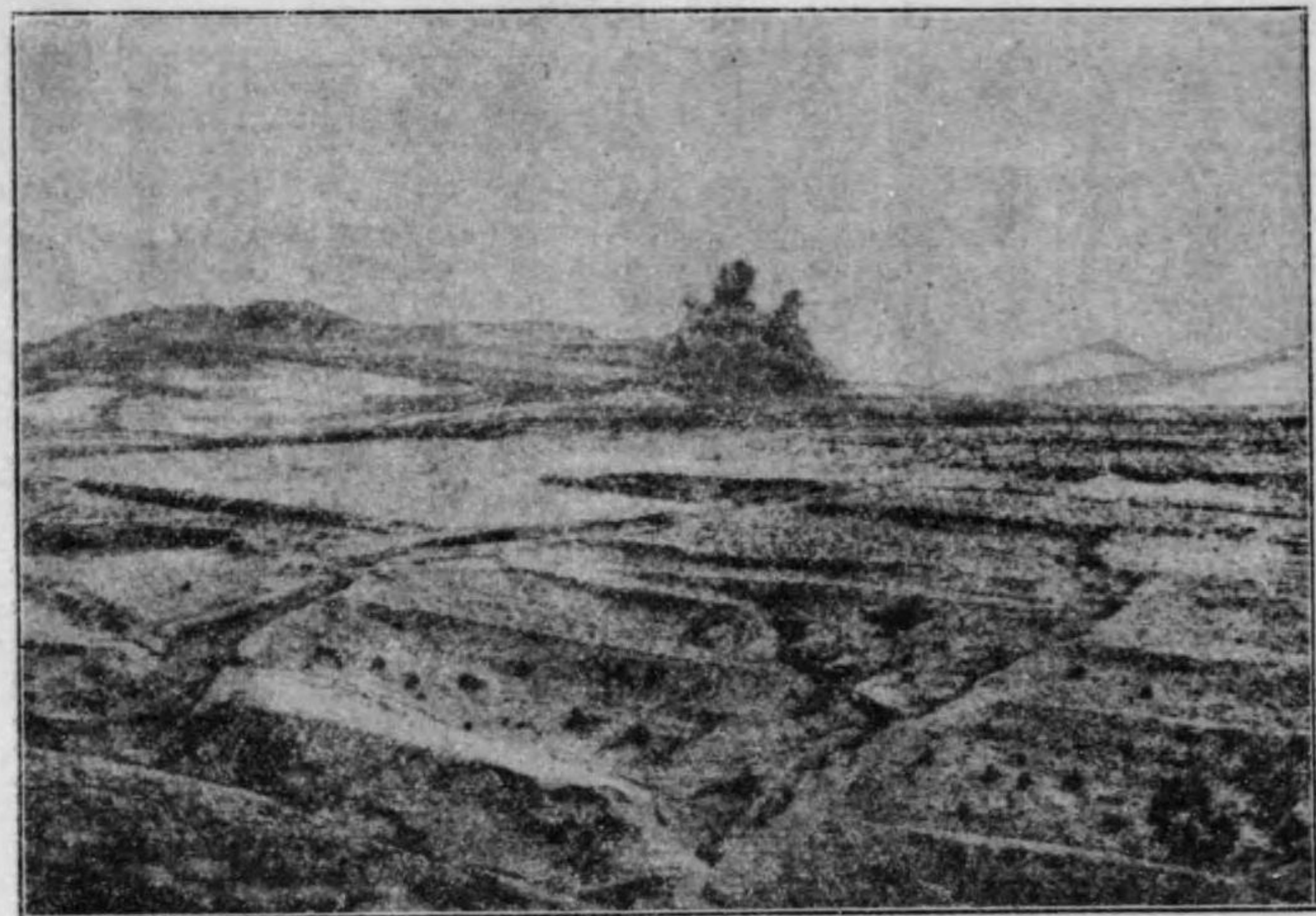
赤十字の効

此智慧が早
く出たなら

旅順要塞の
任務

四十 旅順の運命

「旅順要塞の任務は其主なるものは二つに歸すると思ふ。第一は波艦隊の來
航まで艦隊を安全に包容して、内外相應じて、日本艦隊を擊破し、制海權を掌握



姜家屯西北高地ヨリ東雞冠山北砲臺ノ發望

すること。第二は成るべく多くの兵
を引附けて、一日も永く抵抗して、奉
天方面の戰鬪を容易ならしむること
である。然るに第一の目的は最早
水泡に歸したのである。只恃む處は
第二の目的であるが若しも彼れの
希望通りに旅順が奉天大會戰の三
月上旬まで保堪えたとすれば、奉天
方面の戰爭は或は我軍の不利に歸
したかも知れぬ。一月に旅順が降參
したのは實に天祐である。

若しステツセル頑強にして、最後
まで抵抗を試みたとすれば、果して
三月まで持續し得たであらうか。余

の考へを以てすれば最後の決戦を覺悟しても、一月一杯旅順を持続することは困難であつたであらうとは開城後の景況で察知せられた。

十八日午後二時頃東雞冠山北堡壘に大爆破があつた是より先き十一月二十六日の第三回總攻撃に土屋師團長負傷せられ、鮫島中將が師團長となられて以來中將は豊富なる學識と偉大の膽略とを以て毎日部下を督勵し若し此度の爆破で北堡壘を占領することが出来ぬとすれば、特科出身の師團長は駄目と云ふことに歸するのであるから、此度の攻撃は余一身の榮辱のみならず、特科兵の榮辱であると云ふて居られた。

夫で爆破に次で歩兵第二十二聯隊と第四十四聯隊の一大隊とが突撃したけれども容易に成効せぬ其處で中將は自ら陣頭に立ち、後備歩兵第三十八聯隊の第二大隊を招致して更に突撃を加へしめ午後十一時四十分頃遂に占領を確實にした。二〇三高地と云ひ東雞冠山北堡壘と云ひ最後の止めを刺したものは、後備歩兵隊である。して見れば長い行軍をして、野戦の奔走には現役兵が勢力が強いかも知れぬが、要塞戦の如き力づくで行く戦闘には後備兵の

東雞冠山北堡壘占領

唇亡ひて齒寒し

方が強いのかと思はる。倍北堡壘の占領に依りて、此方面の最強堡壘の一つが我軍の手に歸したのである唇亡ひて齒寒し旅順の運命も日々迫り行く有様は敵乍らも哀れを催す様である。

彈丸は吝ま

加之敵の兵力は、一戦毎に減少する計りで、一人も補充の道はない。九尺間口に二枚の戸の如く、彼方を閉めれば此方が明く、到底締りは附かぬ始末である。敵の軍艦の健在なる間こそ、二十八榴榴彈砲の彈丸も保存したれど、軍艦の沈没以來は、二龍山と云ひ東雞冠山と云ひ彈丸は吝まらず射撃した、是亦陥落の一原因であらう。加之造船所や鎮守府の破壊の爲めに撃つた彈丸も莫大なものであつた。此彈丸は其附近に處嫌はず落つる露軍から病院を撃つと云ふ抗議を申し込むで来たこともあつたが、高價い彈丸で能と病院を撃つ馬鹿はない。色眼鏡を掛けて見れば、世界は皆青くも赤くも見ゆる。日本軍は露軍を不正な手段で苦むると思ふ、僻目から見れば、病院を撃つと思ふたでもあらうが、日本軍は左程に無智野蠻ではない。併し見へぬ處を探り撃ちに撃つのであるか

敵の僻目

旅順包圍戰

ら病院に落つる彈丸があつたかも知れぬ。

市街に二十八珊の彈丸が落ちては、一時も安心して居ることは出来ぬ。市民特に婦人等の哀訴は絶えず起るであらう。左様なると如何に勇敢なる司令官でも針の筵に居る様で到底永く抵抗することは出来ぬ。憶起せば攻圍の始め乃木將軍は人道を重むじ非戦闘員は城外に出すことを許すべくステツセル將軍に勸告された。然れど彼は瘡我慢にも其勸告を峻拒した。若しステツセル將軍にして當時乃木將軍の勸告に従ひ非戦闘員を出城せしめたなら如何であつたらう。糧食も食延ばすことが出来る。市民の哀訴も起るまい。波艦隊の來航まで抵抗が出来ぬとも、奉天會戰までは辛ふじて維持し得たかも知れぬ。憶へば彼の強情は、私の幸福をなしたのである。

彼の強情は
私の幸福

須將軍の愚
考

彼は如何なる考を以て、乃木將軍の人道主義を排斥したのであらうか。彼は思ふたであらう。遼東半島の守兵は、衆寡敵せず。終に旅順要塞内に退却するの止むを得ざる形勢に陥つたけれども、北方に於ては、日本全國の兵を擧ぐるも、到底露國の敵ではない。艦隊と雖も、彼我が優劣は未だ斷言することは出来ぬ。

何時勝利に歸するかも知れぬ。己惚の眼から見れば、北方に於て露軍優勢なれば、日本軍は腹背敵を受け、大敗に歸するは一目瞭然である。其時に當り非戦闘員を出したとありては、己の名譽に關するナニ乃木將軍小癢なり一人も出すものか。

最後の結果
如何

最後の結果は如何であつたか。旅順は遂に支ふること能はず、不名譽の開城を爲し、其身は軍法會議の被告となり、終に有罪の宣告まで受るに至つた。若し始めに大事を踏み、無用の人口を排出して置いたならば、斯く不覺の開城を敢てすることもなく、圍圍の辱を受くこともなかつたであらう。何國の要塞勤務令にも、籠城の始めに當り、無用の人口を城外に出せと規定してある。之を出したからとて、決して耻辱とするには足らぬのである。之を出さなかつたのは、強情か又軍事智識が足らぬと云ふて宜しいであらう。

敵將の非常
識

四十一年は逝きぬ

一撃の下に旅順を粉塵し、運善くば三十八年の新年は浦鹽で屠蘇を傾けん

四十一年は逝きぬ

残る所七十
餘時間

新年用の鹽
鮭

四十三回の
春

三月には落
ちん

前線を覆む

旅順包圍戰

と意氣込みしも夢なれや、我一生涯の内に特筆大書すべき明治三十七年も一
兩日即ち七十餘時間を餘すのみとなつた。然るに旅順は急に落る様子も見へ
ぬ陣中の事として給養の豊なるべき筈はなけれど、有難いことには、糯米も給せ
られ、二十五日に餅搗を行つた國民後援の熱誠から出た馬關の金子熊吉氏か
ら元旦の儀式にと送られた鹽鮭も落手した。
砲彈一發の烟と消へ、二十年來空しく受けたる天恩に酬ひ奉らんと期待し
つゝありし此身は、天未だ命を奪ひ給はぬか、無事に第四十三回の新年も迎へ
ることが出来そうである。

二三日前或新聞の通信員が訪はれて、旅順は何時頃落る御見込ですかと問
はれた。先づ二月末か三月始めには必ず落る理由があると答へた。然らば新年
を東京で迎へて來ると告げて歸られたが大に觀察を誤つて氏の歸國中に旅
順は開城した。

年は迫りても、攻撃の手は少しも緩めぬ、二十八日の午前十時五分頃であつ
た非常なる勢で二龍山堡壘を爆破し、東雞冠山北堡壘に於て、味方の損害あり

輕砲線占領

二龍山占領



△望ヲ破爆ノ面正臺砲山龍二リヨ庄里八

しにも鑑みず、餘り接近し過ぎたる
爲め、土砂石片の爲め負傷し、又は埋
没せられしものも若干あつた。
我方に損害を受くる位の大爆破
で、敵の損害は益甚しく、輕砲の線は
殆ど顛覆し、守兵の大部は埋没せら
れた。

此勢に乗じて突撃したる第九師
團福谷聯隊の健兒も、敵の抵抗頑強
なる爲め、一舉に砲臺を乗取る能は
ず、暫く輕砲線を固守して、重砲線に
退きたる敵と對戦して居た。
危険を顧みず山砲を輕砲線に据
附け、猛射を加へ、終に機關銃を破壊

四十一 年は逝きぬ

黄塵咫尺を辨せず

松樹山堡壘の占領

旅順の運命も永からず

旅順包圍戦

し午後七時三十分に至り流石に堅牢無比の二龍山も終に我手に歸した。翌二十九日は暴風である畑には一本の草もなき爲め土は風の爲め吹き揚げられ空は眞に黄塵萬丈である百米か二百米先は全く見へぬ従つて彼我共に砲聲は一發も聞へぬ只時々僅に銃聲が聞ゆるのみである。

攻撃正面の三堡壘の内、二個は我手に歸し残るは松樹山堡壘のみである。然るに北堡壘にも坑道作業は着々進歩して三十一日午前十時胸墻の一齊爆破を行つた。二龍山の爆破に鑑みたる第一師團の歩兵は餘り接近して居なんだ爲め自ら損害を蒙ることなく爆破と同時に猛烈なる砲撃を加へ勇敢なる關東男兒の奮戦に依り僅に四十分餘にて全部占領し終つた。

松樹山堡壘の占領にて攻撃正面の永久堡壘は悉く占領した。左れど此等の堡壘の前には望臺一帯の高地ありて旅順市街は二龍山より其一部を望見し得るのみである。併し敵に取りては前齒を抜かれたる如く奥齒にも自然に緩みの来るのは當然である。旅順の運命も最早長くないことは想像が出来る。去り乍ら市街の周圍には堅固なる第二防禦線がある。彼れの是迄力を籠めて工

老鐵山は無用なり

事を施した老鐵山に籠つて最後の決戦を試むるものとせば前途は猶遠遠である。



龍眼東方小角堡壘ヨリ松樹山地臺正面ノ爆

然れども老鐵山に籠城することは到底不可能である。第一患者を收容する建物が無い。婦人小兒を收容することも出来ぬ。眞に理想丈けで斯様な處に兵備をした理由が解らぬ。或は海岸よりの奇襲を防ぐ爲め

生涯中最も多事でも最も危険であつた三十七年も最早六七時を刺すのみとなつた寢に就かんとするに銃聲は盛に聞ゆる何卒成効すれば良いと思ひ乍ら水川大尉が厚意を以て兵卒に造らせて贈つて呉れた枯草を唐米袋に入れた敷蒲團の上に薄き毛布を二枚覆ふて寢に就いた之が愈三十七年の終りである明朝の結果や如何に。

朔吹聲哀新戰場

寒天月冱白於霜

攻圍半歲功難就

萬里征人轉斷腸

四十二 旅順の陥落

翌れば明治三十八年一月一日である昨夜來銃砲聲は徹宵絶へず屢寒眼を破つたが夜の事であるから敵味方の様子は少しも解らぬ夜の明くるに従ひ銃聲も殆ど響かない砲臺線を見れば愉快！愉快！H砲臺一帯の高地には日

章旗が樹つて居る臍の緒切つて以來喜ばしい事にも度々出逢つたけれど斯様な愉快は是迄感じたことがなかつた。

朝起きると新年に加ふるに此大勝利である御世辭に抜け目のない支那人は、大勝と新年の祝詞を一處に述べて頭をペコ／＼下げる如才ない奴である。

砲聲破曉耀春曦

到處陣營飄旭旗

領地庶氓還有喜

懇勸來獻賀新辭

軍司令官からは大本營に飛報が傳はつたであらう大本營からは各部隊各新聞社に傳つたであらう元日早々二號活字の號外が飛むであらう國民は如何に喜ぶであらうかと思へば思ふ程夢ではないかと疑はれる朝食も食ひたくもあり食ひたくもなき様である折角搗いた餅を從卒が持つて来るが何か落附かぬ様な氣がして咽を通らぬ様な氣がする第一回の攻撃にも吉永大隊がQ砲臺まで進入したが遂に逐ひ返された今度も亦敵の逆襲に遇ひはせぬかと思へば手は届かぬも跡から押して遣りたい様な氣がする。

軍司令部の
通報

休戦を申出
づ

港内の爆聲

旅順包圍戦



歩兵第七及第十三聯隊ノ望臺高地ノ突貫

午前二時に至り全くM N Q R 及東
雞冠山を占領し得たとの事である。
望臺を占領せられては、東雞冠山
砲臺は到底維持することは出来ぬ、
果して二日午前一時頃自ら爆發し
て退却した。

是より先き敵の軍使は一日午後
五時休戦を申し出で翌二日早朝乃
木軍司令官より之を承諾せられ全
線寂として聲なし是れが昨日まで
突きつ突かれつ命の取り遣りをし
て居たかとは如何にしても思はれ
なんだ。
此夜は旅順港内に頻に爆聲が聞

砲臺は鐵塊
の如し

個人に恩怨
なし

へた、彼は軍艦砲臺は現在の儘引渡すと提言し乍ら軍艦を爆破したのである、
精神上から云へば敵に渡すのは如何にも不利である、出来るだけ破壊するの
も無理はないが、降服の誠意がないと云はねばならぬ、其報酬には開城を承諾
せず、飽くまで苦しめて遣りたかつた。

二日午前十時東雞冠山砲臺一帯の戦跡を實見すべく出掛けた。五箇月の間、
撃つて撃つて撃ち捲つた砲臺であるから、如何に成つて居るか見たくてなら
ぬ、東雞冠山に行いて見ると、砲臺は形の變る程彈丸の痕計りである、深さ二三
尺は鐵塊と云ふても良い位である。二〇三高地と云ひ、攻撃正面の砲臺と云ひ、
烈しく撃つた處は、表面は眞に鐵塊である、斯くなるまで抵抗した手際には敵
乍ら感服した。

敵となり味方となり相戦ふも、個人相互には恩も怨もない、休戦になると、我
歩哨の前に露兵が来て晝寝をして居る。我兵も連戦連闘で勞れ切つては居る
が、露兵はより以上である、望臺に上れば、旅順市街は手に取る様に見ゆる、毎日
見舞はれた二十八珊の彈丸も來ず、馬車も人も生氣附いた様に往來して居る

四十二 旅順の陥落

様子が見ゆる。

彼我が戦線の間には、第一回總攻撃以來の死屍が、まだ骨に服を着て残つて居る。第一回第二回の時のものは、既に腐敗して骨と着物計りに成つて居る。此日衛生隊では頻りに死體を片付けて居たが、其中に第一回總攻撃の時の死體なることは明瞭なる夏服の死體があつた。見れば手足を麻繩で縛つてある。多分命のあるものを虐殺して戦線の間へ投げ出したのであらう。幾ら文明程度の低い露兵にもせよ、負傷者を殺し又は虐待することは、公法上の敵である。余は收容して居る醫官に注意して、寫眞に撮つて、赤十字社に送つて、赤十字條約違反を天下に公表することを注意した。敵となり味方となり戦争こそすれ、個人に怨はない。戦争は國と國との力比べである。夫に傷者を虐待するとは、憎みても餘りある奴である。戦争は斯様なことが動機となり、殺戮に陥ることがある。憤むべきことである。戦友が斯様な残酷な目に遇ふて居るのを見ると、下級者において、一番復讐して遣らうかと、思ふ氣になるのは免れ難いことである。

露兵の殘酷

憎みても餘りあり

婦人の砲臺見物

日本婦人を賛成す

砲臺を見廻つて、東雞冠山砲臺の入口の歩哨の處に行くと、一人の海軍中尉が妻を連れて來た。婦人は砲臺が見たいと云ふことである。歐羅巴の女は違つたものである。併し何處の賣春婦上りか、其處は解らぬ。無神經と云はうか、横着と評せんか、能くも昨日まで撃ち合つて居た砲臺まで、來たものだと驚いた。日本の女とは斯くも違ふものか、併し余は婦人としては、日本式の方を賛成する。砲臺に來る位なら、其暇に綯帯の一卷も巻けば、良いに、あれだから、彈丸の御見舞に遇ふて、難儀するのだと思ふたが、一方又流石に大陸的の氣風がある。と、感心の念も起つた。七月一日日本國を出發してより、時に支那の田舎婦人を見ることがあれど、女らしき女の顔は、半年間見たことのない眼には、天女の天降り様の様に見へた。

一時休戦はしたものゝ、何時談判不調になつて再び戦闘することになるかも知れぬ。茲に於て、我白砲は王家屯附近に前進することになつて、陣地偵察に出掛けて、陣地も決定したが、遂に開城となつて、前進することはなかつた。

四十三 開城始末

嗚呼半歳の間頑強に抵抗せし旅順は時なるかな時なるかな遂に開城を提議せり一月一日午後五時敵の軍使は水師營南方我第一線に來り左の開城提議を交附し攻圍軍司令官に送達を乞へり

開城提議

旅順口一九〇四年十二月

第二五四五號

閣下よ交戰地域全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要なり依て無益に人命を損せざる爲め予は開城に關し談判せんことを望む閣下之に同意せらるゝに於ては開城の條件順序を討議する爲め委員を任命し並に予の委員が該委員と會合すべき場所を選定せられんことを願ふ
予は此機會に於て予の敬意を表す

關東要塞區司令官

ステツセル將軍

軍司令官の
答書

旅順口攻圍軍司令官男爵乃木將軍閣下
此提議に接したる第三軍司令官乃木大將は左の答書を作り翌二日早朝軍使をしてステツセル將軍に交附せしめた

一九〇五年一月二日

旅順口攻圍軍司令部に於て

閣下よ予は茲に開城の條件及順序に關し談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す之か爲め余は旅順攻圍軍參謀長少將伊地知幸介を委員に任命し尙之に若干の參謀及文官を隨行せしむ即ち一九〇五年一月二日の正午水師營に於て貴軍委員に會合すへし双方の委員は調印の後批准を待たずして直に効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其全權委任狀は双方の最上指揮官の署名したるものにして互に交換すへし予は此機會に於て敬意を表す

旅順口攻圍軍司令官男爵 乃木將軍

關東要塞地區司令官ステツセル將軍閣下

四十三 開城始末

旅順包圍戰

一日夜乃木軍司令官より敵降服の意あることを大本營に報じたるに參謀
總長は聖旨を奉じて左の返電を乃木大將に發送せり。

旅順攻圍軍司令官宛

參謀總長

將官ステツセルより開城の提議をなし來りたる件伏奏したる處

陛下には將官ステツセルか祖國の爲め盡せし苦節を嘉し給ひ武士の名譽
を保たしむべきことを望ませらる

右謹んで傳達す。

水師營の會
見

水師營なる第一師團衛生隊の使用し居りし一民家を會見所に宛て午後一
時二十分より兩國委員會見を始めた。

我軍よりは伊地知參謀長山岡岩村津野田の各參謀有賀博士河津通譯官敵
よりはレーズ參謀長バラシヨフ赤十字社長第四師團參謀長第七師團參謀レ
トグキザン艦長某海軍見習士官通譯等にして兩國委員は互に委任狀を示し
隨行員を紹介す我は有賀博士彼は通譯の中尉英語にて會談し我は豫め起草
せる開城規約及同附録を交附し一時間の猶豫を與へて退席す。

露國側の修
正及質問

二時三十分第二次の會見あり露國委員は修正を要求し且次の質問を爲す。
本規約には悉く俘虜とすとあるも願くは解放せられたし尙要塞に在る兵
は多くは傷病者なることを御參考までに申述べ置く又宣言は我國に先例な
きを以て皇帝陛下の裁可を経ざる可らず願くは電報發送の手續を取計はれ
たし軍旗は悉く燒棄せり將校には從卒及馬を引連るゝことを得せしめられ
たし但し費用は支辨すべし軍艦は破壊して完全なるものなし宣言歸國の時
は荷物携帶を許さるゝや否や赤十字社に關する建物及其内容は現在の儘保
護せられたし我傷病者の處置如何。

我委員の回
答

我委員は暫時調査の上彼の請求に答へて曰く兵は全然解放する能はず將
校及義勇兵は宣言の上解放を諾す皇帝への電奏は英文にて認むべしされば
發送の手續を爲すべし從卒は許すべきも馬は召連るゝを許さず荷物の量は
我將校の携帶量に準す赤十字社に關する件は望みに任す。

此返答には彼も同意し四時三十五分談判畢り同時兩軍休戰の令を下す。
ステツセル將軍より露國皇帝に宛てたる電奏文の意味は左の如し。

旅順包圍戰

聖彼得堡に於て

露國皇帝陛下

ステツセル

本日俄に旅順降伏に關し開城規約に署名するの止むを得ざるに至れり將校及文官は佩劍を許され現在の戰爭に與らざるの義務を負ひ露國に歸國することを許さる否かは捕虜として在留せざるを得ず微臣は皇帝陛下に此要請せられたる義務に對する御裁可を仰ぐ

開城談判成

此電文は午後九時我軍用通信所より發信せられ條約文は清書し九時四十分双方の調印を了し同時に効力を生じ開城談判は茲に成立せり。翌三日津野田參謀は武士の面目を保たしめよとある。大元帥陛下の聖旨をステツセル將軍に傳達する爲め旅順の官舎に將軍を訪問せしに將軍は滿腔の赤誠を以て感嘆し疾く乃木大將に會見の光榮を得て貴國皇帝陛下の恩を謝し奉らんと欲す將軍にして許諾せらるれば日時と場所を指定せられんことを切望すと述べた。

此日津野田參謀は、ステツセル將軍の官舎を訪ひし時第一の門は從卒出て

半白頭の一老爺

余こそステツセルなり

之を開き第二門を入りて玄關を叩きし時極めて粗服の半白頭の一老爺出て來意を問ふた。參謀は彼に向ひ予はステツセル將軍に用務あり日本軍司令部の命を受けて來たのである。其旨將軍に通せられよと言へば老爺微笑して予こそステツセルなりと答へたとの事である。參謀は大に驚き恭しく敬禮をなした後應接室に導かれた間もなく一老婢珈琲を運び來つた。參謀は氣にも止めず居りしにステツセル將軍は是れ予の妻なりと告げたと云ふことである。凡て西洋人の室内の起居は日本人より簡單なる様である。開城後予が病院長を訪問した時一等軍醫正であつたが能く子供の着て居る詰襟でツボンの下に上着を入れて締める極めて粗末の服を着て面會した。日本で言へば無論寢衣であらうが極めて簡單なものであつた。

擔保砲臺占

露帝の電訓

開城擔保として椅子山、案子山及東南一帶高地に在る堡壘砲臺の守備を撤し、我軍に受取る事となり、夫々受授を了した。砲臺は故意に破壊したる形跡もなく、正當に引渡したる心底は、流石に大陸的に悠揚迫らざる處がある。

ステツセル將軍よりの電奏に對し、四日の朝露國皇帝より與へられたる電

見兩司令官會



旅順一包围戰

部内ノ壕外角凸面正臺砲山子椅

訓は左の如し。
 侍從武官ステツセル中將宛
 朕は各將校に保留せる特權を利
 用し現在の戰役に參與せざる義
 務を負ひ露國に歸來するか若く
 は兵卒と運命を共にせん事を許
 可す卿及勇敢なる守兵に此光輝
 ある防戰を感謝す
 ステツセル將軍の津野田參謀に
 提言せし希望に依り乃木大將は一
 月五日水師營にて會見すべきこと
 を通告せられた。
 同日午前十一時三十分より兩司
 令官の會見あり。ステツセル將軍よ

影兩將軍の面



四十三 開城始末

僚幕及官司令兩我彼ルケ於ニ庭中所見會營師水

りは、日本工兵の勇敢不撓なるを天
 下無比なりと稱讚し、乃木將軍が二
 子を失ひしを哀悼し、己れの愛馬を
 進呈せんことを提言し、乃木大將は
 之に答へて、露兵の抵抗力偉大にし
 て、防禦法の周密なるを賞揚し、二子
 が戰場に於て死せしは、武人として
 死處を得たるを喜ぶと述べ、馬は折
 角の芳志なれども直に受領するこ
 とは、軍規之を許さざるを以て、委員
 に引渡されたる上にて、相當の手續
 を經て受領し、閣下の希望を充すべ
 しと述べ、懇談に時を移し、兩將相訣
 れしは午後一時二十分頃なり。

是よく順序として、開城規約同附録を載すべき所なれども、堅苦しくして興味少く、且諸書に散見する所なれば、省きて載せず。旅順攻圍の最終として、兩陛下より下し賜りたる勅語、令旨及滿洲軍總司令官の感状を載せ、局を結ばんとす。

勅語

勅語

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ第三軍及聯合艦隊ハ協同戮力久シク寒暑ヲ冒シ苦難ヲ凌キ勇戰奮闘克ク其鐵壘ヲ奪取シ堅艦ヲ殲滅シ敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシム
朕深ク爾將卒ノ克ク其重任ヲ全フシ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス
七日香川皇后宮太夫より 皇后陛下令旨の傳達あり、

令旨

令旨

我第三軍並に聯合艦隊は水陸協戮旅順を重圍すること數閱月激戰數百回堅を破り銳を碎き辛酸壯烈防備無比の天險を冒し頑強不屈の勁敵を剿し遂に彼れをして城を開き降を乞ふに至らしめたる趣

皇后陛下の懿聞に達し我將校下士卒の忠誠義勇克く偉大の功勳を奏したるを深く御感賞あらせらる。
滿洲軍總司令官は、第三軍に左の感状を與ふ。

第三軍

昨年六月下旬以來旅順要塞ノ敵ニ對シ長日月堅忍不拔ヲ以テ堅ヲ破リ強ヲ摧キ遂ニ本年一月一日敵ヲシテ力屈シ開城ノ止ムヲ得サルニ至ラシメ遂ニ旅順攻城ノ目的ヲ達シ有終ノ光輝ヲ揚ク依テ感状ヲ附與ス

明治三十八年一月四日

滿洲軍總司令官侯爵 大山 巖

是れ迄で戰爭記事は終局を告げた譯である。是よりは彼我談笑の裡に折衝したる事柄と、開城後自己の觀察したる處とを述ぶるであらう。

四十四 花と肥料

我徒歩砲兵第三聯隊も、昨年五月一日に編制を令せられ、七月三日に門司を

正雨沐風掃
半歲

一片追善の
心
感狀

旅順包圍戰
解纜し同九日に大連に上陸し、雨に風に寒氣に彈丸に有らゆる強敵と戦つて、
茲に目出たく旅順を攻落し、月桂冠を戴くの機會に際會した。敢て功に矜る譯
でもないが、武士の名譽として、軍司令官より頂戴した感狀の全文を紹介する。
指を屈すれば、昨年の五月一日より、旅順陥落の三十八年一月一日までは、正
に二百四十五日である。此間始めは炎天と雨と戦ひ、八月十九日第一回總攻撃
の始まりしより、一日として彈丸を撃たぬ日はない。將校も失つた下士卒も失
つた。死は運命とは云ひ乍ら、死者に對しては、氣の毒とも何とも云ふべき語は
ない。今茲に感狀を披露するものは、せめて一片追善の心にもとの誠意である。
死者靈あらば願くは照覽せよ。

感狀

攻城砲兵團

明治三十七年八月旅順要塞攻圍開始以來日夜砲戰ニ從事シ或ハ前進陣地
ヲ攻略シ攻路作業ヲ援助シ砲壘軍用建築物ヲ破摧シ或ハ數次ノ總攻撃ニ
當ツテ克ク砲兵ノ威力ヲ發揚シ或ハ各種ノ増加砲ヲ以テ新ニ隊伍ヲ編成

肥料の價值

シ以テ一意要塞ノ攻略ニ努力シ終期ニ至テハ又港内ノ殘艦ヲ撃沈シ砲廠
ハ其間僅少ノ人員ヲ以テ克ク必要材料ノ補給調度ニ任シタリ其團ノ功績
偉大ナリトス

明治三十八年一月五日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵 乃木希典 花押
攻圍軍が前進陣地の攻撃より始め、雨に風に雪に氷に、又彈丸に銃劍に有ら
ゆる敵と戦つて、芽出たく旅順を攻落し、始めて平和の風の内に薫はしき花は
開いた。此花の肥料は何であるか、言ふまでもなく血と鐵である。左に載する死
傷表と銃砲彈損耗表を一見すれば、花の値の如何を卜知することが出来るで
あらう。

死傷表

第一師團	將	死	傷	計	
	校	下士卒	下士卒		
四十四團花と肥料	一一二	二、〇七八	三三二	七、一三六	九、六四七

旅順包圍戰

區分	小銃	野砲	榴彈	破甲彈	砲彈	計
第七師團	七八	一、九七〇	一八七	四、四三六	六、六七一	
第九師團	一四四	四、四三五	三七七	一、〇〇六	一六、九六二	
第十一師團	一一五	二、八〇二	三五九	一〇、二一四	一三、四九〇	
後備步兵第一旅團	四六	一、〇四七	一六一	五、三二四	六、五七八	
同 第四旅團	三五	八二一	七二	一、九九八	二、九二六	
直屬部隊	一〇	二四四	四八	一、〇八〇	一、三八二	
陸戰隊	七	四九	七	二八四	三四七	
合計	五四七	一三、四四六	一、五三二	四二、四七八	五八、〇〇三	

小銃野砲彈損耗表

區分	小銃	野砲	榴彈	破甲彈	砲彈	計
第一師團	三、九九二、〇二一	六、六六七	二八、八五一	三五、五一八		
第七師團	三、二四五、二三六	一、二五〇	三、三二二	四、五七二		
第九師團	四、三〇四、六七一	七、六四〇	二四、四四六	三二、〇八六		
第十一師團	四、一五七、七七八	五、一七一	二七、四三二	三一、六〇二		
後備步兵第一旅團	一、六九九、〇四九					

重砲彈藥損耗表

區分	榴彈	榴霰彈	計	破甲彈	堅鐵彈
同 第四旅團	七九〇、四五七				
後備及派遣工兵隊	一三、六六一				
野砲第二旅團		一四、七六四	四五、九三二		六〇、六九六
合計	一八、一〇二、八七三	三五、四九二	一、二九、九八二		一六五、四七四
戰利野砲		一、三九五	一、九二七		三、三二二
總計		三六、八八七	一三一、九〇九		一六八、七九六

四十四 花と肥料

區分	榴彈	榴霰彈	計	破甲彈	堅鐵彈
十 半加	一、三八四	一、一四一	二、五二五		
十二 珊加	三三、六〇一	九、七五八	四三、三五九		
九 珊白	一一、二三〇	六、二五三	一七、四八二		
十五 珊白	二二、八八九	九、七一四	三三、六〇三		
十二 珊榴	一一、一六七	三、八七三	一六、〇四〇		
十五 珊榴	八、三七〇	三、〇九五	一一、四六五		
十二 听	二七、五三五		二七、五三五		

旅順包圍戦

十	一六、二五一				
十	二、九〇一				
二十八					
合	一三七、三二八	三三、八三四	一七一、一六二	二二二	一六、三二二

此表を見れば旅順の烟と消へた將卒の数は實に無慮一萬四千人である。砲彈の数は三十五萬六千四百發餘で之を噸數に直せば五千七百四十五噸餘で貫目に直せば百五十五萬千九百九十二貫目餘で大きな軍艦一隻の重さに匹敵する譯である。之が僅に旅順の二十に足らぬ砲臺に落ちたのであるから砲臺の表面は鐵の皮を着たと云ふても良い位である。旅順陥落なる麗はしき花は、斯く多數の高價なる肥料に依り立派に開いたのである。無心に看過してはならぬ。

四十五 城受渡し

二日午後通報があつた。兵器彈藥受領の爲め余は委員に指命せられ明三日

一萬四千人
彈丸は戦艦一隻の重さは鐵の表面

豊島少將の訓示

旅順目貫の場所

砲臺指揮官は海軍將校

午後零時三十分水師營南方の堡壘に集合せよとの事である。時刻前に行いて見れば既に豊島少將が井上參謀其他攻城砲兵司令部の屬員を隨へて先着せられて居る。訓示の要領は斯様である。

「旅順も愈開城に決し。明日は一日間に兵器彈藥建物等を受取り終らねばならぬ。其爲めに要塞全部を六區に區分し、各區に於て高級古參者が其長となり萬事の處置をせねばならぬ。」

余の指定せられたのは第五區で、古參の故を以て余が委員長で之に屬するものは陶山少佐の率ゆる歩兵一大隊と、一木大尉の率ゆる徒歩砲兵一中隊と、通譯一名である。第五區は旅順市街周囲の砲臺と携帶兵器であるから、旅順目貫の場所である。従つて他の委員に比べると種々の現象が目についた。以下逐次紹介するであらう。

露國側の委員は海軍中佐キーツキンと云ふ人で、明日午前十時に白玉山の北麓で會合する約束であると云ふことである。同中佐は旅順圍郭の諸砲臺の砲兵の指揮官である。海軍將校が陸正面の砲臺の指揮を採つて居ることから

四十五 城受渡し

推しても如何に將校が少かつたか解る。

一刻も早く旅順に入つて見たくて三日の夜は碌に寝ることが出来ぬ出征の昨夜よりも気が興奮して居る種々の想像が浮ぶウト／＼する内に夜も明け早朝に飛起きて朝食を済し八時に一木大尉の率ゆる一中隊の砲兵を従へて出發し十時に白玉山の北麓に行いて見るとキーツキン中佐は來て待つて居る見れば跛を引いて居る近頃負傷したとの事である長崎で二三回越年したことがあるとの事で日本語も今日は位は話せる先生も生嚙りの日本語が砲臺引渡しの役に立たうとは思はなんだであらうして見れば日本人も却て露語など知らぬ方が良いかも知れぬ。

白玉山の北の方の砲臺から受領を始めて廻つて見ると防禦は豫想以上に堅固である若し降服せなんだなれば又此處で大損害を受けるのであつたらうと思はれた對手より提供した目録に依り砲を受領したが割合に正實である故意に砲を破壊した形跡もない愛國心に富むた日本人なれば或は破壊したかも知れぬ併し彼等には破壊し得ない理由がある開城規約第二條に全堡

壘砲臺艦艇兵器彈藥馬匹其他一切の軍用諸材料並に官金及官有諸物件は現狀の儘之を日本軍に引渡すものとすとある若し現狀の儘でない誠實に投降するの意がないとなれば又戦を始めねばならぬ夫は彼等の最も苦痛とする處であるそれが爲め割合に正直に受渡をしたのであらう。

或砲臺に行いて見ると一人の兵卒が出て來たが非常に醜態して言語が解らぬキーツキン中佐は脚氣病に罹つて居るので故に酒を吞ましたのだと云ふて辯解して居たが脚氣に酒は禁物である辯解は却て化の皮を現はしたので兵卒は開城の嬉しさに大酒を飲むのであらう。

砲兵の技術は決して日本に劣つて居まいとは攻圍中から思ふて居た光彈の如きも日本では一發も撃つたことはないが敵は頻に撃つて居た白玉山の北にはラカロツクの製造場があつて工兵士官が監督して居た是も日本では戰爭中に始めて使用した位である。

圍郭に備附けた砲の受授も濟むでステツセル將軍の官舎の前を通り掛ると豚が四五匹と鷺鳥が四五羽飼つてある露國の將校の生活と下士卒の生活

皇族も下士
卒と共に

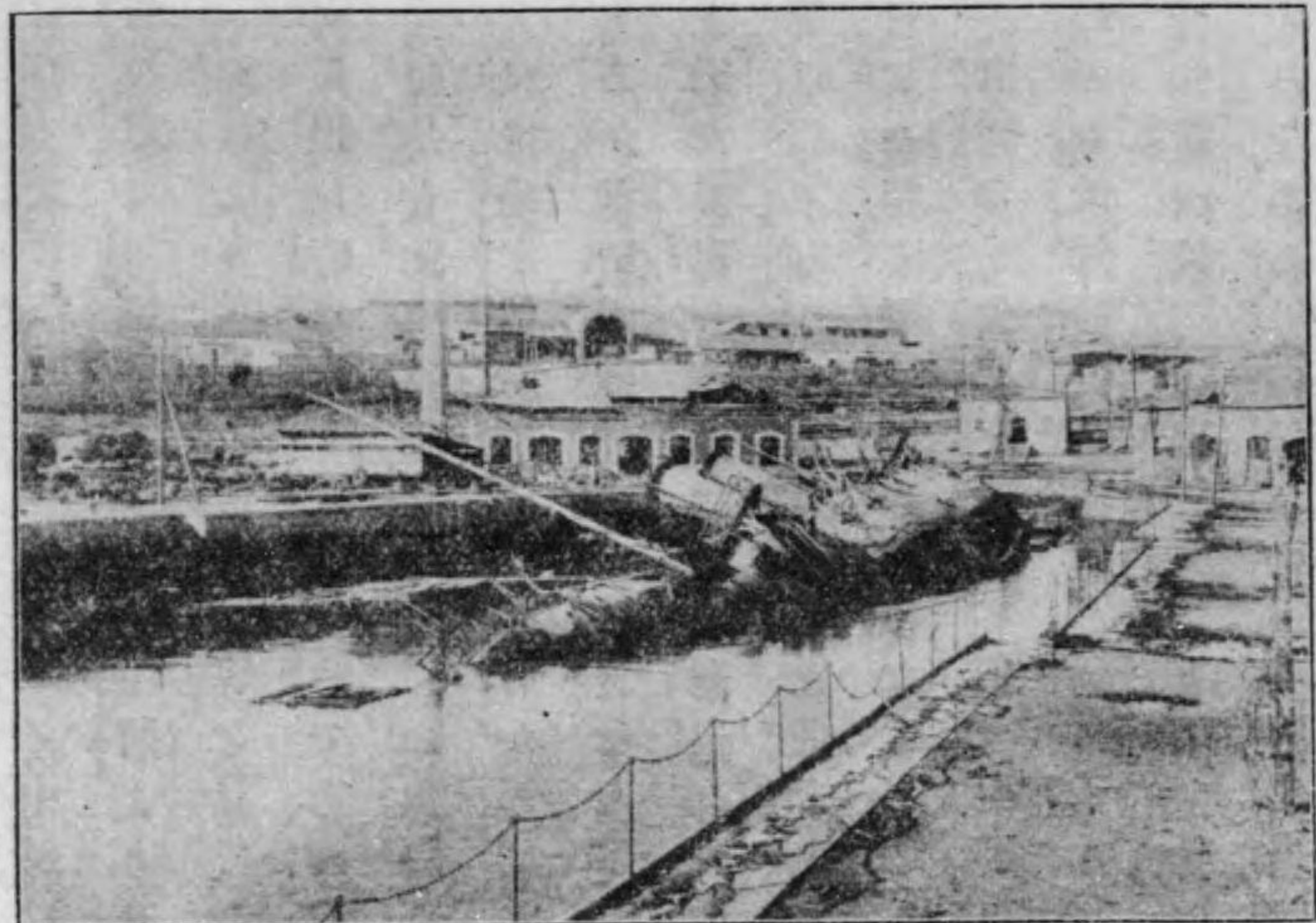
實見せるス
テッセル

とは、雲泥の差があることは聞きもし見もしたことがあるが、之を見ても驚かざるを得なかつた。日本の軍司令官であつたなら、如何であらう。旅順の要塞内では、生肉既に竭き、兵卒は馬を屠つて食用とし、夫も普及せず、罐詰肉計りで過半は壞血病に罹つて居るのである。然るに何故ぞや、ステッセル將軍は、猶一人で豚や鷄を持つて居る。日本の將軍であつたなら、其様な呑氣なことをして、泰然として居る人は、恐く何處を捜してもあるまい。部下と苦樂を共にすること、は、日本の將校の普通性で、恐れ多くも皇族でさへも、下士卒と同じ苦楚を嘗めらるゝではないか。

ステッセル將軍の行爲に就ては、毀譽褒貶共に多い様であるが、今日は罪状も決定した後ではあるが、随分指摘すべき點がある様に思ふ。軍法會議に於ける將軍の陳述や、判決は新聞紙上にも、詳しく記されて居るから、それは省きて余の直接見た處を紹介せん。

ステッセル將軍の官舎は要塞司令官スミルノフ中將の隣であつたが、二十八瓏の彈丸の來るので、要塞司令官の官舎の前には一發の彈丸の痕が残つ

卑怯なる審
室



旅順東港船渠内ニ於ケル敵ノ水雷母船アーム

て居た。大に恐慌を來し、官舎の傍に一尺以上もある角材を、三米も積上げて審室を作り、避難所として居たが、猶不安心と思ふて、か終に經理部長クリゼウキツチの二階に同居したと云ふことである。我軍では決して軍團長や要塞司令官の官舎を知つて撃つた譯ではない。造船所や港内の軍艦を撃つ彈丸が時々他處に飛ぶので、何處に行いても、同様にある。夫に一發や二發の彈丸で家を變へるとは、彼の卑怯さ加減が解る。此點から云ふても、既に旅順の防禦を托するに足る資格はない様に思

はれる之に反してスミルノフ中將は最後迄自分の官舎に泰然と構へ込んで居た處は確にステツセル中將より豪い點がある。

夫れより兵營、厩舎、砲廠等を見て、白玉山の方に登らんとして、海軍俱樂部の前に出た時は恰も午後一時であつた。キーツキン中佐は、

『自分も此處で午食をしたい、俱樂部には若干の食物も酒も残つて居るが明日は悉く捕虜に成つて行かねばならぬ身であるから、残して置いた處で仕方がない、是非一處に晝食をして下さるまいか。』

と云ふて勸むる、余は再三辭退した同行者は一木大尉と通譯一人である、自分等は粗末ながらも皆晝食を携帯して居る、其實麥飯に福神漬であるから、見せたら苟も戰勝國の將校たるものが斯様なものを食ふかと驚いたであらう、御構なく食事を濟して頂きたい、自分等は此處に待つて居るからと云ふけれども、承知せず、是非にと勸めらるゝので、辭退の仕方もなく、遂に同行して入つた、實は故國を出で、より副食物は罐詰と時々支那牛の硬いのを頂戴するのみである、彼の云ふのも、全く御世辭でもなく、眞實の情が現れて居るので、誘

はる、儘に俱樂部に行つて見れば、將官以下混合である。小料理屋の様な風で、將官丈けは上の方の食卓に就て居るが、其他は到着順に着席するので、上下無差別である。二三日前は敵として居た日本人が突然に入つて來たのであるから、稍驚いた様であつたが、キーツキン中佐から、委細の事情を述べたので、一同承知して種々な話が持掛けらるゝ、見渡す處無傷のものは少い、繃帯したのもあれば、手の利かぬものも跛のものもある、其中には夫人を連れて來て居るものもある、食事中一人の將校が夫人を連れて來て、二三人隔て、向側に着席した、將官か婦人が來ると皆起立して敬禮する、手の届く處に居るものは、婦人の手にキツスをやる、余は見合せて居ると、夫人はキーツキン中佐を介して、戰勝の日本士官に握手を願ひたいが如何であらうかとの問である、余は快諾して握手した、併しキツスはする氣にならなんだ、誠に耻かしい事であるが、西洋婦人の手を握つたことは、之が嚆矢であつた。

露國人は概して酒が強い、食卓に就く前に、別室でウオヅカを飲んで居る、余にも侷めたけれども、下戸であるので、辭退した食卓上でも、頻りに葡萄酒や、名も

クラズ即ち食はず

直聾啞

砲臺長の贅澤

知れぬ酒を脩める是れが若し上戸であつたなれば、久し振りに枯腸を濕したであらうに、惜しいことには下戸で一杯も飲めぬ。それでは「グワズ」を遣らうと注いで呉れた「サイダー」の様なもので、色はビールの様であるが、酒精分は少しもない様だ。之は飲むものであるから「クラズ」食はずであらうと洒落て見なければ、通譯が充分言現すことが出来ぬので、洒落にもならなんだ。食卓の上では彼方此方に談話が盛である。若し露語が解つたなら、彼等の秘密話も内情も解つたであらうに、露語と來ては啞で聾であるから、唯鳥の囀るのを聞くと同じで、目をパチ／＼して聞いて居る計りであつた。

晝食も濟み白玉山に登つた砲臺の長は中尉であつたが、漸々死傷して中尉が残つたので、始めは少佐が大尉位が居たかも知れぬ。其贅澤には驚いた。砲臺の中に寢臺もある。氷室もある。夏は氷室に食物を貯へたものと見ゆる。斯様な贅澤をするから、困苦に堪えることが出来ず、開城を迫るのであると思ふた。

茲で火砲丈の受領は一通り結了し、要處には歩哨を立て、宿泊所を求る順

掩蔽部の宿營

目に見へる處だけ

序になつたが、市街内には住民も居り、兵營には砲臺を引揚げた兵が充満して居るので、市街内に入る譯には行かぬ。止むを得ず、白玉山北砲臺の掩蔽部に宿營することに極めた。露兵には一種の臭があるけれども、兎に角時間を費して造つたのであるから、日本軍の急造の掘立小屋に優ること數等であつた。

此夜最も心配したのは、露兵が腹立ち紛れに建物や火薬庫に放火しはせぬかと思ふ。心配であつたが、幸にも二箇所に火災が起つたのみで、大損害もなかつた。

翌日から兵器庫の検査である。何しろ多くの火砲を、一日で受取つたのであるから、只一通り巡視したに過ぎぬ。彈丸の數などは、無論數へる譯には行かぬ。目に着く所のものは引渡して呉れたけれども、見えぬ處は眞面目に教へては呉れぬ。夫も至當で、明日は捕虜になつて行くこと云ふことは解つて居るので、其場さへ遁るれば良いのである。夫故跡の調査は大變である。諸方を巡視して見ると、此處からも彼處からも、小銃や彈藥が幾百となく出て來る。

兵は指揮官を失ふて、兵營に残つて居るので、被服庫は打壞して、新しい被服

着る飲む食

未決監に宿

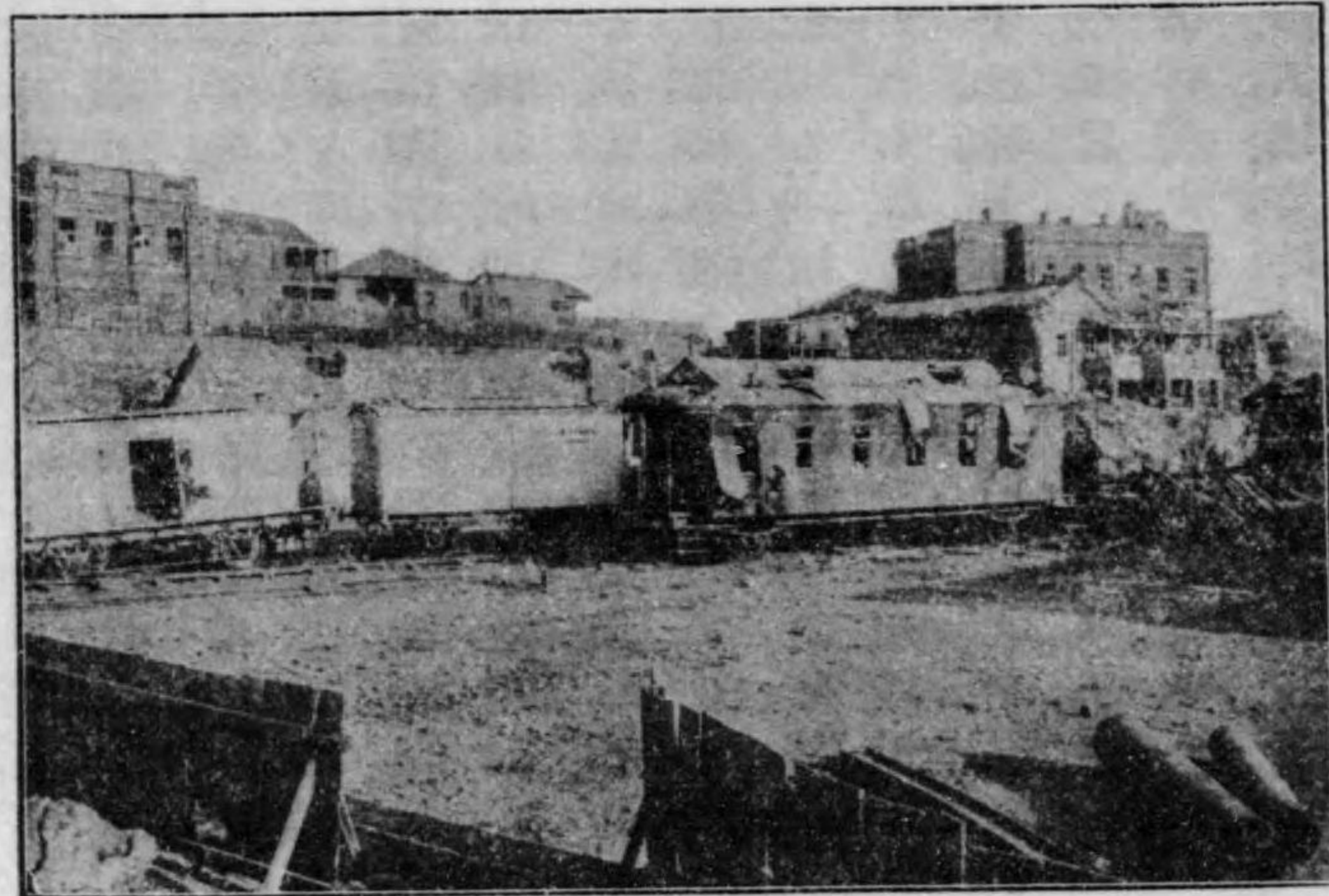
旅順包圍戦

と着換へ古服は窓から投出して、山の如くなつて居る酒保も踏荒され、酒や罐詰は腹一杯に飲んで食ふて酔つて倒れて居るものもある。酒保や炊事場の附近は空瓶や罐詰の殻で寄り附くことも出来ぬ始末である。

四日には過半の兵は兵營を出て大陽溝に集められたので、彼我が兵の衝突する氣遣もないので、市街に入つて宿營すべき家を探すけれども、適當の家がない。漸く一軒見附けて入つて見れば、寢具にしたものと見えて、露兵の外套地の鼠色羅紗が寢臺の上に敷いてある。是れなれば寢具もあり、此上なしだと思ふて、取敢へず宿舎に定めた。檢べて見ると、一方の壁際に小さな暗い室が幾つもある。併し悉く詮議する暇もなかつた。後に聞けば、監獄の未決監で、日本の捕虜が二十七名收容されて居たと云ふことであつた。小さな暗い室は密室であつた。誰も密室の經驗はないので、解らぬのが至當であつたが、聞いて見れば未決監に居るのは縁起でもないで、知れると直に兵營に引移つた。

四十六 市中雜觀

馬の飢渴



旅順停車場附近に於て我ルケ砲撃ノ効果

馬は四日に悉く水師營南方の練兵場を集めて受取つたのであるが、眞面目に残らず連れて來る氣遣はない。五日は厩を巡視すると馬は主人を失ふて、二日間も食はず飲まずに、繫がれて居るので、空腹に堪えず、火の如く怒つて居る。幾程温順なる露國の馬も、空腹には堪忍出來ず、前を掻く綱を牽く近寄れば蹴る。然れど麥の在る處も解らず人手もなし、止むを得ず綱を切つて放して遣つた。一月頃の裸山であるから、何處に行いても馬の食ふべきものもないけれども、何か食ふものと見へて、一

四十六 市中雜觀

野生の馬と
なる

馬は放し飼

旅順包圍戦

筒月餘も野生の様になつて人手に掛らぬものもあつた。馬は二千頭近くも練兵場に集めたのであるから、繋ぐことも出来ず、一頭毎に食物を與ふことも出来ず、僅に周圍に輻重車を並べて、其間には綱を張り區域を附けたのみで、外に出て山や畑を駆け廻るものもあり、住み馴れた元の厩に逃げ歸るものもある。従つて食ふことの出来るものも、出来ぬものもある。日本の馬の如き、仲の悪い馬であつたなら、咬合ひ蹴合ひ負傷もしたであらうが、露馬は柔順であるから、幸に負傷も少かつた。

役種分けに
大困難

馬は整然と厩に繋いであつたのであるから、厩と共に受取れば、雑作ないのである。一地に集めたものであるから、騎馬も輓馬も輻重馬も混合である。一コサツク馬丈だけは、別に識別が出来、一借使用せむとする、騎馬は輓馬にならず、役種を分けるに、大困難をした様であつた。輓馬の如きは、厩では一騾が極まつて居る、それを一頭宛バラ／＼にしたのであるから、撰り分けるのは大變である。是は良い經驗をしたので、馬は必ず厩の儘で受取らねばならぬ。入城當時は憲兵の數も少く、市中は大混雑である。殊に兵營は日本と違ひ、周

兵營は開放

支那人の馬
盜賊

圍に柵もなければ、門もない。故に兵營の周圍に投出してある、古い被服や靴や器物を支那人が絶へず盗むで行く。見附け次第に取上げて二ツ三ツ位擲つて遣つたけれども、兵は少く、悉く番兵を附けることも出来ず、支那人の掠奪に逢つたものも少くはなかつた。

六日のことであつた支那人が五尺三寸位ある、大きな馬を牽いて行くのに邂逅つた。其道であるから、鑑定は餘り違はぬ積りである。是は屹度砲兵の馬に違ないが、盗んで行くのと、睨むだけども證據がないから、

「這匹馬是誰的」(此馬は誰のものか)
と問ふと、彼奴も如才なく、

「這是俄國人的我是掌櫃的」(是は露人のである。私は其使用人である)

と答へた。馬鹿を吐かすな、己れの睨んだ眼が違ふものかと思つたけれども、無證據であるから仕方がない。何處に牽いて行くか見て遣らうと思ふて、

「那麼去罷」(それなら行け)

と云ふて、彼奴の行く處に跟いて行いた。彼奴も少し後暗くなつたので躊躇し

馬は正直

腹帯も纏頂も合はぬ

日露兩國兵の喜

て居たが四五町もある自分の家に入らんとするけれど支那馬を入れた小さな低い厩であるから馬は厩の前に立つた切り幾ら牽いても入らぬそれで彼奴の云ふことが虚言であると云ふことは疑ひない馬の上から彼奴の頭を二ツ三ツ擲つて馬は取上げて馬丁に牽かせて歸つた是は確に戦利品であるから暫時の間乗つて遣らうと思つて鞍を置いて見ると腹帯が届かぬ纏頂を掛けて見るに延し切つても口を釣り上げる始末にならぬので早速厩に連れて行いて仕舞つた。

暮方になると支那人が兵營の周圍に散亂して居る毛布や被服類を盗んで行く兵や馬丁を要處に潜ませて置いて取上げた上に擲たしたこともあつたが憲兵も数は少し斯様な小さな窃盜は到底防ぐことは出来なだ。

開城になつて日露兩國の兵卒は喜色満面に溢れて居る日本兵は悪戦苦闘の後頑強なる敵を降服させたのであるから功名を矜るのと暫時の休戦とを喜むで居る露兵は戦友の過半は戦死したれど幸に生命を全ふし愈降服となれば此戦役中再び戦争に出ることはない無事に本國に歸られ得る喜びで日

見れば酒を呑ます將校は常識あり

兵の往來頻

下士卒二萬七千人

本兵以上の喜悦である中には酒瓶を幾個も衣囊に入れて日本兵を見れば捕へて酒を飲ますものも見受けた併し將校は矢張常識がある露國の將校が此有様を見て瓶を悉く地上に投げて碎いて居た。

四日の一日は露兵の爲めには忙しき日であつたであらう明日は愈捕虜になつて大陽溝に集合するのであるから入院中の戦友を訪ふやら長く往來した支那人に訣別をするやら種々の用事があつたであらう市中は到る處往來頻繁であつた。

四十七 捕虜の輸送

捕虜の健康者は五日に悉く大陽溝に集められた其總員は海軍兵を合せて下士卒丈で二萬七千人計りである兵は少い少いと云ふて居たが集めて見れば少いこともない是丈ければ今一決戦は出来たであらうと思はれた。五日には朝から何の兵營からも兵卒が大陽溝を指して集合する將校の引率と云ふのであるが多きは下士が引率して居る武器を除つたのであるから

姿勢も何もない。全體露兵は日本や獨逸の兵に比べると風采は非常に揚らぬ方で常にノソリノソリして居ることは人の知る通りである。加之各人各個に所持品は違ふて居る百人百様である。大きな囊―露國の背囊―一個と飯盒一個は皆持つて居る。其外に袱包やグアイオリンや靴を二足も持つたものや、評すれば野蠻人の轉宿とでも云ひたい様である。

斯様に多數の捕虜が大陽溝に集められた。然るに日々の輸送力は千人か二千人であるから、兵營や倉庫や民家や天幕に入れたのである。其混雜は名狀が出来ぬ。日本の給養を受けるのであるから、酒もなければ煙草もない。利に敏い支那人は高價に賣り附ける。夜になれば寒さは一層である。暖爐に慣れた彼等は到底堪えることが出来ぬ。船でも小屋でも手當り次第に壊して焚いて居る。余の識つた將校は、夜になると二三日も元住むで居た家に宿りに歸つた來た。逆も寒くて寝ることが出来ぬと云ふて居た。

支那人に敏なる
心配し過ぎ

と思はれた。此場合既に恐怖し切つて居るから、頼むだ處で逃亡などするものはない。

捕虜にするのは戰鬪員のみで、非戰鬪員は捕虜にする譯には行かぬ。差向き困つたのは婦人の處置である。或日の事であつた。一人の將校が夫人を連れて來て一處に行くことは出来まいかと歎願する。『婦人は捕虜にする譯には行かぬ』と云へば看護婦になれば行けぬかと云ふ。看護婦は赤十字條約に依り中立であるから、猶更捕虜にする譯には行かぬと告げた。

大聲を揚げ
泣き出す

何うかして一處に行く方法はないかと、今度は智慧を借りに來たけれど、今の處他に方法はない。何れ船の都合が出来れば芝罘か上海か又は長崎へ送り出さるゝであらうと云ふと、大きな聲を揚げて泣き出した。西洋婦人は見た所ではお轉婆の様である。前日まで戰爭のあつた砲臺見物に出掛ける奴もある。存外弱い奴で空元氣計りで、日本婦人が平生は猫の如く柔順でも、眞逆の時には涙一滴持たぬ勇氣のあるに遠く及ばぬと思つた。

がない。止むを得ず看護婦名義で病院で養ふて居たものが過半であつた。其後乳兒のあるものは夫と共に行き得ることになつたが俄に子供を産む譯にも行かぬ是れ計りは俄造りは出来ぬ子持は喜び勇んで一處に行いたけれども取残されたものは絶望の色が現れて居た。

西洋婦人は概して大膽

全體に西洋婦人は日本婦人に比べると確に大膽の様である。一週間二週間と過る内に漸々と忘れて仕舞つて戦況を聞かして呉れとか日本に手紙を出したいが何處に出せば宜いかなど日本の將校に尋ねに来るものもあつた。露國の普通教育は無論日本に劣つて居るであらう氏名の書けぬものも兵卒中には澤山あるが中流以上の教育は決して優るとも劣つては居らぬ日本の婦人には隣國で且同文であつても支那語や朝鮮語の話せるものは皆無と云つて良い西洋語も話す人は少い露國の婦人に遇つて貴女は何國の語を話すかと聞いて見ると佛語か獨逸語は過半話す或日露國の婦人が突然訪ねて来た露語で話し掛けるけれど少しも解らぬ自分は少し計り佛語を知つて居るので Parlez-vous Français? (貴女は佛語を話しますか)とやつた婦人は直に Oui

婦人は概して外國語を話

遂に筆談

多くは無蓋貨車

Monsieur (然り君よ)と返事するや否やペラ／＼と話し出した處で自分の佛語は極めて初心で如何しても婦人の話が聞き取れぬけれども瘖我慢で Je ne comprend pas. (解りませぬ)は云はぬ Parlez lentement (靜に話して下さい)と云ふと婦人は嚙んで含める様に靜に話して呉れる夫れでも知らぬ語は解らぬ遂に書かして字書で引いて此方も書いて返答した暖爐もあり暖い室ではあつたが汗が出た筆談の結果自分の住んで居る家に婦人の兄が居たので着物が残つて居るから渡して呉れと云ふのであることが解つた虚言か眞實か解らぬけれども誰の物とも解らぬのであるから云ふが儘に渡して遣つた。日本も是れから支那大陸に發展せんとすれば第一に折衝の必要あるものは露語と支那語である殊に露語を研究することは最も必要と思ふ併し婦人が餘り露語を研究して之を應用して賣春婦になる材料にしては困る。捕虜の輸送は六日より始めて十一日に終つた輸送材料は素より不充分で將校は漸く三等列車に乗り下士卒は善くて有蓋貨車で多くは無蓋貨車に乗るのである幸にも開城以來好天氣續きで入城當時は東港の上にある沼で氷

旅順包圍戰

を切り取つて居たが、漸々と溶けて、一月中旬には、岸邊に少し氷が残つて居る位になつた。土人の話に、斯様に暖いことは五十年來ないと云ふことであつた。五十年一度の暖氣に出逢ふとは、如何なる天祐であらうか。日露戦役には始終天祐が附纏ふて居た様に思はれる。捕虜の露營や、入城兵の爲めに、斯様に暖かつたのは、何よりの仕合せであつた。何處迄も天祐が多いが、唯攻圍の始めに、大雨に逢つたのは、不運であつたが、是れは當時の逃れ得ない天候で仕方もあるまい。滿洲の梅雨に、經驗はないが、他の年はまだ雨が多いかも知れぬ。

捕虜の健康者は、漸次日本に送られたれど、重病者の動き得ぬものは、病院に残つて居る。其數は八千人計りである。數月以來、生肉や生野菜の缺乏した爲め、多くは壞血病に罹つて居る。夫が爲め、少しの負傷も容易に癒えない。然るに露兵が要塞内に居る間は、萬事に邪魔になる。波艦隊は日夜航進を續けて居る。一日も速に要塞から排出せねばならぬ。夫が爲め、輸送困難なるにも、關らず、毎日林檎や生肉を給與さるゝ。日本兵は之を見て、一日でも露國の患者になつて見たいと云ふものもある位であつた。然も然うであらう。是迄戦線の兵の取扱を

受けたものが、旅順の守備となつたものであるから、給養は二番目に置かれる。それに一方では、不名譽の捕虜に、生肉や林檎を支給されるのであるから、不平を云ふのも無理もない様である。

支給さるゝ生肉や林檎も、露西方式で、醫官や看護婦が頭を削る。下士卒の口に入るものは、一部分に過ぎぬ。夫でも豪いもので、籠城時代には、漸々悪くなるのみであつた。患者が、笥の皮を剥ぐ如くに、一日一日と癒つて来た。日本では野菜は至る處で得らるゝ。何でもない様に思つて居るが、生野菜の缺乏ほど恐しいものはない。して見れば、人間は、菜食動物であることが解る。

醫師も入城當時は、露國の軍醫や醫師であつたが、漸々日本の軍醫と交代する様になつた。治療も上手であり、食物療養も行届き、籠城が長く續けば、無益に命を殞すべきものも、命を取止めて、彼等の爲めには、開城は無上の幸福であつた。

侍從將官バラシヨフの管轄する、赤十字病院があつて、何時迄も我儘計り云つて、頑張つて居たが、是も遂には日本軍醫の手に管轄する様になつた。

女齒科醫

海軍病院にフオン、パウムガルデンと云ふ婦人の齒科醫があつた。此婦人は貴族の令嬢であつたのであるが、失戀の結果、獨身と決心し、齒科醫となつたと云ふことであつたが、男子計りの病院に起臥して、風紀を害することもなく、終始患者に接して居たのは、感心である。

浩澹なる籠城日記

此婦人は貴族の令嬢であつて、學文も十分の素養がある。佛語も獨語も英語も流暢に操る。何處のマダムにしても立派なものである。文學の造詣も深いので、籠城中は自分の所見や感想を書いた、浩澹なる籠城日記がある。其全部は出版になつて居るか否か能く知らぬが、一部の記事が新聞などに出たのは見たことがある。旅順内部の事情や、軍人官吏などの内幕を書いた處には、随分痛快な記事がある。

旅順包圍戰

四十八 入城式

捕虜の輸送終る

一月二日開城に決定し、四日より六區に分けて砲臺、建物、兵器、彈藥等を受領し、十一日には捕虜の健康者は輸送を終り、其間各受領委員は、秩序の恢復に勉

秩序整頓す

め、残るは入院患者のみである。露國の將校や兵隊の居る内に入城式を行ふは、彼等に對し氣の毒でもあり、市内も大混亂を極めて居るので、受領委員と之に附屬する軍隊の外は、堅く入城を禁じてあつたが、稍秩序も整頓したので、十三日を以て入城式を行はれた。外國の要塞を攻落して正々堂々と入城式を行ふのは、日清戰爭の時と、此度と二回である。而も同じ旅順に二度入城式を行ふとは、妙な因縁である。能く世人が二度あつた事は、三度あると云ふが、今一度旅順を人手に渡して、三度の入城式をせぬ様に、注意するのが肝要である。世人動もすれば、軍備擴張に反對するものがあるが、對手國が不當の要求に出る以上は、之を防ぐには、軍隊の力に據るの外はない。財政状態も素より顧慮せねばならぬけれど、先づ借金して置いて返償するには、國民も其氣になるが、金を溜めて然る後に、軍備擴張をするなどは、到底出来るものでない。一家の經濟も、一國の經濟も、理に於て二つはないが、先づ財政に困つて借金して返償することは、何うか斯うか出来ても、夫れ丈の金を溜めると云ふことは、兎角困難である。夫れは大きな眼をして催促す

三度の入城をせぬ様に

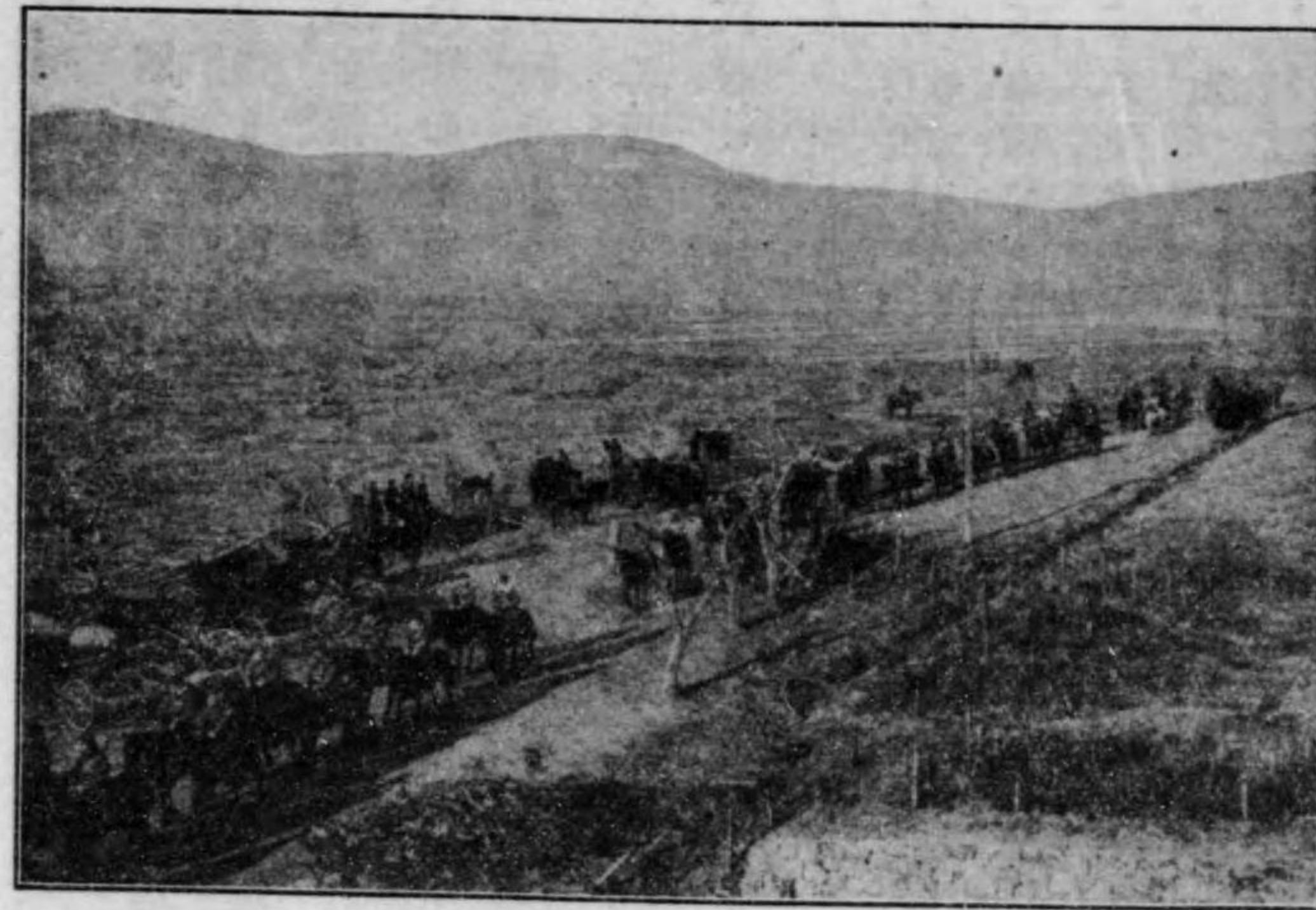
借りて返すは易し

先づ貯金をするは難し

四十八 入城式

入城式命令

旅順包圍戰



城入ノ官令司軍三第木乃

る人がないからである。
入城式に關する軍司令官の命令
の要旨は左の通りである。

來る十三日を以て入城式を施行
す其方法左の如し。
一各團隊より出場せしむべき部
隊

步兵聯隊より軍旗を捧持する
人員約二百名の一中隊野砲兵
聯隊より一中隊砲車を有す

野戰重砲兵聯隊及徒歩砲兵聯
隊より約一中隊

同獨立大隊より約一小隊
海軍陸戰重砲隊より約一小隊

工兵大隊より約一小隊

後備工兵中隊より將校の率ゆる約一分隊

彈藥及輜重兵大隊より約一小隊(車輛二十輛にして輜重兵は乘馬輪卒は

乘車)

架橋縱列より約一分隊(車輛を有せず)

衛生隊より約一分隊

野戰電信隊より約一分隊

補助輪卒隊より約一分隊(車輛を有せず)

攻城砲廠攻城工兵廠及野戰病院等に掲げざる諸部隊より其部隊の大

小に應し約五分一乃至十分一の人員を出場せしむるものとす

軍樂部全隊

二各司令部及本部等は其團隊の先頭に位置す

三出場すべき將校の人員は第一項の部隊數に關せず各業務に差支なき限り
團隊長に於て適當に之を規定し其部隊に加はらしむ

旅順包圍戰

各隊の喇叭手は爲し得る限り多數を出すを要す

四出場諸部隊は十三日午前十時軍司令部軍樂部第一第七第九第十一師團後備歩兵第一及第四旅團攻城砲兵司令部同特種部隊後備工兵中隊は現在配屬の師團に屬すの順序に依り又各團隊内に於ては戰鬪序列に依り白玉山北麓旅順街道附近を先頭とし漸次同街道に沿ひ適宜の隊形を以て集合すべし

五服装は防寒外套を着し歩兵工兵徒歩砲兵陸戰重砲隊は小銃及帶革のみを携帶す他は之に準す

六行進開始は號音を以て之を令す各部隊は四列側面縱隊又は砲車車輛縱隊となり先頭の進路を行進し旅順舊市街を横ぎり次で新市街に入る新市街の東部適當の地に於て軍司令官は諸隊行進の儘を閱兵す各直屬團隊長は其部下團隊の通過し終るまで軍司令官の傍に位置す諸部隊は軍司令官閱兵の地點を通過したる後後續部隊の行進を妨げざる如く適宜の行進路を経て各其宿營地に歸還す

將卒の喜悅

昨年七月本防禦線に退去せし以來全く半歲の間頑強に抵抗せし露軍も一月一日降服を申出で我攻城部隊は今日凱歌を奏して入城式を行ふ將卒の喜悅は言語の盡し得べきでない

第三軍司令官男爵 乃木希典

攻城に掛つた以上は早晚攻落させねば結末は着かぬのであるが只時期の問題である旅順の陥落は我軍の爲めには實に好時期であつたのである今二箇月も晩かりせば第三軍は奉天會戰に参加することは出来ぬ其結果勝敗は如何になつたか豫言は出来ぬのであるが日露戰には始終人力以外に天祐があつた様に思はるゝ是れ亦古人の能く云ふ正義の軍であつた爲めであらう我聯隊の爲めには一日と云ふ日は偶然にも記念すべき日である徒歩砲兵の編制を令せられたのが五月一日で門司で乗船したのが七月一日で大連の出舎を出發して第二の待命地李家屯に着いたのが八月一日で二十八榴榴彈砲の据附に掛つたのが九月一日で之を撃ち始めたのが十月一日で旅順の陥落が翌年の一月一日で入城式は露國の一月一日である斯く一日は最も縁起

旅順陥落は絶好時期

一日は紀念すべき日

將軍の顔にも喜色現る

五十年來の暖氣

支那人の懐を肥やす

旅順包圍戰

の善い日であつた。

却説入城式當日は、喜怒色に現さる沈毅剛勇なる乃木將軍の顔にも、何處となく喜悅の色が仄見へて居た様である。諸隊は半年の間土窟計りに塾居して居たものが、暫時なりとも暖爐もある完全なる兵營に入ることであるから喜び勇んで居た。

六箇月の間一日として銃砲聲の絶へたことなき旅順も、今は平和の風に満され、氣候は五十年來曾てない暖氣で、無心なる山川も笑つて入城の軍隊を迎ふるものゝ如くである。

攻圍方半歳敵將力難支、面縛開城降山河春日熙。

之より各部隊の北進を始むるまでの間は、旅順市街は露國の占領時代にも増して、一時の繁榮を極めた。日本の商人は酒保の外一人も居ない、利に敏い支那人は店を開き露店を出し、小料理屋を始め、餘程日本軍人の懐を絞つた。

四十九 弔魂と祝捷

死者の靈を慰むるは生者の義務

口繪を見よ

攻圍中或は敵彈の爲めに斃れ、或は病魔の犯す處となりて命を殞したるものは、其數幾萬なるを知らず。今や入城式も済み、此等の英靈を慰むるは、生者の義務ならん。茲に於てか入城式の翌日即ち十四日大弔魂祭は行はれた。祭場は水師營東方の高地にして、要塞本防禦線一帯の大部及二〇三高地をも望み得べき形勝の地である。此地を卜し、土囊もて一丈餘に堆積し、一尺角の白木に「第三軍戰死病歿各位之靈」と墨痕淋漓として記されたる靈標は立てられた。

前面の四脚臺には、戰病死者の名簿及玉串を載せ、大山滿洲軍總司令官よりの供物料金千圓を揭示し、椿薇薔等の造花酒餅魚鳥菜菓等種々の神饌を供へ。十二吋彈丸の下に二株の常綠樹は植ゑられ、其背後にも二個の巨彈あり、其左手に乃木軍司令官、北白川宮恒久王殿下、大山總司令官、代理田村副官、軍司令部幕僚、通譯官、外國武官、從軍記者、從軍僧侶、陣歿者遺族等居並び、攻圍軍諸隊は前面及左右兩側に戰鬪序列に依り整列す。

頓て軍樂隊は國の鎮め一回を奏す、軍司令官乃木大將は靈前に進み、最も壯

軍司令官の
弔詞

一語は一語
より悲痛

弔詞

旅順包圍戦

嚴にして而も悲痛なる音吐を以て左の弔詞を朗讀せらる。
此日霜深く密雲大空を蔽ひ天地も此壯嚴なる式を悲しめるものゝ如く乃
木將軍の一句一句朗讀せられ讀むで希典等諸子と生死を共にし而も生きて
……以下に至りては一人として首を擧ぐるものなく勇猛鬼神も恐るべき
將軍の眼底にも暗涙の漂ふを見一語は一語より悲痛に滿場寂として水を打
ちたる如くなりき。

弔詞

維時明治三十八年一月十四日第三軍司令官男爵乃木希典等謹みて清酌庶
羞の奠を以て我第三軍殉難將卒諸子の靈を祭る曩に我軍の關東半島に上
陸せし以來實に二百十有餘日其間諸子は克く勇往し克く健闘し或は鋒鏑
砲火の下に命を致し或は風餐雨虐の間に病歿せしもの少しとせず而も其
功業遂に空しからず茲に旅順口内敵艦隊の全滅に歸し敵要塞の降伏を見
るに至りしもの洵に諸子の遺烈に因る希典等諸子と生死を共にし而も生
きて 大元帥陛下より優渥なる勅語を下賜さるゝに會ひ願みて諸子が遺

祝捷會開か
る

大元帥陛下
の萬歳

烈を念へば豈獨り光榮を享くるに忍びんや嗚呼諸子と此光榮を頌たんと
して幽明相隔つ哀哉乃ち我軍の旅順に入るや諸子が忠血を以て染めたる
山川と要塞とを下瞰する處を相し先づ地を清め壇を設けて諸子の英魂を
招く庶幾くは魂や髣髴として來り饗けよ
將軍弔詞を畢りたる後も霎時佇立去るに忍びざるやの趣あり軍樂隊は再
び哀の極みの曲を奏し北白川騎兵少尉宮以下順次に拜禮し其間西本願寺連
枝大谷尊由師始め從軍僧二十三名は追善の讀經をなし式全く畢りたるは午
後一時三十分なりき。

大弔魂祭終るや一發の烟火を合圖に午後二時を以て水師營東方の空地に
於て祝捷會は開かれたり會場は約千坪を劃しアンペラを以て圍ひ入口には
白木の門を建て日章旗を交叉して祝捷會と記せる扁額を掲ぐ場内には急造
食卓數十脚を並べ諸處に炭火を焚いて場内を暖む將校同相當官高等官待遇
者約二千人は陸續場内に入り來り開會に先ち軍樂隊は君が代の曲を奏し乃
木大將は壇上に上り 大元帥陛下の萬歳を三唱し衆之に和す次で大迫中將

酒は内地も及ばず

戦場に在るを忘る

窓掛の敷物

旅順包圍戦
の發聲にて乃木大將の萬歳を唱ふ。
陣中の事なれば肴は折詰にて盃は豫め各自持參せよとの命あり酒は幸にも露人の置土産ありてシヤンペンあり葡萄酒あり陣中とは思はれず杯を舉る頃より烟火劍舞尺八講談仁和加假裝行列等ありて是でも兵卒の技なるかと感嘆に堪へぬもあり身は戦場にあるを忘れたるやの感あり半歳の勞苦は一時に償ひ得たるものゝ如くにて一同十分の歡を盡し午後五時に至りて司令官以下逐次退場せり。

五十 風俗の相違

風俗の違ふほど滑稽の多いものはない、某日兵營を巡視すると兵卒が綺麗な敷物を敷いて居る能く見れば五拾圓も値する窓掛である餘り惜しいもので敷物には使はぬ様にせよと云ふて檢べて見ると煙草の火を落したものと見へて幾つも焼穴が出来て居て最早役には立たぬ。
ステツセルの官舎には種々の洋食の器物が揃つて居たが入城當時茶碗の

露國のコップは湯に合

平扁盤の茶盆



▲ 望ヲ口港順旅リヨ上堡野麓西山金黃

一箇もないので兵卒がコップを二三箇持つて來た見れば氷菓子を入れる手の附いたコップである。夫れに熱い湯を注ぐものであるから悉くピンピン割れる兵卒曰く露國のコップは寒い國であるから湯に合ひません。
某日の事兵卒が黒い圓い平扁盤の上に茶碗を載せて茶を酌んで來た見れば蓄音機の平扁盤である。是は何と思ふかと聞くと何か知りませんが縁がなくて茶は零れますけれども圓いから茶盆の代りにしましたと濟して居る。八圓も十圓もす

旅順包圍戦

出征以來の
凝り解く

顔洗と含嗽
と反對

るものを茶盆に代用されては堪つたものでない。
 入城式も済み新聞記者の入城を許されたので攻圍中龍頭で近處に居た福
 岡日々新聞の長谷川華汀君が同業者三名を連れて十三日の暮方に訪ねて來
 た。偕何も響應は出來ぬが唯今夜は久し振りに氣持のよい寢臺を馳走すると
 云ふて發條附の寢臺に寝せたら翌朝になつて出征以來の身體の凝りが始め
 て解けたと云ふて悦むで居られた。西洋人には普通であるけれども攻圍中ア
 ンペラ一枚で支那家屋に寝て居たものには何よりの馳走である。
 始めの間多く仕損ずるのは洗面器である。日本の如く走り先に金盥があつ
 て水は随意に流れ去るのではない。室内に据えてあつて水を金盥の外に零す
 ことは出來ぬ。始めに顔を洗つて後に含嗽の水を吐出さぬと水は汚れて顔を
 洗ふことは出來ぬ。是れには屢困つた人がある。
 最も惜しかつたのは兵卒が書物を焼くのであつた。何の家に入つても古着
 や書物は澤山残つて居る。日本人は潔癖であるから隅から隅まで綺麗に掃除
 する。終には邪魔になるものは屋外に出して焼いて仕舞ふ。露人もまだ若干残

兵營の周圍
は開放

敬禮は出來

五十 風俗の相違

日本兵營には何處を見ても堅固な木柵か塀かで圍ふてある。是は兵卒計
 りでなく外來者の取締りにもなつて居る。然るに旅順の兵營を見るに周圍には
 何物もない。出入随意である。是は日本では眞似の出來ぬことで公德心が進む
 で居ると云ふべきか、一つには習慣もあらうが兎に角敬服の至りである。日本
 も早く斯くなりたいたいものである。左すれば全國兵營の垣の新設や修理費で、一
 箇年二萬や三萬の金を産み出すのは雜作はあるまい。
 著しく異つて居るのは便所の設備である。兵營の大便所は日本の小便所の
 如く、幾箇も並んで居て戸も何もない。兵卒は烟草を吹かしたり互に話をして
 便して居る。前を他人が通つても平氣である。無論上官が來たからとて中途
 で起立して敬禮する譯には行かぬ。此式であれば先づ戸を叩いて見る必要

露兵式以上

馬車を遣ら

聯隊長以上
は馬車

もない人の居るか居ぬかは一目瞭然である。日本兵には夫が出来ぬ、それで露國の兵營に日本兵が入ると、最先に便所の工事が始まつて、取敢へずアンペラか葦で圍ふた野雪隠が出来て、漸次に板造りの便所が出来ると云ふ順序である。習慣と云ふものは妙なものである。余が三十四年に支那旅行をして、北京の停車場に行いて見ると、朝のことであつたが、停車場から半丁計りも離れた草原に支那人が何百人となく屈むで居る。何をするのであらうかと思つて見ると大便をして居るのである。是は又露兵式以上である。然し全く平氣である。余が入城當時某砲兵聯隊長に遇ふた時馬車と獵犬を貰つて呉れぬかと相談があつた。大佐の云ふには馬車も本國に歸られたら入用であらう、是迄雇ふて居た支那人の馱者に、突然暇を出すのも氣の毒であるから、二箇月分丈の給料は遣はして置くからと云ふのである。「余も永く當地に居ることもあるまい、奉天方面に行くことであらう、左すれば馬車や犬を連れて行くことも出来ぬから折角の御厚意ではあるが、辭退する」と云ふて斷つた。露國では聯隊長以上には官給の馬車がある、日本の少佐や中佐位で馬車を貰つたら、夫れこ

中將も及び

當分は安心

砲は撃つた
儘

そ馬も馱者も餓えさすか、又は自分が餓えねばならぬ。露國の大佐の生活程度は先づ日本の中將位である。日本では中將でも馬車を持つ人は少い——否皆無であらう——併し日本人の此儉素な生活は何時迄も保存したいものであるが、永く平和が続くと、軍人は金線の綺麗な正服を着て、立派であるのを見て、漸々と貴族も志願する様になり、生活程度も漸次昂上するかも知れぬ之を制するは獨り上級者の考一つにある。去れど今日の俸給では、先づ其様な心配もあるまい。

五十一 兵器の整理

砲兵の数は漸々減り、水兵を砲臺に用ゆる位であるから、砲の數に比べて兵は不足であることは確である。従つて砲の手入等は充分でない。十二月三十一日まで撃つて一月一日には休戦になり、降服の内意も知れて居たので、砲は撃つた儘で、手入もしてない。我軍で受取つても、兵數が少いので、入城した兵が少いので、悉く使用すれば少くはない——急に手入も出来ぬ冬期であつたので

旅順包圍戦

幸であつたが、若し夏期であつたなら砲は錆びて廢物になつたのであらう。調査の結果我軍で收容した兵器彈藥の數は大略左の如くである。

大口徑砲	五十四門
中口徑砲	百四十九門
小口徑砲	三百四十三門
砲彈	八萬二千六百七十發
水雷	六十個
爆藥	千五百八十八個
火藥	三萬疍
小銃	三萬五千二百五十挺
拳銃	五百八十挺
軍刀	千九百振
小銃實包	二百二十六萬六千八百發
彈藥車	二百九十輛

機關銃なし

海岸砲臺は幼稚

輻重車 六百六輛
 雜種車 六十五輛
 乘馬具 八十七組
 輓馬具 二千〇九十六具

此表を見て誰も不審に思ふのは、機關銃が一門もないことである。戰爭當時の新聞にも、突撃すると烈しく機關銃に撃たれたことが書いてあり、又敵が撃つたのか、味方が撃つたのか、突撃するや烈しく機關銃の音のするの、余も現に聞いて居る。餘り不審なので、要塞内は隈なく搜したけれども、遂に一門も發見せなんだ。或は要塞に引繼ぐ前に、歩兵隊等の戦利品になつたものが多少あつたであらうが、一門もないとは、今に不審に堪えない。

砲兵の學術は我國より劣つて居ることは確實である。海岸砲臺では測遠機は砲臺の目であるが、黄金山に一個あつたのみで、他に一つもなかつた。聯合艦隊や閉塞船が、海岸砲臺から餘り有効な射撃を受けなんだのは、測遠機のない爲め精密に距離を測ることが出来なからであらう。

旅順包圍戰

露國は陸軍國で、海岸砲臺の研究は度外に置いて居る様である。世界中海岸の多いのは英國と日本であるが、英國は海軍が優勢で、海岸砲臺の必要もあるまい。して見れば日本は海岸砲臺に就ては第一の必要を認めて居る。従つて其研究も、世界一ではあるまいかと思はる。惜いことには敵の海軍が劣勢で、海岸砲臺の前に形を現はさなだのは残念であつた。

砲臺に突入して無念の戦死を遂げ、其死體は終に收容することが出来ず、憐れ敵手に委した將校の死體も少くない。其佩用した軍刀は悉く敵手に收容されて居た。其内には鋸の齒の如くに缺けたものもある。苦戦の状は之を見ても察せらる。又砲彈に當りてくの字形に曲つたものもあり、突入して直に斃れたものは少の疵もないものもある。此多くの軍刀の内には、先祖代々の名刀もあつたであらうが、幸に外國人には日本刀の鑑識が出来ぬので、名刀も取られもせず、良否混合で残つて居た。其内の多くは柄に定紋が着けてある。名譽の戦死の紀念にもなり、又一つは死體を收容することが出来ず、行衛不明となつて居た將校の戦死を確定する證據にもなるのであるから、大切に保存して出



望ヲ艦敵ルタレラセ沈撃リヨ頭埠下山玉白

来る丈けの手段を採つて、所有主を捜すことを勉めた軍刀に定紋を着けて置くことは、斯様な場合に利益がある。或は又羅馬字で氏名の頭字を彫刻して置くも一策であらう。南阿戰爭では、ダムダム彈を撃つたと云ふことであつたが、露國も日本人を野蠻人と思ひ、ダムダム彈を撃つ積りであつたか、或は撃つたかも知れぬ。收容した小銃彈の中に、ダムダム彈が若干あつた。公法上ダムダム彈を用ふることは禁制である。實に憎い奴と思はれた。戦利の彈丸數を見れば、八萬二千

彈丸の撃ち返す

十二時の彈丸を撃つ

大を以て大に酬ゆ

發以上ある是れ丈けあれば幾ら撃つても一週間位撃つ丈けある様であるが、其内には海軍砲の彈丸もある海軍砲の彈丸は陸の砲では撃てぬ余が整理した時に砲に依りては彈丸は皆無のものもあつた。

戦争中にも面白い事があつた敵から來た二十八珊の彈丸に腔綫の痕が二様にあると云ふものがある實際檢べて見ると我砲で撃つた不發彈を敵の方から撃ち返して夫が又破烈せなんだのである。

占領後黄金山砲臺に行いて見た時日本の二十八珊の彈丸が十發計り積むであつた是で敵が我彈丸を撃ち返したことが確に解つた。

攻圍の央頃からは海軍の出撃も到底勝算はないものと決心したものと見へ軍艦より時々十二時の彈丸が來たことがある。

乃木將軍とスラツセル將軍と會見の時にスラツセル將軍が攻城に二十八珊砲を用ゐられたのは日本が嚆矢であらうと云ふたので乃木將軍は守城に十二時の砲を撃つたのも貴軍が先頭であらうと云はれたさうであるが何方も大を以て大に酬ひたのである。

福井丸の砲

名譽の好記念物

後任者に托す

一長一短

我閉塞船も自衛の爲め一時諾典砲位は据えて居たものであるが夫が敵に奪はれて砲臺に据えて我武器を以て我を苦しめられて居た中にも廣瀬中佐の指揮した福井丸にあつた一時諾典砲が椅子山砲臺に据えてあつた器具箱の上に白ベイントで福井丸と書いてあつたのでそれと解つた廣瀬中佐が方向を誤り船は航路の中央に満足に沈没すること能はずして老虎尾半島の沿岸に乗上げ其身は憐れ敵彈の爲めに旅順口外一片の烟と消へ遺骸は永へに港外の海底に眠りたる名譽の好記念物である戦争中より廣瀬神社を建ると云ふことが新聞にも散見して居たので若し出來上れば記念として寄附したら宜からんと提議して置いたが余も轉任の命を受け四月十七日を以て旅順要塞を跡に見て盡きせぬ名譽を涼笛一聲一抹の烟を後に殘して歸國—凱旋—したので其後の處置は後任の弦木少佐に托して置いた。

五十二 大和魂とスラヴ魂

大和魂とスラヴ魂とは各一長一短あり我の彼に及ばざる點もあれば彼の

大和魂は火の如し

露兵は水の如し

火の勢

旅順包圍戦
我に如かざる點もあらう。一言にして盡すことは到底不可能である。又余の如き薄學非才而も文を以て世に立たざる半老漢の能く論斷することの出來ぬのは素より自覺の上であるが極めて簡單に物に比較して云へば大和魂は火の如くスラヴ魂は水の如しと云はゞ當らずと雖も遠からずであらうと思はる。

水の性たるや極めて柔順にして能く方圓の器に従ひ只一定の方向に就く一即ち低き方に一の特性を有するのみ然れども其性に逆うて阻止せんとすれば遂に非常の勢を以て決潰せざれば止まぬ火の性たるや其微々たる間は數杯の水能く之を消滅することを得れど其勢を逞しうしたる時は自然を待つ外の外力亦殆ど奈何ともすべからず然れども燃料盡くれば自然に消滅すること水の漸次蒸汽となりて飛散するより速である其性を利用すれば何物として向ふものはない鐵石熔かすべし大厦高樓荆棘叢林皆以て一掬の灰と化すべし然れども極めて扱ひ難い點がある一度指導の方法を誤れば反對方位に威を逞しうすることがある其害たるや水の指導を誤つたる比ではない。

旅順戦は兩性の發揮

彼彼の利腕に向ふ

斯く論ずると其兩性は終に枉げ能はずと云ふが如きも決して左様ではない長所を探り短所を捨て調節其宜しきを得れば何れも利用することが出来る土の動かす燃へざる如きではない。

旅順の攻防は此火と水との兩性を發揮したる劇戦であつた日兵の攻撃するや其勢火の如く其鋒に當るものはない然し露兵の之を遇する沈着水の如し火の盛なるや水は蒸汽となして飛散せしむるの力あれども其勢力に些少の不足ありても遂に消されて仕舞ふのである。

數回の攻撃に於て此度こそ陥落させねば止まぬ決心を以て掛りたる勇氣も多くは彼の水の如き冷なる應戦に僻易して最後の勝利は何時も彼れに占められた是は素より防禦法の至れり盡せるのが最大原因をなして居ること確であるが防禦は實に彼の長所である彼の利腕に向つて力を比べるのであるから何時も不利の戦をするのは當然である。

然し水は火の如く一本の燐寸より大勢力を起す譯には行かぬ其勢力を貯へることは甚だ困難である貯へ方が悪ければ漏つて無くなる自然に蒸發す

旅順包圍戦

る腐敗する旅順の陥落は、其腐敗と漏泄とが因をなしたのである。其事實を擧げて證明しよう。

露軍の敗因

露軍の敗因は種々雑多にして諸方面から觀察せねばならぬ。宗教の關係上露國に反感を懷きて居るものもある。猶太人の如き—征服の結果露國人となつては居れど、露本國を愛する念は少しもないものもある。露本國人たりとも、日本人の如き熱烈なる愛國心のあるものは少い様である。云は、冷淡である。

絶對的服従

上官と下士卒の間も、久しき階級の區別で、理由なく上官には絶對に服従するものと思ふ丈けで、心服したと云ふ譯ではあるまい。

下士は上下の楔子

上官たるものも、下士卒を見ること殆ど奴隸の如く愛撫と云ふ事は少く、多くは威嚇である。將校と兵卒との間に立ちて、將校の意を下に傳へ、兵卒の意を上に通じ、將校の目の届かぬ處を監視し、上下一致の楔子となるものは下士であるに、其下士の教育程度は極めて低い。兵卒を善導することは少く、兵卒の不良行爲には却て左袒する傾向がある。

將校も稍腐敗

將校其物も稍腐敗して居る點がある。自己の安逸を貪る點に於ては、至れり盡せりであるが、部下を愛撫し、下士卒と苦樂を共にする、進むでは部下の困苦を分擔すると云ふ考は極めて少い。前にもステツセル將軍の事を書いた處で云ふた通りである。

水の堰かるる如し

二〇三高地の戦争の時も、我聯隊の觀測所からは、背面が明瞭に見ゆる。眼鏡で見て居ると、將校は抜刀で入口に立つて居る。退却するものがあれば斬る。兵卒は進むも死退くも死等しく死するなら寧ろ戦つて死せんと云ふ風の様である。恰も水が堰かれて止むを得ず方向を更へると同様である。彈藥糧食は戰鬪に缺く可らざる要素である。之なくんば指揮官如何に勇猛なるも戰鬪を繼續することは出来ぬ。敵の彈藥庫の焼けたのを見るに、放火の疑あるものもある。戦争を厭ふ兵卒は如何にもして糧食彈藥を減少する手段を考へて居るもの、如くである。彈藥の整理中續々發見したる實例を讀者に紹介して、如何に上官の監視が不行届であつて、如何に兵卒が腐敗して居たかを知らしめん。

彈丸出づ
到る處より

虚言の様な
實事

旅順包圍戰

火砲や彈藥を受領したる後は、毎日砲臺や倉庫を巡視して員數を精査した。臨時に造つた砲臺の近處の低い處を捜すと、必ず新しく土を掘つた痕がある。其處を掘つて見ると、必ず彈丸が出て來る。黄金山砲臺は極めて海岸に近い處に在る。汐の干た時、彈丸が海中に落ちてゐるのが見ゆると云ふ報告を受けた。之は砲臺の上から轉ばし込んだのである。此處から拾ひ上げた彈丸でも、五十發以上であつた。小さい彈丸なれば、五十發位は論ずるに足らぬが、二十五珊の彈丸であるから、五十發は大したもの。確に一日の戰鬪は出來る。斯様なことは、日本の軍人の眼から見れば、眞に虚言の様であるが、實際に目撃したのであるから、決して虚言ではない。日本の軍隊では、斯様なことが出來る餘地がない。彈丸は號令して撃たせられて、撃つた終りには、撃つた彈丸と残りの彈數を報告する。夫れが記録に上るのであるから、決して間違ふことはない。

隱現的

水の水たる
所以

と、此砲は彈丸より先に砲聲が届くので、音が聞ゆると鳥渡兵が頭を隠す。彈丸が何處かに落つると、又直に出で、撃つ方を見始める。其様子を見るに、號令官があつて、撃つものとは思はれぬ。一人か二人の兵が命令を受けて、勝手に撃つて居る様である。何時間に何發撃つて、仕事は済むと云ふ、請負で撃つて居る様に思はれた。多分當らずと雖も、遠からずであらう。我兵卒等は、其出たり引込むだりする有様を見て、隱現的と云ふて居た。眞に射撃場の隱現的の様であつた。彈丸は撃ち出すけれども、良い處には來ぬ。遠かつたり近かつたりする。彈着を見て修正するものとも思はれぬ。我を苦める積りで撃つのではなく、言譯的に我方に向けて撃つて居るもの、様であつた。然れど、此處が水の水たる所以で、如何に我彈丸が烈しく行いても、決して遅れもせず、急ぎもせず、同じ様な時間に、彈丸を撃ち出す勇氣は、無神經と云はんか、遲鈍と云はんか、譽めて云へば、剛毅沈着と云はんか、決して侮り難い點もある。

日本軍は是迄負けたことがない。負けた時の經驗は、國家の不祥事であるか

負けた経験がない

家康の金言

勝敗は兵家の常

旅順包圍戰

ら遭遇することは出来ぬが、若し一朝戦闘不利に陥る時は、露兵一兵のみならず、將校までも一丈の沈着と處置は、或は出来ぬことにはあるまいかと、常に余の腦底に往來する疑問である。然し苟且にも負ける經驗をしてはならぬ、何處迄も勝ち通す覺悟でなければならぬが、少年時代から頭の禿げるまで戦争計りした家康も、勝つこと計り知つて負けることを知らざれば、害其身に至ると云ふて居る。或は金言ではあるまいか、戦不利に陥り、悲報交も到る底にありて、一絲亂れず企畫を立てるは、勝つて順調に乗じ、進め進めと指揮するより、困難であらうとは、誰も想像することである。勝敗は兵家の常と云ふこともあり、負けた時に如何に沈着して處置するかを學ばしむることは、勝つて順調に乗ることを教へるより、日本兵には必要ではあるまいか。元來火の如く燃へ立ち易い日本人の特性であるが、水の如く何時も冷なることは、不得手である。然れば缺點の方を矯正するが教育の本旨であらう。

五十三 文明の比較

六十有餘の
人種

臺灣さへも

沖繩の兵の
み
難きを責む
るに非るか

「大男總身に智恵が廻り兼ね」とは古い川柳であるが、露國の現勢がそれであらう。露國はベートル一世以來、領土擴張を以て其國是となし、爾來多くの領土を併吞し、現今に於ては、細別すれば六十有餘の人種と一億五千萬の人口とを算するに至る。其内に於て純粹なる露語を話すもの約六七千萬人ありて、其他は獨逸語を始めとし、各種の國語を用ゐて居る。之に教育を施すの困難なるは想像するに餘りあり。

日本に於ては二十七八年戦役後、我版圖に歸したる臺灣さへも、同化せしむるは勿論、臺灣語を以てするも、教育の困難なることは、識者の患ふる所である。露國兵に氏名を書き得ざる者ありとて、敢て怪むに足らず、従つて上流の者は多くの語學を辨へざれば、日用を辨せず、二三箇國の語を話さぬものは稀である。日本に於て國語の通せぬ兵卒と云へば、沖繩の兵卒のみである。夫さへ不便を感じ居るに非ずや、露國の普通教育の程度が低いと嘲るものは、難きを彼に責むるものに非るか。

日本は國の小さき關係もあらんか、國語は是迄一個である。臺灣朝鮮は別

日本以上ならん

日本國語の
真雜誌なし

として——其結果か、日本の將校に外國語の一つなりとも、充分に話せるものは、曉天の星の如くであるが、露國の將校には、本國語の外に、一二箇國の語を知らぬものは少ない。又學文の程度から云ふても、歐洲文明國の間に介在して居る丈けに、確に日本よりも進むで居る様に思はれた日本には、今日國語を以て書いた字書の類も、漸く出來掛けては居れども、淺薄なものである。露國には七十餘冊もある萬學辭書の出來て居るのを見た。

日本の將校は軍事の研究上如何にしても、外國の兵事雜誌を讀まぬ譯には行かぬ。是は本國語を以て書いた良雜誌がない故である。旅順に於て多くの書籍も收集したけれども、外國の兵事雜誌は一冊もない。自國語で書いたもの計りである。日本の將校とは違ひ、他國即ち獨語でも佛語でも讀み得るものは多數である。然るに獨佛の兵事雜誌のないのは、悪く云へば、研究心がないとも云へるが、善く云へば、自國語で書いたもので事が足るので、強ち他國語のものを見る必要がないのであらう。外國語の書籍もあつたが、學術的のものはない。小説か會話書か紀行文の類である。是は話を覺える爲めに讀むものと思はるゝ。

學術的の
外國書なし

焼けば爆發

モスクワ製
紙ケース

程度が低い

専門家に讓
る

決して學術研究の爲めではない。學術的のものは直に自國語に翻譯さるゝ爲め、外國書を讀む必要がないのであらう。余は狩獵好きで獵道具は直に目に着く方であるが、兵卒が空家の掃除をして、塵埃や不潔物は皆焼く、其中に焼けばバチバチと爆發するものがある。能く見れば獵銃の紙ケースである。兵卒は何か圓いものがある位で、知らずに焼いて仕舞ふ、檢べて見ればモスクワ製である。日本にはまだ紙ケースを製造する所はない。漸く砲兵工廠で、真鍮ケースを製造する位である。今日歐洲では、狩獵は貴族的の娛樂になつて居る。其娛樂道具の出來ぬのは、一方には儉素の風俗として譽むべきかは知らぬが、他方から云へば、文明の程度が低いと云ひ得るゝのである。

詳しく文明論をするは、専門家の範圍に屬することである。唯一二の感想を述べたに過ぎぬ。讀者敢て學者眼を以て見られざることを希望する。

五十四 凱旋

凱旋の途に就く

無論三等車

雲泥の差

一月四日入城以來往み馴れし土屋町の官舎を跡に凱旋の途に就いたのは、四月十七日の午前であつた。四月中旬と云へば内地は櫻も綻ぶ好時節であるが、旅順に於ては朝夕は零度以下に降る寒氣である。併し大連から乗船して、一晝夜も過ぐれば、朝鮮沖に掛るので暖くなることは解つて居る。其處で途中の邪魔にもなり、防寒被服丈は返納して仕舞つた。

乗つた汽車は無論三等車である。汽車の中は寒い。内地なれば蒸気が通ふか湯タンポのある時候であるが、戦地の事なれば左様な設備は無論ない。時としては無蓋貨車にも乗せらるゝのであるから、三等列車に乗るのは上の上である。戦地の事なれば何も駄も敏速でありさうなものであるが、汽車計りは非常に晚い。旅順と大連は僅に三十七哩計りであるが、五時間も掛る。大連に着いて見れば去年の七月に上陸した時に比べると雲泥の差である。上陸當時には露西亞町の方は空家計りであつたが、今は空家は殆どない。無いのみならず、到る

大連の繁昌

鎌倉丸に乗る

二十八冊榴弾

大功は榴弾

處に家屋の新築中である。變れは變るものである。官費旅行の事であるから、自分は兵站司令部に宿ることにしたけれども、金さへ出せば宿屋もあり料理屋もあり、何一つ不自由はない。七十年戦の後、獨逸の將卒が佛蘭西に償金の半分位は落して行いたと云ふことであるが、凱旋の將卒が大連に落した金も多額なものであらう。それが七分は支那人の手に入るのであるから、残念なものである。

大連に着いて兵站司令部に行いて見れば、同期生の山田少佐が司令官で萬事厚意に取扱ふて呉れた。歸航の船も一二隻ある内で、最も大きな鎌倉丸に乗ることに極めて呉れた。

十八日に乗船して見れば、二十八冊榴弾砲を積み込んで居る。旅順で大効力を現した榴弾砲と俱に、同じ船で凱旋するとは實に妙な縁である。朝より二門積込むのであつたが、何しろ大きなもので、一日に積込むことが出来ず、終に解纜は十九日となつた。

嗚呼旅順の陥落を餘儀なくしたる者は二十八冊榴弾砲である。始めは二龍

山東鷄冠山北堡壘に大破壊を行ひ、コンドラチエンコ中將を擊殺し、二〇三高地の堅固なる防禦工事を粉碎し、港内の軍艦を全滅し、終に旅順要塞をして最早固守するも希望なき悲境に立至らしめたる者は、主として二十八榴彈砲の手柄である。其榴彈砲も一門千發以上も發射し、數回の敵彈を受け、今は最早用に堪ゆるの望なく全く廢兵となつて凱旋するのである。今に靖國神社の境内に當時の悲惨なる情況を語り、見る人をして當時を追懷せしむるものはそれである。

榴彈砲の癡

二度見るこ
とが出来た

再び見ることはあるまいと決心した渤海の黃潮や、朝鮮の秃山も再び見ることが出来た。船には若干の歸還兵が乗つて居る丈で、殆んど空室である。外に高級者のないので、曾て宮殿下の乗られたと云ふ最上等の室に入れられた。出征の時は軍隊と一處であつたので、餘興もあれば遊技もあり賑かであつたが、其様なこともなく、誠に寂寥である。硝煙彈雨の中を潜り抜けて、命拾ひをして還ることであるから、嬉しさうであるが、左程に感じもない、何となく今少し戦地に居たい氣のみする。

山は塗り換
へた如し

朝鮮海も過ぎ日本の山が見ゆる様になる。山は變らねど、行途に見た時よりも猶一層青くなつた様に思はるゝ、それも其筈であらう。滿洲の秃山ばかり見慣れた眼に、急に日本の青い山を見るのであるから、山は塗り換へた様に見える。

二十一日の午後六連島に着いた陸を見れば、菜の花と麥が到る處を黃と青とで彩つて居る。如何にも繪の様に思はるゝ、年々見慣れた春の野は、斯様に綺麗であつたであらうかと疑はるゝ位である。苦に遇はねば、樂が解らぬ、飢えねば食物が甘くない、明媚なる風光も一度殺風景を見た後に、始めて眞の明媚が感ぜらるゝ。

旅順を出立する時は、稍失望であつた。波艦隊が來れば、先づ旅順を攻撃するであらう。然らば今日内地の要塞に歸るより、此處に居る方が戦争する公算が多い。大命如何ともし難いが、如何にも残念だと思ふた。然るに波艦隊は日本海に於て、我艦隊との激戦となり、戦況こそ解らなかつたけれども、馬關要塞には砲聲は殷々と聞えた。反對に旅順には何の感應もなかつた。是は確に曩の失望

砲聲聞ゆ

塞翁が馬

旅順包圍戦
が却つて幸福になつたのである。人間萬事塞翁が馬である。何が幸福になるか
何が不幸になるか豫期の出来ぬものである。

五十五 獲 鱗

實彈試験の
嚆矢

旅順の攻守は有史以來の激戦で又正式の攻城法も種々の戦術書に澤山書
いてあり學者の學說も千差萬別であるが之を實彈を以て試験したのは今回
が嚆矢である。世界各國は日露兩國が國帑を靡し人命を賭しての試験を無料
で陪觀した譯である。歐洲諸國は今にも戦端を開かんと虎視眈々として居る
けれど容易に手を出さない。猫の喧嘩の如く聲計りである。偶戦つた所で二三
等國同士の戦争で、餘り手本にもならぬ。近く南阿戰爭の如きも一方は文明國
なれど一方は半野蠻人である。加之野戦のみで攻守城戦は絶てない。去れば三
十七八年—一九〇四—一九〇五年—戦は世界の歴史に一大書線を描いたの
である。其戦争の一方の相手を日本がしたのは、例令幾億の軍費を負担すると
も、決して惜むに足らぬ戦争は一人で出来るものでない。

聲計り

名馬も驚化
す

實戦に非れ
は解らぬ
の値

考は崩れる

無事凱旋の
報恩

如何なる銘刀も使はねば錆びることがある。如何なる名馬も空しく槽檻に
伏せしむれば終には驚と化す。毎年の機動演習や大演習乃至特科兵の特
別演習は運用の演習こそ出来るが彈丸の中で命の遣り取りの演習は出来ぬ。
従つてどれ丈けの勇氣があるか腕前があるか判定は出来ぬ。實戦に非れば決
して實戦の價値は解らぬ。早いことが人と議論するに對面する前に考へると、
斯様云つたら斯様云つて遣らう。彼様云つたら彼様云つて遣らうと考へて置
いても、倅自分の考へ通に對手が来ぬと考へはガリ崩れて仕舞ふ。利害關係
の多いほど應對は困難になる。戦争は命を掲げての應對であるから是れ以上
に眞面目なことはない。余も例令不文なるにもせよ、戦史以外の見聞と所感と
を述べて知らぬ人に發表し、運能くば後世にも傳ふるのは、戦争に臨み無事に
凱旋した報恩と思ひ、筆を染めたのである。敢て讀者に購讀を勧むる譯でもな
い。唯折角の記録を空しく筐底に秘め置き、蠹蟲の好餌に供するも何となく物
惜しき心地して一人なりとも保存者を多く得て、一年なりとも永く後日に殘
したい素志に外ならぬ。

旅順包圍戰

自負の念に満たさる
隻手と兩手の争
勝つて兜の緒を締めよ

外債丈は一等國

終りに臨み、讀者諸君に一言述べ置くべき事がある。日清戦争は李鴻章の奸策に甘く翻弄せられて遂に三國干渉となり、國民の憤慨は極點に達し、報復の念は片時も止むなく臥薪嘗膽なる語が、國民一般に唱へられた。然るに日露戦争後の國民の感想は如何ん、世界の強國露に勝ち、日本も世界一等國の列に入れりと、只管自負の念に満たされて居る。何ぞ知らん、露國が滿洲に輸送した兵員は全軍の半數に過ぎぬ。如何なる大男も隻手を縛られては、小男に負けるのも無理はない。露國の隻手に日本の全力を注いで勝ち得たのである。決して樂觀し得べきではない。西比利亞鐵道も復線となり、輸送力の倍加するも遠き將來ではない。其曉に於て猶且勝ち得べき覺悟が肝要である。勝つて益兜の緒を締むるは此時である。慢心は百事破壊の基なるを忘れてはならぬ。

世界の一等國として恥かしからぬものは外債位であらう。是は確に數字の上から云ふて少い方ではない。年々の貿易は始終入超である。此外債は何時償却し終るか、商工業者は無論農民軍人に至るまで、緊蹙一番奮發するは、今の時であらう。軍備は益擴張すべし、貿易は出超を謀るへし、國力益豊富なるべし、決

樂觀の時期に非ず

して樂觀の時期に非ず、百戰百勝我も人も歐洲の霸主を以て許したる那翁の最後は如何に、慢心の結果に非るか以て鑑となすべし。

旅順包圍戰終

附錄

旅順攻圍中戰死將校人名表

(兵種ヲ示サ、ルモノハ步兵ニシテ、騎兵ハ(騎)砲兵ハ(砲)等ト記ス)

同	同	同	同	同	中佐	同	同	同	同	同	同	同	同	大佐	少將
山崎昇	藤本專	坂井源八	平賀正三	土橋吉次	服部直彦	酒井甲子郎	吉田新	寺田錫類	蘆澤正勝	三原重雄	大木房之助	大内守靜	山本信行		
同	同	同	少佐	同	同	同	同	同	同	同	同	同	中佐		
瀧澤兵七	枝吉磨	原田清次郎	三宅義任	本郷源三郎	田中貫一	勝田敏郎	遠藤五郎	伊藤民四郎	中西俊豪	木庭堅磐	折下勝造	佐久間金吾	廣中俊豪		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	少佐		
松坂政一	中村光壽	橋本正壽	阿久刀川寬海	篠田武藏	河西終藏	弘中藤吾	高松公重	石井金吉	笹島治太郎	山越莊三郎	生越安貞	沼田芳郎	中原松之助		

附錄

附錄

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大尉

(工)

漆原政造 水室新藏 中田博次郎 幸田健輔 白井種吉 杉原信市 熊谷國藏 橫山次郎 村上義十郎 宮田甚平 雨宮甚平 山本和平 久松省三 今松榮八 淺井正臣 加藤哲四郎 加藤金次郎 高洲良三

同 同 同 中尉 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大尉

(砲) (砲) (砲)

友野圓三郎 田口億治 山口守雄 佐藤誠治 小倉信造 井口正 安藝加久 堀江小圓藏 桑村正成 川戶德熊 高岡重次郎 百濟九郎 熊川良作 杉浦周三 鈴木順平 乃木勝典 萩原長治 細井英治

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 中尉

丸山盛宣 樋口兼治 佐藤康太郎 小出俊藏 柿沼貞一郎 大島貞七郎 鷹木大象 大森平太 工藤信夫 加地辰巳 清水修六 鹽澤登四郎 荒井重雄 岡本經忠 加藤孝一 保坂庄曹 石井彪雄 永田忠治

旅順包圍戰

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大尉

伊藤吉太郎 村上五郎哉 山本正太郎 櫻井傳吉 真弓喜太郎 寺原三二 万波國太郎 志水武一 原田覺一 古田都三郎 有木幹一 小日向令二 粕谷元 加納道男 野安多魯 吉田貞三郎 篠井銀吾 松村直樹

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大尉

(砲) (工) (砲)

馬島儀三郎 小野醇 近藤德太郎 熊切敬信 鈴木義美 古川清美 橫井米次郎 丹野重雄 杉田耕三 村田昶三 淺井吉之助 杉本政吉 酒井卯吉 菅田正 吉田貞市 松丸淳一 瀨川國男 松岡正彰

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大尉

村上政太郎 中城虎雄 川上喜八 小笠原晴馬 大黑正幸 戒田善三郎 清水勇造 青柳一 小松保衛 麻植芳太郎 小山西雄四郎 隅田樾次郎 平田重敏 杠佐五郎 井上嘉門 三好仙三郎 古澤正義 橋本鹿之郎